

雁夜おじさんのバオー来訪者ネタ Staynight編

蜜柑ブタ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

Fate×バオー来訪者のクロスオーバーネタの、Stayning ht編。

zero編から、Stayning編へ。

書く予定なかったけど、Fake編が行き詰まっているので、書きました。

桜↓雁夜前提。

あと、剣鞘（セイバー×士郎）です。

zero編からの続編なので、雁夜含めて死んでる人が生きてたりしてます。注意。

それでもOK！ バッチコーイ！って方だけどうぞ。

目次

SS22	愛	149
SS21	旧敵	145
SS20	恋路	141
SS19	進化	135
SS18	狂化	124
SS17	救出	113
SS16	誘拐	109
SS15	気狂い	103
SS14	告白	96
SS13	口づけ	91
SS12	奪還2	81
SS11	敗走	72
SS10	奪還1	65
SS9	想定外	58
SS8	逆鱗	52
SS7	横槍	45
SS6	妹	41
SS5	正義	36
SS4	狂戦士	27
SS3	仕置き	22
SS2	友愛	18
SS1	不本意	13
SS	プロローグ	7
	設定 話が進むと増えたり、変更したりする	1

最終話
SS24
新学期
未来
SS23
決戦

168 161 156

設定 話が進むと増えたり、変更したりする

Fate／zeroから、Fate／Staynightへ。

時間軸は、秘密機関ドレスを滅ぼしてから、五年後。(ドレスを五年かけて倒した)

高校生になった桜に、令呪が現れたことで、第五次聖杯戦争に巻き込まれることになる。

※桜↓雁夜前提。

劍鞘。

◇登場人物設定

・間桐雁夜(まとうかりや)

原作では故人だが、このネタでは、ツツジにバオーを与えられていたので生き残っている。

Staynight編では、令呪はない。

その代わり桜に令呪が現れてしまったため、桜を護らなければと空回りすることになる。

バオーの影響か、zero編から10年過ぎているが、容姿が変わっていない。

SS13で、桜にファーストキスを捧げた。

SS18で、バーサーカーとの戦いで、頭を半分潰されたが、辛うじて脳内のバオーが生きていたため、まさにゾンビ状態で生き残る。SS19で、ツツジの助けにより血に宿る間桐(マキリ)の魔術である吸収を使うよう進化して、バーサーカーの命を3つ吸って復活を遂げる。

・間桐桜(まとうさくら)

原作における三人目のヒロイン。

本人の意思に無関係で、令呪が現れたことで不本意なままライダーを召喚することになった。

衛宮士郎のことは、お料理を教え合う関係の先輩後輩。凜のことは、あくまで他人だと断言している。

秘密機関ドレスとの戦いの最中で、魔術を身につけていき、元々の体質である虚数属性により、影を使役する謎の魔術を自由に扱えるようになっていく。

雁夜に対して、恋愛感情を持っており、そろそろ夜這いをかけようかと思った矢先に令呪が現れてしまったため、とつとと面倒ごとを終わらせたいと聖杯戦争に参戦する。

聖杯にかける願いは無く。雁夜からの話で、聖杯が良くないモノであることから、もし自分が勝者になったなら聖杯を破壊するつもりでいる。

・ツツジ

zero編から引き続き登場するオリキャラ。

雁夜にバオーを与えて生き残らせた張本人。

こちらも容姿が変わっていない。

空回りする雁夜を援護すると同時に、聖杯戦争を戦い抜こうとする桜の後援もするつもりでいる。

アーチャーとランサーの戦いを目撃してしまい、心臓をランサーに射貫かれて死んだ士郎にバオーを与えようとしたが、凜に全力で止められている。それがきっかけで何かにつけて士郎にバオーを与えようとするので、凜とセイバーが止めに入るというスパイラルをやっている。

SS14とSS15にて、発情期を起こしてしまい、体内にいる、マザー・バオーに意識をほとんど持って行かれて暴走を起こしてしまう。だが、ランサーから大量の魔力を吸引したことで、酔いを起こし倒れる。

・ライダー

桜の令呪により召喚されたサーヴァント。

もつとも、原作と違い、儀式も無しに聖杯のシステムの関係で勝手に呼ばれてしまったため、昔雁夜が破壊した元蟲蔵に放り出されるという変な状況になってしまった。

基本的にレズビアン指向であるが、男に興味が無いわけではないため、バイセクシャルかもしれない。

SS7で、セイバーと対決し、セイバーの魔力不足による実力が伴っていない状況を露天。逆にライダーは、魔術師としての実力を付けている桜のおかげで魔力が多く供給されており、原作以上の実力を発揮。

・遠坂凜（とおさかりん）

遠坂の長女。桜の実の姉。

zero編で、廃人のようなってしまった父・時臣から、若くして遠坂を継ぐ。

五年前に当主を失っている間桐邸に帰ってきた妹・桜が魔術協会に狙われないか心配しているが、桜からは完全に他人扱いされている。

時臣から雁夜の異常な力を聞いており、その原因を作ったツツジを同時に警戒している。そのため、ランサーに心臓を射貫かれてしまった士郎にバオーを埋め込もうとしたツツジを全力で止めて自分が蘇生させた。その後も諦めず士郎にバオーを与えようとするツツジをセイバーと共に止める。

・アーチャー

凜に召喚された謎の英霊。記憶が無いとのことで真名が不明。

弓兵クラスだが剣も得意とする異様さを持ち、士郎を目の敵にしている。

ツツジからは一目で嘘を吐いていると見抜かれ、士郎と似過ぎる匂いがしていると言われてギクツとなっている。そしてそのことは

内密に！つと頼み込んでいる。

その正体は、英霊の座へと至った、未来の衛宮士郎。真名は、エミヤ。

士郎がツツジによって雁夜と同じバオーにされかけていることは、自身に至る道を違える可能性を見いだすと同時に、英霊より厄介な代物ができあがる可能性も高いので、凜と共にツツジを止めに入っている。

・衛宮士郎（えみやしろう）

10年前の惨劇後、衛宮切嗣の養子になった生き残りの少年。

Stay night 原作における主人公。

桜とは、料理を教え合う先輩後輩の関係だが、それ以上でもそれ以下でもない。

雁夜に恋する桜を応援している。

ランサーに心臓を射貫かれたあと、ツツジにバオーを埋め込まれかけ、凜がそれを止めて凜に蘇生してもらっている。原作における主人公ゆえか、ツツジに気に入られ、何かにつけてバオーを与えられそうになる。その都度、凜やセイバーが止めに入るといふスパイラルになってしまった。

人間をやめたくはないが、雁夜がバオーを発動したときの力には興味があつて悩む。

・セイバー

zero編で、切嗣をマスターとしていたサーヴァント。時を超え、士郎に現れた令呪と、士郎に埋め込まれているアヴァロン（エクスカリバーの鞘）により召喚された。

ランスロット（バーサーカー）の件で、雁夜達には借りがあり、セイバーとライダーが生き残ったならば、ライダーを持つ桜たちの方が聖杯戦争を降りると約束し合う。

士郎とは、切磋琢磨の末、男女の関係になる。ただし、セイバーは、士郎を自分の嫁だと公言している。

・ギルガメツシュ

zero編で、アーチャーとして召喚された英霊。zero編最後で聖杯の泥を食い破って実体化を果たした。

五年前に帰ってきたツツジの情報を聞いて、マジで落ち込むほどツツジが苦手。

買い物帰りとかによく遭遇するため、マジで教会に引きこもりそうになった。

・ランサー

アーチャーとの初戦で、その戦いを目撃した士郎を殺害。

それを見た雁夜とツツジに、撃墜される。

SS15にて、出来心でツツジを追った結果、生理中で気がおかしくなったツツジに押し倒され、首を噛まれて大量の魔力を奪われることとなった。

・間桐慎二(まとうしんじ)

間桐の血筋で、雁夜から見れば甥っ子。桜の血の繋がらない兄。

父・鶴野に魔術の才能が受け継がれていなかったため、息子である彼にも才能は無い。

雁夜達がドレスを倒すために旅立ったあと、父・鶴野が雁夜から逃げるために共に避難していたが、聖杯戦争のことを知って自分だけ舞い戻り、桜からライダーを奪おうと画策するも、雁夜からげんこつを食らい、さらに圧倒的な魔術の力を振るう桜に返り討ちに遭う。

・イリヤ&バーサーカー

アインツベルンから来たホムンクルスの少女と、そのサーヴァント。

イリヤは、アイリスフィールと衛宮切嗣との間に生まれた娘であるが、胎児のうちに調整を受けておりその性質はホムンクルスに近い。さらに第五次聖杯戦争までの年間で小聖杯として調整と教育を

受けて第二次成長期で成長が止まっている。

バーサーカーの正体は、大英霊ヘラクレス。狂化により理性を失っているが、イリヤを大切にしており従っている。

士郎を強襲した際に、桜を守るために駆けつけた雁夜により、バーサーカーは、一回以上殺された。

・
・
・

話が進むとと、変更したり、増えたりします。

SS プロローグ

「なにやっとなんじゃー！ー！！」

「ぶげふっ!？」

緊迫した英霊同士の戦いの初戦は、男一人と少年のような少女のその叫び声と共に、二人が槍兵クラスの英霊にリアットを前後で食らわしたことでぶち壊しになった。

槍兵クラスの英霊は、バタリと倒れ、カランカランと、先ほど高校生男児の心臓を射貫いた槍を落とした。

遠坂凜は、困惑した。

そして彼女の英霊である弓兵のサーヴァントもポカーンっとしていた。

「ああああ！ ちくしよう！ サーヴァントの匂い辿ってきたのに、早くも犠牲者かよー！」

「仕方ないなあ…。じゃあ、これ…。」

少年のような少女が、モゾモゾとどこからか何かを出した。

それは、ソレを掴まんでいる指の間でピチピチと跳ねている。

「おいっ！ 待てー！」

「早くしないと、この子完全に死んじゃうよ？」

「いや…、でも…それ…。」

「待ちなさい！」

「ん？」

凜がたまらず叫んで止めた。

「なにをしようとしてんのよ?！」

「えっ? なにって…、コレを埋め込んで…。」

「ダメ！ ダメよ！ そんなことさせないわ！」

「でも、そうしないと、この子完全に死んじゃう…。」

「私が生き返らせるから！」

「えっ？ そんなことできるの？」

「だから、あんたはどっか行って！ 雁夜おじさんも、もつと本気で止めなさいよ！」

「えっ？ もしかして、凜ちゃん？ …大きくなったね。」

「ええ、久しぶり…。じゃ、なくて！ もういいから、ここは私がなんとかするからさっさと帰って！」

凜は、泣きたくなるのを堪えて、雁夜と呼ばれた男と、少年のような少女にさっさと帰れと言った。

「えー、でも…。」

「いい加減にしないと燃やすわよ！」

名残惜しそうに、血を流して倒れている高校生男児を見つめる少女。

「…：むう、仕方ないなあ。」

「ツツジ…、なんだ、急に、唐突に…。」

「いいじゃん。あの子って…、桜ちゃんの知り合いじゃないの？」

ほら、鞆の名札に、衛宮士郎（えみやしろ）って…。」

「あ…。」

「帰りなさいーい!!」

「うわわっ！」

帰らない二人に、凜がキレて、ガンドを放ってきた。

雁夜とツツジは、慌てて帰って行ったのだった。

二人が帰っていったあと、凜は、蘇生の魔術を使って、衛宮士郎を蘇生させたのだった。

「へえ…、ほんとに出来るんだあ。」

帰らず、物陰から様子を見ていた雁夜とツツジであった。

「でも…。」

「どうする気だ？ まさかだけど…、おまえ、あの高校生をバオーにする気か？」

「うん。」

雁夜からの問いに、ツツジは軽く返事をした。

「おまえな…、俺と違ってなんの了承も無くそれをやるってのは…、さすがにどうかと思うぞ？」

「そうだね。だから今度は生きていく内になるかどうか聞いてみるよ。」

「おい！ なにを見込んでそこまでするってんだ!？」

「単純に…気に入ったから。」

「なんだその不純な理由!？」

「不純じゃないよー。」

「いや、十分不純だつーの！ 今まで色恋沙汰ゼロだったお前が、なに!？」

「なんか失礼だね。私だって普通の人間の感性は持つてる…と思ってるよ。」

「微妙なこと言うな!」

「まあ、それはそうと、早く行かないと、また殺されちゃうから…行ってくるね。」

「待てよ!！」

雁夜の制止も聞かず、ツツジは、生き返った士郎を追って行ったのだった。

ランサーに追われた士郎を追って、彼の自宅まで来たツツジは、そこでもう一つのサーヴァントの匂いが発生したのを匂いで感じた。

「この匂い…、セイバー?」

覚えがある匂いだったので、記憶にある名前を呟いた。

それから遅れて凜がやってきたりもして、ランサーは、撤退。そして隠れていたツツジも…。

「そこにいるのは分かっている。出てこい。」

「ん？ あなた……。」

アーチャーに見つかり姿を見せたが、ツツジは、近くで感じ取ったアーチャーの匂いに少し驚いた。

「ちよつと、どうしているのよ!？」

「これを渡そうと…。」

「!？」

ツツジの手の上で、ピチピチ跳ねているそれを見て、パンツッと凜が手ではたき落とした。

地面に落ちたソレに向けて、ガンドをありったけ撃ちこみ、ハー…つと凜は荒い呼吸をした。

「なにもそんな、Gがつく生き物を徹底的に殺すみたいに…。」

「Gよりたち悪いわよ！ あんたが誰よりも分かっているでしょうが!？」

「へー、私のこと知ってるんだ？」

「ええ…。お父様から色々聞いてるわ…。」

「おとうさま？」

「遠坂って言えば分かるかしら？」

「ああ、時臣さん？ あの人の娘さんって事は…。」

「ええ。あの子の姉よ。」

「ふーん。」

特に興味はなさそうに、ツツジは声を漏らした。

「どうでもいいけど、帰ってくれる？」

「どうしたんだ、遠坂？」

そこへ騒ぎに気づいたららしい士郎がやってきた。

凜は、舌打ちをしかけた。

「誰？」

「初めまして。私は、ツツジ。桜ちゃんがいつもお世話になってます。」

「桜？ ああ、間桐か。こちらこそ…。どうしたんです？ こんな藪遅くに…。」

「士郎、あんたは家の中入ってて！」

「えっ？ なんでき？」

「コイツは、たち悪いのよ！ だから関わっちゃダメ！」

「えっ？ 間桐の家の同居人って聞いてるけど？」

「いいから！」

「今日のところは帰るから。じゃあね、衛宮くん。」

「あ、はい。」

ツツジは、ニコニコ笑いながらやっと去って行った。

ツツジがいなくなり、緊張の糸が解けた凜が、その場にへたり込んだ。

「おいおい、遠坂？ だいじょうぶか？」

「……絶対…。また来るわ…。アイツ…。」

今日のところは…っと明らかにまた来ることを匂わせる言葉を残していったことに、凜は、プルプルと震えた。怒りとかなんや分かん感情で。

ツツジ。

その名は、父・時臣から聞いている。

母・葵の知人である雁夜に、バオーという力を与え、異形の者へと変えた張本人だと。

そして、雁夜と共に魔術師としての桜の進路を絶つたのだと聞いていた。

……最後の方は、時臣の認識違いもあるだろう。なぜなら、ここ数年の間に凜は桜に尋ねたのだ。なぜ魔術の道を捨てて、雁夜と共にいるのかと。

『他人の貴方には関係ない。』

桜は、キツパリと凜を他人だと言い答えなかった。

第四次聖杯戦争から五年間、どこで何をしていたのかも知らない。聞いても答えてはくれない。

父・時臣からは、もし隙があれば雁夜から桜を取り返したいと言っていたが、桜は、遠坂に帰ることを拒絶している。

母・葵は、約十年前のある日を境に、塞ぎ込むようになり、今日も部屋にこもってしまっている。これは、時臣にも言えることで、あれほど熱心だった魔術の研究もせず、日がな一日廃人のようにぼう然としている姿がよく見られるようになった。

言峰綺礼から、かつて使役していたサーヴァントに裏切られたとは聞いていた。あの王の中の王だと言っていた英霊に裏切られたのだ、そのダメージは計り知れないだろう。しかし凜は、あの時、同時に弟子である綺礼にも裏切られていることを聞いていないし、聞かされていない。時臣自身があの時のことを思い出したがらないので、彼の口から語られないし、凜も聞いちゃいけないと思っただけであって聞かないでいたためにこうなったのだ。聞いたら最後、恐らく時臣はぶっ壊れるだろう、そんな予感がして……。父のそんな姿を見たくない凜は、いつか真実にたどり着けるだろうか……。

凜は、多くの不安を抱えたまま、第五次聖杯戦争に挑む。

いかなるイレギュラーによる困難が待ち受けていても……。

SS1 不本意

桜に、令呪が現れた。

異変に気づいたのは、アーチャーとランサーの戦いが起こる数日前だ。

雁夜は、それはそれは慌てた。

あの陰惨な戦いに桜が巻き込まれることになったなどと、許せなかった。

桜は桜で、冷静ではあったものの…、心底面倒くさがっていた。

桜は、今年でやっと16歳。日本の法律で結婚できる年齢になったばかりだ。

待ちに待ったその年齢への到達で、恋愛対象になっている雁夜に夜這いを…と計画していた矢先にコレだ。

正直、聖杯にはこれっぽっちも興味もないし、欲しいとは思っていない。

なぜなら、雁夜から、冬木市で起こったあの惨劇の原因が聖杯だと聞いているからだ。つまり聖杯は願望器なれど、その性質はとてもじゃないが願望器とはほど遠いのだと分かった。

桜は、自身の右手の甲に現れた令呪を見つめ、あー、やだなあ…っという感じでため息を吐く。

令呪が出たということは、必然的にサーヴァントも来るはずだ。触媒など持っていない。だから何が来るかは分からない。

もしそのサーヴァントが自分や、雁夜に仇をなす存在なら、速攻で自身が使役する影で飲み込んで分解してやるつもりだ。

桜は、間桐邸に帰るまでの五年間で、自分の影を操り、実体を持たせたりするなどの謎の魔術を会得した。その能力は、間桐の吸収の魔術と合せることで、対象を影に飲み込み、分解吸収するという技になった。

「サーヴァントを呼ばないって選択肢はないの？」

ツツジが食事を食卓に並べながら、何気なく聞いた。

箸を並べていた雁夜は、うーんつと悩んだ。

雁夜は、聖杯戦争のシステムというかそういう詳細を知らない。あの頃は、ただ参加することだけを目的に必死でその詳細情報を聞く余裕が無かった。そもそもあの頃は、聖杯戦争を降りるという選択肢がなかったのだ。

その時だった。

外の方で、何やら、ドガンという音が聞こえた。

「なんだ!?! 襲撃か!?!」

早くも令呪を持つ人間を排除しようとする輩が来たのかと身構え、外に出る。

「雁夜、あつちの方だよー!」

ツツジが、昔雁夜が破壊した蟲蔵の方を指差した。

焼け残った瓦礫だけが残っているそこに、二本のスラリとした足が見えた。

「あれ? この匂い……。サーヴァント?」

すると、二本の足が、ジタバタと動いて、瓦礫から何かが起き上がった。

それは、女性の形をしていた。

目をベルトのようなもので隠しており、長い髪の毛は美しく、妖艶な肢体をしている。

謎の女性は、よろつきながら、立ち上がり、こちらを見てきた。

「……あなた達が、私を喚んだのかしら?」

「喚んでないわ。」

桜がキツパリと言った。

「それはおかしいわね……。あなたとの魔力の繋がりを感ずるのに……。」

「じゃあ、今すぐ切つて。」

「それは、困るわ。いきなり喚んでおいてそれはなしよ。」

妖艶な女性……。サーヴァント(?)は、そう言って困ったように大げさに振る舞った。

「まあまあ、とりあえず家の中入ろうよ。見られたら色々面倒で

しよ?。」

ツツジの鶴の一声で、そういうことになった。

サーヴァント(?)の女性を家に上げ、食卓に連れて行って、食事をしながら話をした。

「つまり…、あなたのクラスは、ライダーで。真名は、メドゥーサなわけね? まさかあの伝説の怪物がこんな綺麗な女の人だなんて思わなかったなあ。」

「それは、私のこの姿が、神話上の怪物になる前の姿だからですわ。」
「けど、目を隠してるとって事は……。」

「そうよ。私の目には、相手を石化させる力があるわ。」
「嘘は…言っていないわね。」

「ええ。嘘は言っていないわ。」
「まさか触媒もなしに、召喚することになるとはな…。」
「どうする? 桜ちゃん?」

「…：召喚されたモノは仕方ないから、このまま戦う。」
「えっ! 桜ちゃん、それは…。」
「だって面倒ごととは置いといても余計に面倒になるだけだもの。さっさと終わらせるわ。雁夜さん、だいじょうぶよ。私、戦える。」
「だ、ダメだ、ダメだ!」

戦うという桜に雁夜がダメだと言った。

しかし、桜の意思は硬く、首を横に振った。

「桜ちゃん、ダメだ! それなら俺が戦うよ!」
「ううん。私だって、もう子供じゃないもの。私だってもう弱かった頃の私じゃない。だからだいじょうぶ。」

「でも…!」

「その代わり…、私の戦いを援護してくれるよね?」

「も、もちろんだ！　もちろんだよ！」

「私のことも忘れないでね、桜ちゃん。」

「うん！　ツツジさんもお願ひ！」

ギユツとツツジと手を握り合う桜に、雁夜は、猛烈に不安になった。

第四次聖杯戦争の経験者である彼は、できることなら桜にあんな陰惨な戦いに赴いてほしくはない。

だが運命は、桜を選んでしまった。

そしてこうして、サーヴァントがやってきてしまった。

令呪を自分へ移すという技法や方法を知らない雁夜にはどうすることもできなかった。

食後……。

「ま、考えてることはなんとなく分かるよ。」

「ツツジ……。」

「桜ちゃんが戦う前に、終わらせちゃえばいいって思ってるでしょ？」

「……分かってるなら……。」

「いいよ。私も協力するから。」

そうして、二人は夜になってライダー以外のサーヴァントの匂いを辿った。

そして、アーチャーとランサー、そしてランサーに殺された衛宮士郎を発見することになったのだった。

早くも犠牲者が出て、しかも桜の知人だったこともあり、雁夜は落ち込んだ。

その場に居合わせていた凜のおかげでなんとかあったが、ツツジが何を見込んだのか士郎をバオーにしようとしていた。

しかし、凜に止められ、最初は諦めたフリをしていたが、どうしても士郎をバオーにしたいらしいツツジは、雁夜の制止を振り切って士郎のところへ行ってしまった。

その後一時間とせずツツジが帰ってきたが、どこかガツカリしたような顔をしていた。

「で？ どうしたんだ？」

「時臣さんの娘さんに邪魔されちゃった。」

「凜ちゃんか…。そりゃ止めるわ。」

「でも、いいもーん。機会はいくらでもあるからね。」

「どーしてお前は、こだわるわけえ!？」

「だって…、気に入ったんだもん。」

「もん、じゃねえよ！ そんな理由で巻き込まれたらたまったもんじゃねえよー！」

「案外慣れるもんだよ。」

「俺なんてお前に無理矢理埋め込まれたから仕方なく、こうなっただけで、あの子がそれに耐えられるとは限らないだろうが！」

「えー。私、ちゃんと聞いたよ？」

「俺は答えた覚えはない！」

十年前のあの時…、雁夜はツツジにバオーにされることを了承した覚えはなかったと、昔の話を蒸し返されて怒った。

「ま、いいじゃん。結果オーライだったし。」

「…うう…、俺が今ココで生きていられるのは、確かにお前のおかげだけど…、なんか納得がいーん！」

うまいこと丸め込まれることに、雁夜は、頭を抱えたのだった。

こうしてなんやかんやで、桜は、本人の意思に関係なくサーヴァント・ライダーを得て、聖杯戦争への参加権を得たのだった。

SS2 友愛

「士郎くん。」

「はい？ なんですか？」

「人間やめてみる気…ある？」

「はっ？」

「ダメに決まってるでしょうがー！！」

「そのようなこと、させません！」

「……なんですか。」

あの夜から、士郎の非現実的な日常が始まった。

まず第一に、逃げ込んだ土蔵で光と共に現れた美しい金の少女、セイバーが自分のサーヴァントなる存在として同居することになった。

セイバーのおかげでランサーから逃れることは出来たが、その後同級生の遠坂凜から、聖杯戦争のことを聞いても、どうにも現実離れしすぎていて実感が無かった。

さらに後日から、よくツツジと遭遇した。

そして、上記のことを急に聞かれるのだ。

人間をやめてみないかっといきなり聞かれても、答えはNOだ。そしたら、目の前にどこから出したのか分からない、ミミズのような足の無いムカデのようなモノを出されて、顔に近づけられた。

すると、どこからともなく凜が走ってきて跳び蹴りをツツジに食らわせようとするも、ツツジは、ヒョイツと後ろに反れて避けてしまふ。

士郎に近づくな！つと、ギャイギャイ叫ぶ凜。残念そうにするツツジ。

セイバーも走ってきて、そこでようやくツツジは退散する。

「士郎…。お願いだから、あの女にだけは近づかないで…。」

「なんですか？ ただの後輩の同居人だろ？」

「彼女は、変な虫をあなたに寄生させようとしてるのでですよ！

さつき顔に近づけてたでしよう!？」

「あれ、玩具じゃねえの?」

「どこをどう見ればアレが玩具に見えるのよ!? とにかく! 絶対に人間をやめることを了承しないでよね! 分かった!？」

「わ、分かってるよ…。」

「人としての誇りを捨てて、異形の身に落ちないでください。」

「分かってるって。」

凜とセイバーに挟まれ、そう言われて、士郎はうんざりしたように言ったのだった。

昼休憩中。

「つて……ことがあつてさ。」

「ツツジさんが、そこまで人に執着するなんてすごく珍しい。」

昨日作った料理の試作品を交換しあつて、味の評価をする。これは、士郎と桜、二人の間でよくやっていることだ。

「俺、何かやったかな?」

「先輩は何もしてないと思いますよ。ツツジさんって、気まぐれなところあるから。」

「気まぐれで、俺に寄生虫をつけようとしてるってことか?」

「ここだけの話ですけど…。」

「なんだ?」

桜が声を潜めて言った。

「雁夜さんに、その寄生虫をあげてるんですよ、ツツジさん。」

「えっ?」

「それで、すごい力と生命力を手に入れたんです。」

「なんだそれ…、寄生虫だろ?」

「その時は、雁夜さん…死にかけてたから、そうしないとマズかった

そうです。」

「俺、生きてるのに？」

「もしかしたら…、先輩が死ぬかもって思ってるのかも。」

「えっ…。」

殺される心当たりがないわけじゃない。

つい最近の夜に、ランサーに一回殺されたのだ。

「ツツジさんの勘はよく当るんですよ。」

「こえーこと言うなよ…。」

「私だつてそう思いますけど…。なんでしたら、私が守りましょうか？」

「いや、そこまでしてもらわなくても、自分で自分の身ぐらい守るさ。」

「本当ですか？」

「あー、だいじょうぶだつて。」

「それならいいですけど。」

「あ、これ、前より塩多くしたか？」

「分かります？ その方が引き立つかと思つて。」

「いいんじゃないか？」

「本当ですか？ 雁夜さん…、喜んでくれるかな？」

うつとりと雁夜の姿を思い浮かべている桜。

そんな桜の様子に、タハハ…と苦笑する土郎だった。

「ホント好きなんだな。その雁夜さんって人が。」

「はい！」

即答である。

「俺でよけりゃ、力になるからな。応援してるから。がんばれよ。」

「はい！ ありがとうございます！」

ニカツと笑う土郎に、桜は満面の笑顔でお礼を言った。

そんな二人だが、周りの目は…。

「あれで付き合っていないって嘘だろ…？」

つという、土郎への嫉妬の視線とか、二人の間に恋愛感情がないという信じられないと見られているのに気づいてなかった。

あくまで桜と士郎は、先輩後輩であり、人間関係は友情でしかなかった。

SS3 仕置き

雁夜は、ぼう然としていた。

「ほら、現実逃避しない。」

「……現実逃避させてくれ……」

雁夜とツツジの目の先には、帯状の影で、青髪の少年を逆さに吊るしている桜の姿があった。

青髪の少年の名前は、間桐慎二（まどうしんじ）。

雁夜の血縁上の甥っ子であり、間桐に養子に來た桜の血の繋がらない兄である。

なお、雁夜の兄・鶴野の子だ。

秘密機関ドレスを潰すため、間桐邸を離れていたときに、鶴野が慎二を連れて間桐邸から離れた遠い土地に避難していたらしいのだが、つい最近慎二が自分の家系のことと、聖杯戦争の話聞いてしまい、聖杯を求めて自分だけ間桐に帰ってきたのである。

しかし、間桐にいる桜がすでにライダーを召喚しており、自分には、父親の言うとおり魔術の才能が無いということが分かると、あるうことかツツジに刃を向けて人質とし、桜にライダーを寄越せと言ったのだ。

ところが、ツツジが普通じゃないことを知らなかったため、雁夜達の反応の薄さに：逆に慎二は驚き狼狽えた。

そのすきにツツジが、慎二の手からナイフを奪って折り曲げ、距離を詰めた雁夜が人様に刃物を向けるんじゃないやありません！つと、げんこつを食らわせた。

それでも諦めない慎二が、父・鶴野から聞いていた、雁夜が化け物だということで罵り、世間に広めるぞと脅してきたため、怒った桜が影の魔術を使って逆さに吊るしたのだ。

「ねえ、桜ちゃん知ってる？」

「……なに？」

「人間って、逆さまに吊るされると、そのうち、頭に血が上りすぎて、顔の穴という穴から血が出てくるようになるんだよ。」

「…へ〜。」

「ひっ！ た、たすけ…、たすけてええええ！」

ツツジのこわ〜い囁きを聞いて、目を細める桜の姿に、完全に怯えきった慎二が雁夜に助けを求めた。

雁夜は目をそらして、ムリムリつと手を振った。家の女性陣が強すぎるので強く出れない雁夜だった。

「ひいひい！ 雁夜おじさんお願い助けて！ あ、頭に血が…、お、お願いたすけてええええ！ ギャああああ！」

必死に助けを求める慎二に巻き付いている影で、逆さにしたままぷらん、ぷらんつと振り回す桜。慎二はたまらず悲鳴を上げる。

「じゃあ、もう二度と桜ちゃんからライダーを取らないって約束するのなら、助けてあげなくもないよ？」

「はい！ もう絶対しません！ 約束します！ 誓います！ だから、助けてくださいー！」

「ほんとうに〜？」

「ほんとうですからああああ!!」

「桜ちゃん、どうする？」

「うーん…。しようがないなあ。」

「うぎやつー！」

仕方なしにつとといった様子で、桜は、影から慎二を解放し、解放された慎二は床に落ちた。

顔から落ちたため悶絶していると、ツツジが近寄ってどこから出したのか、ロープで慎二を括り始めた。

「ねえ、雁夜ー、宅配代って幾らくらいになると思う？」

「そもそも人間は宅配じゃ送れないっつーの。」

「へ、変な縛り方するなーー！」

「アハハハ、これが噂に聞く亀甲縛りつてやつだよ。」

「わー、ツツジさんいつの間になんなの覚えたんですか？ 私も覚えたい。」

「桜ちゃん…、何を考えてるのかな〜？」

目をキラキラさせて覚えたいと言っている桜に、雁夜は、僅かに

青ざめ、ブルツと震えた。

その後、散々弄ばれた慎二は、ボロボロになって冬木市を去ったのだった。

その夜、ライダーは、間桐邸の元蟲蔵がある荒れた庭の方の塀を見つめていた。

そこには、一人の青い男がいた。

月夜の明かりの下でもハッキリと分かる。赤い目と、手にしている赤い槍。それだけで十分すぎるほど不吉を感じさせる。

「おねーさん。見ろよ。月が綺麗だねえ。」

青い髪を夜風になびかせ、ランサーがにやりと妖艶な笑みを浮かべた。

「あら？ 月も高いうちに、女の寝床に来る殿方がおられるなんて。思いませんでしたわ。」

「その割りにや、物騒な獲物を手にしてるじゃねえか。」

ランサーは、顎をしゃくり、ライダーが手にしている鎖の付いた短剣を示した。

「何かご用かしら？ 言っておきますけど、貴方と夜を共にする気はこれっぽっちもありませんわよ。」

「かたいね。もうちつと楽しく考えられないか？」

「無論、貴方のそのご自慢の槍で貫かれる気も、ありませんので。」
「ハハハハ！ そう言うなって、楽しもうぜ、なあ、おねーさん！」

タンツと塀の上から軽やかに飛び降りたランサー。

十年前にアーチャー（ギルガメッシュ）により荒らされた庭はほとんどそのまま、足場は正直悪いが、サーヴァントである二人には些細なことだ。

ライダーが、間桐邸から離れ、ランサーと向き合う。

そして、戦いが始まった。

大振りの槍ではあるが、凄まじいスピードを誇るランサーの攻撃を二本の短剣でさばくライダー。

その戦いは到底並の人間ではこなせないものだ。まさに人ならざるモノ同士の戦いだ。

戦闘に特化したクラスであるランサーの攻撃を、機動性に富むがそこまで武芸に秀でていないライダーがカバーできるのは、マスターである桜からの魔力供給が高いためだ。

打ち合いのすえ、いったん距離を取った両者。

ヒューっと、ランサーは口笛を吹いた。

「やるじゃねえか。見たところ武に名を連ねる英霊ってわけじゃないさそうだが、よっぽどマスターがよかったのか？」

「ええ。彼女は素晴らしい魔術師よ。」

「ほーう。そりや羨ましいねえ。」

「貴方は、マスターに恵まれなかったかしら？」

「…色々あるのよ。」

「ですが、そろそろ終わらせるわ。」

ライダーがおもむろに目を覆っているベルトのような封じを外そうとした。

「ダメだつて、桜ちやーん！」

「待って、雁夜さーん！」

そこへドタバタと廊下を走る足音がして、緊迫した戦いの空気が壊れた。

「！ライダー、ちよつと助けてくれ！　つて、誰だ？　つて、おまえ…。」

「チツ。邪魔が入っちゃったか。じゃあ、おねーさん、また次の戦場で会おうぜ。」

雁夜に顔を見られて舌打ちをしたランサーは、槍を抱えて、高い塀を跳び越えていった。

「捕まえたー。」

「わー！」

ランサーの姿を見て立ち止まった隙に、後ろからすごい下着姿（どこで買った!?!）の桜に捕まる雁夜。雁夜は、パジャマが乱れていた。

「あらあら。」

ランサーが去ったことで武器を納めたライダーが、ほうつ…とため息を吐いて悩ましげに頬に手を置いた。

「見てないで助けてよ!」

「あら? どうしてかしら?」

「えつと…、だ、だから…。俺は桜ちゃんの…。」

「ここでは人目が入るかも知れませんが、桜。」

「それは、イヤだわ。雁夜さん。寝室に…行きましょう、ね?」

「えつ? ちよ、影はダメ! 影は! あー!」

桜に手荒なことが出来ず全力で抵抗できないでいた雁夜は、桜の影に巻き付かれて、抵抗を封じられて、そのまま寝室に運ばれていったのだった。

「…私も混ざりたいわ…。」

つと、危険な眩きをするライダーだった。

SS4 狂戦士

翌朝……。

「……聞かないでおくよ。」

「……。」

朝ごはんを並べながら言ったツツジ。

桜は、ムウツと頬を膨らませて俯いている。

反対側の席に座る雁夜も、俯いていた。しかし、チラチラと、桜を見て気になっている様子だ。

昨晚…、桜は雁夜に夜這いをした。

すごい下着姿で現れた桜にびっくりした雁夜は思わず逃げ、ライダーとランサーが庭で戦っている現場を見て、その際に後ろから追ってきた桜に捕まった。

その後寝室に引つ張り込まれ、さあ！食べる寸前というところで、雁夜が身の危険を感じすぎたため……。

…：体内にいる寄生虫バオーが反応したのか、武装現象を発動してしまったのだ。

ただし自我はある状態で。じゃないと桜が死んでた。

まあ、当然だが夜這いどころじゃなくなり、別に桜が雁夜の武装現象にビビったわけではなく、雁夜は雁夜で武装現象を発動してびっくりして大慌て。桜は、そこまで自分を受け入れたくないのかと泣いた。

泣いてる桜を慰めてる最中も、その後泣き疲れて眠った桜の傍にいるときも、雁夜は武装現象が解けず、眠ることも出来ず、結局朝日が昇るまで一晩ずっと武装現象発動状態であつたらしい。そして今日…、きまらずい朝を迎えたのだった。

ツツジは、寝ていたが、事前に匂いで桜が夜這いをかけるというのを知っていたため、騒ぎがあつても寝たふりをしていた。

しかし、まさか身の危険を感じすぎて雁夜が武装現象を発動してしまうという予想外の展開が起こると思わなかった。

恐らく、雁夜は桜を嫌って拒んだのではない。むしろ愛情はあ

る。だが、幼いときから保護者として育ててきたのだ。美しい乙女になつたとはいえ、幼いときから育ててきたのだ、保護者意識が抜けるわけがなく、実の娘を愛しちやいけないというような背徳感ゆえに拒んだのだ。男としての性より、背徳感ゆえのその意識が少し強かった結果、バオー・武装現象という形で体が暴走を起こしてしまつたのだろう。しかも単なる武装現象の発動ではなく、男として生殖本能も加わっていて、自分の意思じゃ制御が困難になつてしまつたのだ。まあ……、そういう意味での熱と連動してしまつたため、武装現象が解けるまで一晩かかつてしまつたのだ。

……大つぴらに言えない処理をしてればもうちよつと変身が解けるのは早かつたはずである。しかし雁夜は気がついてなかつたのだ。

もつとも、桜の夜這いによる武装現象発動事件のその真相を知るのは、マザー・バオーという上位種を持つツツジのみだ。なぜ分かつたかという、朝、雁夜と会つた時に嗅いだ匂いに混じていた、発情した男の残り香で大体のことを把握したのだ。

そんなこんなで、ギスギスした悪い空気の中、朝食を食べ、桜は学校に行つた。

桜が学校に行つた後、食卓で、雁夜は、ベターーつと倒れた。

「机拭くから起きて。」

「…ツツジ…。」

「なに?」

「俺は……、桜ちゃんが嫌いなわけじゃないんだ。」

「うん。知ってる。」

「なのになんで変身したのか、分かんねえ…。」

「それ本気で言ってる?」

ツツジが片眉をつり上げて聞いた。

「コレ（バオー）について聞けるのはお前しかいないんだから、嘘言
うかよー。」

「……ようは、発散できなかつたのが原因だよ。」

「…何を?」

「男としての欲求が溜まってるでしょ、雁夜。」

「ぶほおっ!!」

ハッキリと言われて、雁夜は吹いた。

「ぶっっちゃけ雁夜ほど、長くバオーを宿した人間ってそうそういないから、そういう欲求がバオーとどう繋がってるのかは、私にもちよつとまだ分かってないの。」

「いくら俺でも溜まってるかどうかぐらい分かるわ! だからなんでそれで変身しなきゃ…。」

「身の危険…感じたでしょ?」

「……あつ…。」

「そっちの意識が、ちよつと勝っちゃった結果だよ。合法的に、もう桜ちゃんは、結婚できる歳なんだからさあ。」

「年の差を考えろや!」

「ぶっっちゃけ、おじいちゃんと孫ぐらいの年の差結婚だって、世の中あるよ? かの有名な画家、パブロ・ピカソだって40歳以上の年の差婚してるんだよ? 20歳ぐらいなら、そこまで問題ないんじゃない?」

「なんで俺なんだよ! 桜ちゃんにふさわしい男なんて世の中にいるだろうに…!」

「じゃあ、仮に言うよ? 桜ちゃんが雁夜じゃない男を連れて来ました。結婚を許せる?」

「まず、鉄拳。」

「それ、許すとは言えないよ。それに…、桜ちゃん…、すつつつごい一途だよ? 下手にその意志を曲げようだなんてしたら…、どんな化学反応を起こすか分かった物じゃないよ?」

「それどう…。」

「四肢を縛られて、日の光も届かない場所で、一生監禁とか?」

「飴とムチで、躰けられて、例えばワンちゃんプレイとかで、お尻に…。」

「やーめーろーろー!!」

「普通の人間ならバオーを持つてる雁夜をどうこうできないけど、仮にも魔術師だからね桜ちゃんは。あの影に捕まったら逃げられないしね。頑丈でよかったね、雁夜。」

「……よかないいいい……。」

「人生の分かれ目。大決断をしてもいいと思うよ?。」

「このままじゃ、俺、桜ちゃんに嫌われたまままでいろってことお!。」

「それって、また武装現象が暴発するかもって予感してるって事だね。妥協するか、キッパリともう拒むか。ハッキリさせようよ。」

「……なぜ、こんなことになったんだ……?。」

「嫌われるより、好かれる方がよっぽどいいよ。」

「それはそうだけど……。」

「……ところで話を変えるけど。」

「なんだよ……?。」

「……桜ちゃんがライダーと一緒に、何かのサーヴァントと戦ってる。」

「はあ!? それを早く言えつて! どこだ!。」

「桜ちゃんの匂いを辿っていけばいいよ。今の貴方なら容易いはず。」

「分かった! お前も来いよ!。」

「分かってる。」

二人は急いで間桐邸から出た。

「間桐!。」

道路のアスファルトに、血を流してへばっている士郎が叫ぶ。

「くっ……。」

桜が両手をかざす先には、凄まじい筋肉を持つ巨体の英霊がいた。

その英霊は、桜が放った帯のような影で絡み取られていて身動きが取れなくなっていたが、その見た目通りの怪力で強引に影を破ろうとしていた。

「へへ、すっごくいい。私のバーサーカーを捕まえるなんて、随分変わった魔術を使うのね。」

長い銀髪の美少女がいた。

バーサーカーと呼ばれている巨人の英霊が、暴れて影を振りほどこうとする。そのたびに、ギリギリミシミシと影が軋み、その痛みが桜の体に伝わった。

「桜！ 無理をしてはいけません！」

道路脇に吹っ飛ばされ、ガードレールにめり込んでいたライダーがそう言った。反対側の道の脇には、土嚢に背中を埋めたセイバーがいた。

使いこなせるようになったとはいえ、まだまだ未熟な影の魔術。英霊の底力には、叶わない。

「あら？ バーサーカーを取り込むつもり？ 無駄よ。そんなことしたら、あなたの魔術回路がパンクするわ。」

無邪気に笑う銀髪の美少女が、バーサーカーに触れている影から吸収分解による煙が僅かに出ているのを見てそう言った。

「やめろ、イリヤ！ 狙いは俺なんだから!?!」

「ダーメ。その子、仮にもサーヴァントを持ったマスターでしょ？ 見逃すわけじゃないじゃない。」

イリヤという美少女は、そう答えた。

ライダーが起き上がり、短剣を握り直して、イリヤを狙い飛びかかるようにした。

その直後、腕の拘束を破ったバーサーカーの腕が、その手にするごつい武器がライダーを阻んだ。

「うう……」

先ほどの影を破られた衝撃でとうとう桜は、バーサーカーを拘束する影を保てなくなり、その場にへたり込んだ。

「あーあ、頑張ったのに、残念だね。でも、バーサーカーに傷を付け

ただけでもすごいわ。」

イリヤは、バーサーカーの体に残った、影による分解吸収を受けた火傷のような跡を見てそう言った。

桜は、ハアハアと胸を押さえて呼吸を整えようとしていた。

ライダーは、そんな桜の盾になるため、脇腹の傷を押さえながら桜の前に立った。

「まず、ひとりめ。」

「やめろー！ー！」

バーサーカーが、ライダーに向けて武器を振り下ろした。

ライダーは、覚悟を決めたが……。

バーサーカーの武器の刃が、ライダーに届くことは無かった。

「……うそ……。」

イリヤは信じられない目でその光景を見ていた。

ライダーとバーサーカーの間に入った雁夜の手が、バーサーカーの太い腕を掴んで止めていた。それも片手で。

バーサーカーは、ぐぐぐつ…つと、武器を握る腕を動かそうとするが、動かない。下げること、あがることも出来なかった。

「雁夜…さん！」

「よくも…桜ちゃんをおお!!！」

雁夜は、両手でバーサーカーの腕を掴み、遠くへぶん投げた。

ハッキリ言って、雁夜の見たい目は、細身な方だ。なので、巨人のような巨体を誇るバーサーカーを投げるだなんて芸当ができるなんてありえない。

投げられ、アスファルトに叩き付けられたバーサーカーは、すぐに身を起こした。

「ば、バーサーカー、殺しちゃえー！」

イリヤが慌てて指示を出すと、バーサーカーが雁夜に突進した。その間に、雁夜の体が瞬時に変化し、バオー・武装現象を発動した。

倒れている士郎はそれを見て驚いた。

「なにそれ？ あなた、死徒？」

「ウオオオオオム!! バルバルバルバルバル!!」

イリヤが雁夜の変化を見て、そう呟く。

バーサーカーの剣が雁夜に振り下ろされる。

その瞬間、そのバーサーカーの手が、手首から切断された。

雁夜の腕から生える刃が、太すぎるバーサーカーの腕を切ったのだ。

「うそ!?!」

「バルバルバルバルバル!! ウオオオオオオム!!」

雁夜の体が放電を始め、放たれた膨大な電撃がバーサーカーを焼いた。

「バーサーカー!!」

イリヤが悲鳴じみた叫び声を上げた。

放電による爆発の後、煙がもうもうと上がり、人肉が焼ける嫌な匂いが辺りにたちこめた。

煙が晴れると、そこには、ぶしゅううつつと、全身を焦がしたバーサーカーが仁王立ちしていた。

「信じられない……。バーサーカーを一回以上殺すなんて……」

イリヤが信じられないと、震えた。

「……当て身。」

「がっ!?!」

イリヤの背後からツツジが手刀をして、気絶させた。ハツとしたバーサーカーが振り向く。

「いくらサーヴァントが強くても、元(マスター)を絶ってしまえば、こつちのものだよ。」

「ツツジさん!?!」

土郎がイリヤを気絶させたツツジの存在に驚いた。

「ずいぶん……痛めつけられたんだね。さて、どうしようか、雁夜。この子、今なら煮るなり焼くなりできるよ?」

ツツジがイリヤの腕を掴んで持ち上げた。

「ま、待ってくれ!」

「どっしりっ!」

止めるよう声を上げる士郎に、ツツジが首を傾げた。

「見逃してやってくれよ…。」

「どうして？ この子は、あなたを痛めつけたし、桜ちゃんを殺そうともした。」

「戦えなくなつた意識の無いやつを煮る焼くするなんて外道な真似はしない！」

「……そっか。」

ツツジは、それだけ言うといりやをバーサーカーに渡した。

バーサーカーは、イリヤを大事そうに抱き上げると、この場から去って行った。

バーサーカーが去った後、雁夜は、士郎の傍に来た。

「なんだ？ つ…。」

雁夜は無言のまま士郎をひっくり返し、傷口に握った拳から垂らした血をかけた。

「！ 傷が…！」

バーサーカーに負わされた傷が瞬く間に治った。

「シロウ…。」

「セイバー！ 無事か？」

セイバーが剣を杖代わりにして歩いてきた。

雁夜は、ホツとしたように武装現象を解き、へたり込んでいる桜に駆け寄った。

「だいじょうぶかい？ 桜ちゃん。」

「うん。だいじょうぶ。ちよつと、疲れたけど…。」

「ほんとうかい？ 無茶しちやダメだよ。」

「それより…。」

桜が士郎の方を見た。

釣られて見ると、ツツジが士郎に寄生虫バオーの幼体を渡そうとして、セイバーに全力で止められていた。

「あのですね、ツツジさん！ 俺、人間をやめる気はないから！」

「でも、コレを身につければ…、さっきの雁夜のような力が手に入るんだよ？」

「うっ…。」

「シロウ！ 迷ってはいけない！」

「まあ、ちよつとだけでいいから頭の隅で考えてくれるといいなあ。」

ツツジは、ニコツと笑ってバオーの幼体を自分の口に入れると士郎とセイバーから離れて、雁夜達の方へ来た。

「桜ちゃん、立てる？」

「すみません…。ちよつと足に力が…。」

「雁夜、背負ってあげなよ。」

「ああ。」

「あっ…。」

言われるまでもないと、雁夜は、桜を背中に背負った。

一瞬固まった桜だったが、すぐに雁夜の背中にしがみついた。そして、雁夜の背中から雁夜の鼓動を感じ、甘えるように頬をすり寄せた。

「じゃあ、私達は帰るね。衛宮くん達も気をつけて。」

「あ…、はい…。」

「出来れば二度と近づかないください。」

戸惑う士郎と、ギツとツツジを睨むセイバーだった。

雁夜は、困っていた。

なんとなしに散歩をしていたら、桜の先輩である士郎と遭遇した。そこまではいい。だが問題はその後。

「あの…、すみません。」

つと声をかけられた。

「はい？」

「…雁夜さん…ですよね？」

「ああ、そうだけど？」

「俺、衛宮士郎っていいいます。間桐桜って子にいつもお世話になっていきます。」

「ああ。」

そういえば桜が料理の上手い先輩がいると言っていた。恐らく彼だろうと思った。

「ちよつと…、お話があります。今お時間いいですか？」

「構わないけど？」

「じゃあ、その公園で…。」

そして近くの寂れた誰もいない公園に来た。

「それで？ 話って？」

「…覚えてます？」

「なにが？」

「昨日…、変身しましたよね？」

「っ…。」

そういえば、あの場に士郎はいた。

「…それが？」

「ツツジさんからおおよそのことは聞いてます。あれって、バオーっていうんですよね？」

「…ああ。」

「バーサーカーの攻撃を片手で受け止めるし、あのデカイ体を放り

投げるし、手を切り落とすし、終いには電撃まで放つなんて…、尋常じゃないです。」

「ああ、そうだな…。」

「俺…、正義の味方を目指してるんです。」

「はあ…。」

それはまた、ずいぶんと漠然とした…というか現実味のないというかそういう目標だ。

「だから、守るための力が欲しいって…、思ってます。」

「…まさか…。」

「前々からツツジさんに、人間をやめてみないかって言われてて、変な虫を見せられてました。それで…。」

「それだけは、やめるんだ。」

「俺なりに考えましたよ。」

士郎の言葉を遮るように止める言葉を吐いた雁夜だったが、士郎は続けた。

その顔は真剣だ。

「俺…、魔術師としては全然です。だからセイバーや遠坂の足ばっか引つ張って…、しまいにや間桐まで…。俺、力が欲しいんです！」

「だからって…、人間をやめていいわけがない！」

「じゃあ、あなたは どうして？」

「俺は…、望んでこうなったんじゃない！」

「えっ？」

雁夜は、キョトンツとする士郎に、過去に何があったのか語った。

間桐に養子入りした桜を遠坂に戻すためだけに過去の聖杯戦争に挑むため、寿命を捨てて無理矢理に即席の魔術師になったこと。

だが結局最初の戦いで力尽きそうになり、そこに現れたツツジによつて承諾もなく寄生虫バオーを与えられて、命と力を手に入れたことを。

「そうだったんですか…。」

「だから、君までこっち側に来ることはない。君には君の理想があるかもしれないが、この力はそんな生やさしいものじゃないんだ。」

そう言つて雁夜は、座っているベンチの背もたれに手を触れた。その瞬間、ジユツと背もたれの一部がドロドロに溶けた。

それを見て士郎はギョツとした。

「これは、化け物の力だ……。こんなもの……。未来のある若者の君が持つべきじゃない。いいか、絶対にツツジの言葉に乗るな。」

「……ツツジさんつて、何者なんですか？」

「アイツは……。人間じゃない。」

「味方じゃないんですか？」

「……いや、味方だ。戦友と言つていい。アイツと一緒に住まないかつた誘つたのは、俺だからな。」

雁夜は、秘密機関ドレスを潰した後、行くところがないと寂しそうな顔をしていたツツジの顔を思い出した。

「どうしてアイツが君をバオーにしたいのかは、俺には分からない。もう十年以上の付き合いになるが、何を考えているのか分からないところが多いからな……。だけど、アイツの言葉に乗つてバオーを受け入れるのはダメだ。化け物になったら、もう取り返しがつかない。」

重ねてバオーになることを止める雁夜の言葉に、士郎は少し黙り、少しして、分かりました……。と答えた。

しかし、おそらくはまだ諦めてはいないだろうと、雁夜は感じた。

目先のことにとらわれてリスクを考えないというのは、自分の体験でよく分かっているつもりだ。まあ、もっとも……。バオーについては、自分の意思ではないので、その範疇ではないが。

士郎の周りの者が、士郎が人間をやめることを止めてくれることを切に願つた。

士郎との会話を終え、別れた後、雁夜は間桐邸に帰つた。

「おかえりー。」

ツツジは、茶の間で掃除をしていた。

「ツツジ。」

「なに？」

「…衛宮くんを誘うのはやめろよ。」

「…それはできない約束だね。」

ツツジは、そう言って笑った。

「これ以上…、あの子に手を出そうとするなら…。」

「無理だよ。」

雁夜の言葉を遮って、ツツジが言った。

「あなたじゃ…、私（マザー・バオー）に勝てない。」

「!? …ぐっ…。」

声を低めたツツジの言葉と同時に、雁夜の頭が割れるように痛くなった。

「その気になれば、あなたの頭の中のバオーを外に飛び出させることもできる。そんなことになったら、死ぬよ?」

「おまえ…!」

頭を押さえながら雁夜がツツジを下から睨んだ。

「……できたら…、こんなことさせないで。」

「おまえが、あの子を誘うのをやめればいいだけ…だろ!」

「じゃあ、衛宮くんが望んだら?」

「……なっ…。」

「知ってるよ。彼と話してたでしょ? そういう兆候があるなら、私はそれに応える。」

「やめろ、つってんだろが…!」

「正義の味方かく。まるで特撮ヒーローものみたいなことになるかもね。」

「現実が、そんな上手くいくわけないだろうが!」

「それを決めるのは、雁夜じゃないよ。」

「てめ…え…!」

「やめて!」

その時、ツツジの影から帯のような影が出現し、ツツジを絡み

取った。

茶の間のふすまが開き、桜が入って来た。

「ツツジさん…、いくらあなたでも、雁夜さんに危害を加えるなら、許さないわ。」

「……ごめんごめん。やり過ぎたよ。」

そう言ってツツジは、雁夜に向けていた力を抑えた。

その瞬間、雁夜の頭痛が消えた。

雁夜は、ハアハア…と必死に呼吸した。そんな雁夜に桜が駆け寄る。

「私は、もしかしたら、衛宮くんに、いつか殺されるかもね…。だって、人じゃないんだもの。」

「ツツジ…。」

「正義の味方なら、私は、許されない存在だから。根本的に相容れないと思う。」

ツツジは、そう言って微笑んだ。

SS6 妹

「士郎！ 聞いているの!？」

「シロウ、ちゃんと聞いているのですか!？」

「あー…、はい…。」

雁夜と会話した後日、人間をやめようとしていることがバレて、凜とセイバーにメツチャ怒られた士郎だった。

「とにかく！ あの女にだけは関わっちゃダメ！」

「そうは言っても…、向こうから来るんだぜ？」

「それでもよ！」

「シロウ！ 人としての誇りを捨ててはなりませんよ！」

「…じゃあ、雁夜さんは、どうなるんだ？」

「それは…。」

第四次聖杯戦争で、雁夜が人間じゃないことを知るセイバーは、それを言われて少し口ごもった。

「俺は…、力が欲しい。」

「だからって、人間をやめていい理由にはならないわ。そんなことしたら、私が駆除するわよ？」

「遠坂、おまえ、それだと雁夜さんも駆除対象ってことになるんじゃないかねえか？」

「そうね。いつか殺すわ。ずっと前からそう決めてるもの。」

「なっ！」

「あの人達は、私の父と因縁があるの。その因縁は娘の私が断ち切る。」

「そんなこと…。」

「これは、私の問題なの。士郎、あんたがとやかく言う資格は無い。」

「あの人が死んだら、間桐が悲しむ。」

「…あの子には悪いけど、いずれは引き離す予定だったのよ。」

「はっ？」

「桜はね。私の妹なのよ。」

凜の言葉に、士郎はキョトンとした。

「魔術師の家系は、一子相伝。二人の子供がいれば、片方を余所へやるしかないの。桜は…、絶えかけていた間桐の家に行くことになった。けど、あの人のおかげでメチャクチャになったわ。」

「どういうことだ？」

「間桐の当主を、その息子、間桐雁夜が殺したのよ。」

「あの人が!？」

「理由なんて知らない。おかげで間桐は、名前だけの家になって、桜が受けるはずだった家の加護はなくなった。いつ魔術協会が桜を狙うか分からない。だから機会を見て、桜を連れ戻す予定だった……。」

「間桐は、それを知ってるのか？」

「たぶん…知らないでしょうね。あの子…、遠坂を恨んでるもの。」

凜は、自分に向ける桜の冷めた目を思い出し、遠い目をした。

十年前の仲の良かった姉妹の仲は、冷え切ってしまったのだ。しかし、凜は、なぜ桜が遠坂を恨むことになったのか、その理由を知らない。

「桜が今回の聖杯戦争のマスターになったのは分かった。これはあの子を取り戻すチャンス。私は、聖杯戦争を制して、妹を取り戻すわ。」

「つまり、雁夜さんから引き離すって事か？」

「そうなるわね。」

「間桐は…、あの人のことを…。」

「ええ。そうらしいわね。でも、あの人はダメ。結ばれるなんてもつてのほかよ。」

「そんな…。」

「悪いけど。これは決定事項。覆そうとするなら、許さないわよ。」
「っ…。」

揺るぎない意思をみせる凜に、士郎は辛そうに顔を歪めた。

士郎の脳裏には、雁夜のことを想い、うっとり恋する乙女の顔をしている桜の姿が映った。

もし実の姉が、自身を雁夜と引き離そうだなんてしていると知ったら…、きつと全力で抵抗するだろう。

実の姉妹が争うなど、あつてはならない。だが、凜は、あくまで桜の身を案じているだけだ。そこに他人の自分が介入するいわれは無いだろう。

「シロウ……。」

「俺は……どうしたらいいんだ?。」

士郎を心配するセイバー。士郎は、そう呟いた。愛する人と結ばれたいと願う桜。

桜の平穏無事を願う姉の凜。

どうすれば、二人を仲裁できるか士郎は悩んだ。

「……くしゅんっ!。」

一方その頃。桜は、くしやみをした。

「桜ちゃん。風邪?。」

「だいじょうぶ。……誰か噂したかな?。」

雁夜に心配され、鼻をティッシュで拭いた桜はそう答えた。

「それはそうと……、桜ちゃん、このまま聖杯戦争を続けるのか?。」

「うん。だって、面倒ごとは……。」

「さっさと片付けるか……。」

「だから、これから先輩のところに行ってくる。だいじょうぶ。殺したりしないから。」

「ムチャしちやダメだぞ?。」

「分かってる。ライダー。行きましょう。」

「はい、桜。」

ライダーは、従順に桜に従う。

そして、桜がライダーと共に間桐邸を出発しようとして門を通った時。

「私も行くよ。」

「ツツジさん…。それより雁夜さんと仲直りしたらどう?」

「衛宮くんに確認したいの。だから行く。だいじょうぶ。戦いの邪魔はしないから。」

「…もう。」

ついていくと意気込むツツジに、桜はヤレヤレと息を吐いた。

「こんばんわー。」

桜は、衛宮家のチャイムを鳴らした。

「はーい。…間桐？」

玄関を開けた土郎は、桜を見て驚いた。

「どうしたんだ、こんな遅くに？」

「すみません、先輩。セイバーさんは、いますよね？」

「いるけど？」

「……無理を承知をお願いします。うちのライダーと戦ってください。
い。」

「……はっ？」

「だから…、聖杯戦争をしましょう、っということです。」

「おま…！」

「私は、さっさとこの戦争を終わらせたいんです。だから戦いに来
ました。それだけです。」

「……分かった。」

「…すみません、先輩…。」

「セイバー！」

「はい。シロウ、どうしました？」

「……おまえと戦いたいつてさ。」

「！」

「桜！」

「……いたんですか？」

凜が現れると、途端、桜の表情が無になった。

「まさか、あなた…聖杯戦争を勝ち抜く気？」

「あなたには関係ありません。」

「関係あるわ！ 私は、遠坂の家督！ この冬木の地の管理者よ！」

「……先輩、セイバーさんと一緒に庭に行きましょう。」

「桜！ セイバーと戦うなら、先に私と戦いなさい！」

「それで？ なにか私に得でも？」

「私とアーチャーが勝ったら、あなたは遠坂に戻ってきなさい。」

「…どうして？」

「間桐には、もう魔道の加護は無い。だからあなたの身を守るためには…。」

「それで…、また別の家に行かせるんでしょう？」

「！」

「二子相伝だつてことは知ってるわ。遠坂は、骨の髄まで魔術師だもの。そんなの願ひ下げ。」

「けど、これはあなたのためなのよ！」

「私は、雁夜さんと生きる。それ以外に無いわ。」

「あの人は、ダメ！」

「他人のあなたにとやかく言われる筋合いはないわ。」

「私は…！」

「間桐…、実の姉なんだろう？」

「…もう、他人です。」

桜は、ふるふると首を振った。

「さっさとこの聖杯戦争を終わらせるため、戦ってください。」

「…セイバー。行こう。」

「シロウ。いいのですか？」

「ああ…。意思是硬そうだから。」

「はい…。」

そうして、庭に出た。

凜もアーチャーを連れてついて行った。

ライダーが霊体化状態から実体化して鎖の付いた短剣を構え、セイバーは、剣を手にして構えた。

「先輩。貴方には何も恨みはありませんので。」

「分かってる。」

両サーヴァントの後方に立つ、桜と士郎がそう言いあった。

「このような形で相まみえたのが呪わしいですわ…。」

「何を言っている?」

妖艶な笑みを浮かべるライダーに、セイバーは、怪訝そうに眉を寄せた。

「では、はじめましょう。行きます。」

「ハあッ!」

ライダーとセイバーが同時に動いた。

凄まじい金属音を鳴らして、両者がぶつかった。

ガンガン! ギンギン! つと、両者の武器による打ち合いが発生する。

優れた機動性を誇るライダーの蹴り上げにより、セイバーが顎を上へ逸らして避ける。その隙にバック転をしながら距離を取ったライダー。

「やはり…、セイバークラスと真っ向から戦えない…。」

「ライダー、遠慮はしないで。」

「はい。桜。」

ライダーが、目を覆っているベルトのような物を取った。

そして、その目が開かれた。

その瞬間、凄まじい重圧のような力がセイバーの体を蝕んだ。

「っ! 魔眼!?!」

「うあ…。」

「シロウ!?!」

「これは、石化の魔眼!? 士郎! アイツの目を見ちゃダメ!」

「そう、私は、この呪われし眼を持つ者。ですが、目を閉じた程度では、この呪いを防ぐことはできない。そして…。」

ライダーが動いた。

魔眼の力によりステータスがワンランク下がってしまったセイバーの腹に、ライダーが突きのような蹴りを入れた。

「サーヴァントを石化させることはできずとも、その力を少し抑えることぐらいならできる。」

吹っ飛んでいったセイバーを見つめ、ライダーが体制を整える。ヨロリツと起き上がったセイバーに向け、ライダーが跳び、セイバーの頭を蹴って、前へ吹っ飛ばしうっ伏せに倒した。

「どうやら……、貴女……、魔力が不足しているようですね？」
「くっ……。」

立ち上がったセイバーを見つめるライダー。

「そんなことでは、勝ち残れませんよ？」

「セイバー……。」

「未熟な魔術師をマスターに持った運の無さを呪うのですね。」

ライダーが、トドメを刺そうと、短剣を構えた。

「シロウを愚弄するな……！」

「事実でしょう。」

「この程度で私を……。」

セイバーが魔眼の影響で重たい体を酷使して動く。

「愚かですね。」

ライダーが呆れたようにそう言い、セイバーを迎え撃った。

「させないよ。」

その直後、少女の声が聞こえた。

ハッとしたライダーが、その場から後ろへ跳んだ。

その瞬間、ライダーがいた位置に、バーサーカーの武器が振り下ろされて地面が抉れた。

「イリヤ!？」

「お兄ちゃん、だいじょうぶ?？」

「どうして、ここに?？」

「もう、お兄ちゃん危なっかしいから見てられなかったの。」

石化の魔眼の影響であまり身動きが取れないでいる士郎に、イリヤが駆け寄ってその顔に手を伸ばした。

「……横やりを入れてくるなんて、悪い子だね。」

「……っ、あなた……！」

物陰から現れたツツジの存在に気づいたイリヤが顔を歪めた。

「前は、よくもやったわね！ バーサーカー！ そいつ殺しちやえ！」

バーサーカーの武器の矛先がツツジに向いた。

「マズい！ 逃げ…。」

「だいじょうぶですよ、先輩。」

「間桐？」

「あの人…、下手するとサーヴァントとより強いかもしれませんから。」

「はっ？」

士郎が、キョトンツとしてる間に、ツツジとバーサーカーの戦いが始まった。

バーサーカーの凄まじい攻撃を、すべて軽々と避けるツツジ。

「なにやってるの、バーサーカー！ そんな奴簡単に殺せるでしょ！？」

「…殺せたらいいわね。」

「なに!？」

桜の呟きを聞いてイリヤが桜を見た。

「コレ…、試してみようかな。」

そう言つて懐から出したのは、一匹の大きな蟲。

それは、膨大な魔力を持つ刻印蟲と呼ばれていた蟲の一種の、干物だ。

それをアーンと口を開けたツツジが…：食べた。

「…うえ…。」

変な虫をガリガリバリバリと食べてるツツジの姿に、凜がオエツとなった。

「よっし…！ さあ、かかってくるなさい巨人さん。」

バーサーカーがツツジを頭から真つ二つにしようとして武器を振り下ろした。

その腕をツツジが片手を振っただけで弾き飛ばす。

腕を弾かれて驚くバーサーカーの懐に入ったツツジの真空跳び

膝蹴りが、バーサーカーの顎に決まった。

バーサーカーの巨体が後方へ反れ、そのまま後ろに倒れた。

「あれ？」

場がシーンとなった。

「ば、バーサーカー!?!」

イリヤが驚愕した。

「つ、ツツジさん…。」

「わあお。すごい。魔力があるだけで、ここまで変わる？」

「バーサーカー？ 嘘！ バーサーカー！」

イリヤが倒れたバーサーカーに駆け寄り、その体を揺すった。

バーサーカーは、気絶していた。

「あー、その状態じゃしばらく起きそうにないね。」

「貴女！ バーサーカーに何をしたの!?!」

「いや…、ちよつと魔力を取り入れてみて、攻撃したらどうなるかな
くつて思つてやってみたら…。こんなことに…。」

「さつきの蟲？」

「そう、魔力をたつぷり含んでる間桐の蟲だよ。その干物を取つて
おいて、食べてみたの。私、魔術師じゃないから、魔力を物理的に取
り入れて一時的に魔力を持ったらどうなるかなって思つてやつてい
ただけど…。」

「そ…、そんなことで…、たつたそれだけで、バーサーカーを!?!」

「まさか、ここまで変わるとは思わなかったなあ。」

「くつ…。」

イリヤがギツとツツジを睨む。

「ごめんね。」

ツツジが申し訳なさそうに謝った。

「イリヤ。おまえの負けだ…。」

「私の負け？ そんなの認められないわ！」

士郎に言われ、イリヤが士郎を睨み付けながら言った。

「現にバーサーカーがやられたんだぞ？ 負けを認めろよ。」

「…くつ…。」

イリヤは、悔しさに歯を食いしばり、その場に膝をついた。

「……仕切り直しですね。」

「仕方ないわ。ライダー。お疲れ様。」

目の封じを施すライダーを、桜が労った。

ツツジの攻撃で気絶したバーサーカーが起きるまでの間、イリヤは、衛宮家の茶の間にいることになった。

座布団の上に座っているイリヤは、出されたお茶に目もくれず、ぷくぷくと頬を膨らませてご機嫌斜めだ。

「……ぷっ……。」

「なによー!」

そんなイリヤの姿について笑ってしまった凜を、イリヤが睨んだ。

「アツハハハ! バーサーカーがいないと、アインツベルンの魔術師も形無しねって思ってた。」

「なんですって! 殺してやるわよ!」

「あら? やる気?」

「家の中で暴れるな。」

「あ、これ美味し。」

「ツツジは、マイペース過ぎますよ。」

暢気にお茶とお菓子を食べてるツツジに、隣にいる桜がツツコんだ。

「それにしても、あんな方法…、いつ思い付いたんですか?」

「あー。雁夜から聞いた即席の魔術師になった時の体験を聞いて、私がかもし魔力を手に入れるならどうすればいいかなって、考えて…。」

「それで思いついたの?」

「そう。けど…、バーサーカーを一撃で倒せるとは思わなかったけどね。」

「…それだけツツジさんが強いってことよ。」

「あなた、なに? 人間じゃないでしょ?」

イリヤがツツジを睨んだ。

「ん? 私? 私は…、人間じゃないよ。」

ツツジが自らが人間じゃないと肯定したことに、イリヤは目を見開いた。

「じゃあ、なんなの？ 死徒？」

「違うよ。そもそも、死徒ってなに？」

「単（ひとえ）に言えば、吸血鬼のこと。」

「じゃあ、違うよ。私は血なんていらぬ。」

「わけ分らない…！ 死徒でもなく、代行者でもない貴女が、サーヴァントを圧倒するなんて。たかが、〃人間の形をしているだけ〃の何かにできるわけない！」

「そうだねえ…。私は…強いて言うなら、人間の叡智のカルマって言ったところかな？」

「エイチノカルマ？」

「人間って罪深いよね。自分の欲望や興味関心のためならどんなことでもするんだよ。その結果、生まれたのが私の親だっただけ。私はその子供だったってだけの話。」

ツツジは、そう言って微笑んだ。

「…なにそれ。」

ホムンクルスの母親を持つイリヤは、胡散臭そうにツツジを見つめた。

桜ですら、十年も一緒にいるが、ツツジが親の顔を知らないことは知っていても、名前だけは知っていることは知っていた。だがその名前は聞いたことがないし、ツツジが親の名前を口にしたことがない。

「遠回しに言うわね…。」

黙っていた凜が、少し忌々しそうに言った。

ツツジは、微笑みを浮かべたまま、凜を見た。

「あなたのその力…、いや化け物は、間桐雁夜を人間じゃない者に変えたじゃない。その気になれば、もっと増やせるでしょう？ ようは、貴女は、女王。それでしょ？」

「へく。そこまで分かってるんだ？」

「どういうことだ、遠坂？」

「その気になれば、その女は、世界中のあらゆる生物を、あのバーサーカーを痛めつけた怪物にすることができるとことよ。」

「なっ…。」

「うん。できるよ。でもそんなことするつもりはないし、やる気はないよ。」

安心してつと、ツツジは、微笑んだ。

凜は、それでもツツジを警戒する。

「あなたが生きてる限り、安心できないわね。」

「そこまで警戒しなくてもいいよ。私は本当にそういうことに興味はないから。」

「だったら、死ねばいいじゃない。」

「遠坂!」

「士郎。あんたは、正義の味方になるんでしょ? だったら、人間に仇なす怪物が目の前にいれば殺すわよね?」

「それは…でも彼女はなにもしてないぞ?」

「何もしてない? あの間桐雁夜の変貌を見てるくせに、バーサーカーを圧倒したのを見てるくせに、予防策もとらないわけ? アレがただの人間に向けられたらどうなるかぐらい分からないの?」

「でも…。」

「…っ、あんたに期待した自分が馬鹿だったわ。」

「おい!」

「ともかく!」

凜がビシツとツツジを指差した。

「私は、あなたを殺すわ! もちろん、間桐雁夜もね!」

「あ、それは…。」

「これは決定事項! 誰にもじゃ…っ!」

次の瞬間、影から出現した帯状の影に巻き付かれ、凜は顔までグルグル巻きにされた。

「ねえ、なんて言ったかしら? 聞こえなかったわ。」

桜が、鉄仮面のような無表情で、冷たい声で聞く。

ギリギリと絞められ、凜は、苦しきで呻き、暴れるが影は外れない。アーチャーが慌てて影を外そうとするが、平たく、薄すぎて、手が、指が隙間に入らない。

「遠坂さん。なんて言ったかしら？ 聞こえなかったの。」

「間桐がやってるのか!? やめろ、やめるんだ!」

「あら？ どうして？ だって、この人…、私の雁夜さんを殺すとか、世迷い言を言ってた気がして…。」

「聞いてんじやねえかよ！ いいから離してやれよ！ このままじゃ窒息死するぞ!」

「私から…、雁夜さんとツツジさんを奪う奴は、許さない…許さない許さない許さない…。」

士郎に肩を揺るられながら、桜は、ブツブツと念仏のように許さないと呟く。

「桜ちゃん。ありがとう。」

「…ツツジさん…。」

「でも、凜ちゃんを殺したら…、きっと雁夜は悲しむよ。」

「……。」

「…、ぶはっ!」

「凜!」

影から解放された凜の体をアーチャーが抱きとめた。凜は、必死に呼吸した。

「不用意なことは言わない方がいいよ。じゃないと、本当に貴女は、妹さんを失うことになるよ?」

「あの人は他人です。」

ヤレヤレと肩をすくめるツツジに、鉄仮面のような無表情の桜がそう言った。

「ゲホッ…、桜…あなた、私を敵に回すのね?」

「ええ。それが?」

キツと凜に睨まれても、桜は表情を崩さない。

「そこまで、間桐雁夜に執着するわけ?」

「あの人は、私のモノ。私の伴侶になる人。」

「認めないわよ。そんなこと。」

「他人の貴女に認められる必要はないわ。」

背後に、ゴゴゴゴ…つという音と共に不穏な黒い空気を背負って

いるような雰囲気茶の間にたちこめた。

あまりの空気の悪さに、士郎はめまいを感じ、セイバーに支えられた。

「あ、バーサーカー!」

その時、バーサーカーが目を覚ましたのを感じたイリヤが立ち上がった。

そうすることで場の空気が変わり、イリヤが玄関の方へ走っていった。

「……とにかく、私は認めないわよ。」

「それがどうしました?」

「っ……」

「落ち着け、凜。」

「あんたは黙ってて。」

落ち着くよう促すアーチャーの手を凜は振り払った。

「帰りましょう。ツツジさん。」

「そうだね。雁夜が心配してる。じゃあね、衛宮くん。」

「今日はすみませんでした、先輩。」

「あ、はい……」

「待ちなさい、桜!」

「今日は、一緒のお布団で寝たいなく。」

「じゃあ、三人で久しぶりに川の字になる?」

「うん!」

桜は、鉄仮面のような無表情を崩し、笑った。

「ちよ……、桜?!」

聞き捨てならない言葉に凜が、去って行く桜を止めようとするがアーチャーの腕がそれを止めた。

「なんで止めるのよ!」

「君が止めたところで、彼女は聞かないだろう。」

「だからって……」

「君の気持ちは分かる……。あの歳でいまだに一緒の布団で寝るとか……、ましてやおそろくは風呂も……。」

「ああああああああああ!!」

凜が頭を抱えて絶叫した。

その間に、桜はツツジと共に衛宮家から出て行っていった。

SS9 想定外

雁夜は、隣でスヨスヨと安らかに眠る桜を、枕に片肘を突いて眺めていた。

「なあ…。」

『こつちで喋ろう。』

『慣れないなんだよな。これ…。』

ツツジは、バオーによりできるテレパシーのような通信方法で会話を促した。

桜の反対側には、ツツジ。つまり雁夜とツツジで桜を真ん中に挟んでいる形で三人がひとつの布団（大きいの）に入っている。

桜が小さかった頃と違い、さすがに大きい人間三人は、布団が大きくても狭くなってくる。

雁夜は、それを感じて桜が大きくなったんだあ…つとしみじみ思う。

しかし…。

「んん…。」

ゴソゴソと桜が少し動く。

すると、ムニユツというか、モニユツというか、柔らかい二つのたわわな膨らみが雁夜の胴体に押しつけられる。

桜は、現在進行形で、雁夜に抱きついて寝ていた。

その結果、推定Eカップ（ツツジ調べ）のこの歳にしては育ちすぎなぐらい育った桜の胸が遠慮なく押しつけられることになる。ついでに十代半ば過ぎの若い少女の匂いに混じってシャンプーの良い匂いがするわけで…。

「〜っ。」

雁夜は、バオーによって鋭くなった感覚、とりわけ嗅覚の発達をこのときほど呪ったことはない。

『私は、気にしないよっ。』

『気にしろ！ 馬鹿！』

遠回しに我慢するなと言うツツジに、悪態をついた。

悶絶したい雁夜のことなどまったく気にもとめておらず、スヨスヨと寝ている桜。これは、自覚あつてのことか、無自覚なのか分からない。

『桜ちゃんの甘えん坊は、今に始まったことじゃないじゃん。意識するって事は…。』

『あーあー！ 言うな！』

『桜ちゃんも結婚できる年齢になったんだし、そろそろ、大決断……。』

『あーあー！ だーまーれー！』

『桜ちゃん、綺麗になったよね。しかも可愛い。見なよ、この寝顔。』

『わーわー！ 分かってるって！ 桜ちゃん、可愛い、超可愛い！

嫁に出したくねえ!!』

『じゃあ、お嫁に貰えば？』

『それとこれとは、話はべつー！』

『…うーん…。』

すると、桜がうなされた。

雁夜もツツジも通信を止めて様子を見る。

「うう…うう…、いや…、もういやあ…、お父様、お母様、姉さん…助けて…助けて…ううう…。」

「桜ちゃん…。」

おそらく、臓現が生きていた頃にされた魔術の施術の悪夢を見ているのだろう。目尻に涙が浮かび、寝顔を悲痛に歪めている。

「かり…や…さ…。」

「桜ちゃん。俺はここにいますよ。」

「私もいますよ。」

よしよしと、うなされてる桜の頭を二人で撫でる。

優しく撫でていると、やがて桜の顔が安らぎ、うなされていた状態から安眠へと落ち着いた。

それを見て、二人揃って、安堵の息を吐いた。

『……もう、昔のことどうなされることはないと思ってただけど…』

『そう簡単にトラウマは消せないさ。』

『これから先……、ずっと一緒にいられればいいね。』

『そうだな…。』

『あ？　もしかして…、お嫁に貰う気になった？』

『それとこれとは話は別だ！』

『え〜？』

そんなこんなで、夜は更けていく。

しかし……。

「……ん？」

『どうした？』

『……誰か来てる。ライダーが気づいた。』

『サーヴァント？』

『たぶん。』

『どうする？』

『私が行く。』

ツツジは、通信でそう言うと、素早く布団から出てふすまを開けて出て行った。

ライダーは、元蟲蔵の残骸が残り、なおかつ過去にギルガメッシュにボロボロにされた庭の方面で、塀の上を見つめていた。

「どちら様かしら？」

警戒を怠らず、その侵入者の様子を見る。

「……ライダーか……。」

濃い紫色のローブをまとった人物の声は、女の声だった。

ローブのフードを深く被っており、顔は見えない。

「強い魔力感じて来てみれば、とんだ見当違いをしてみましたわ。」
酷く残念そうに言うその女の言葉に、ライダーが、不愉快そうにする。

「あら？ 私では役不足かしら？」

「やぶ遅くに見張りを邪魔してごめんなさいね。さよなら。」

「まっ……！」

ライダーが動くより早く、相手は消えた。

「ライダー。」

そこへツツジが走ってきた。

「ツツジ。どうやら敵の先兵のようです。」

「うん。でも、目的はライダーじゃなかったみたいだね。」

「おそらくですが、サーヴァントかと……。」

「……ねえ、ライダー。お願いを聞いてくれる？」

「なんででしょう？」

「……衛宮くんの家に行ってくれる？」

「なぜ？」

「嫌な予感がする。桜ちゃんにはあとで言うておくから、最善を尽くしてくれないかな？」

「……本来ならマスターではない方の命令は聞かないのですが……、いいでしょう。」

「ありがとう。もちろん、何かあったらこっちも最善は尽くす。あなたは、大切な仲間だもの。」

「そう言っただけで、感謝しますわ。」

ライダーは、そう言っただけで微笑み、霊体化して、衛宮家へ急いだ。
「さてと……。嫌な予感が当らなきやいいけど……。」

ツツジは、ふうつと息を吐いて、踵を返し、雁夜と桜が寝ている部屋に戻った。

部屋に戻り、雁夜に報告している間に、桜が急に飛び起きることになる。

そして、桜の右手の令呪が消えていた……。

桜が、ライダーが……と泣きそうな声で言うので、急いで着替え

て衛宮家に向かつてみると、そこでは、サーヴァント・キャスターの襲撃を受けたばかりで、ライダーがセイバーを庇ってルールブレイカーなる武器で契約を破棄され、キャスターの支配下に置かれてしまった後であった。

「チツ……想定外だけど、仕方ないわね。ライダー、令呪をもって命じる、セイバーの相手をしなさい。」

「くっ！」

無理矢理に令呪の強制力を受け、ライダーが二本の短剣を抜いた。

「ライダー！」

「逃げなさい！ この女の狙いはセイバーよ！ セイバーを奪わせないで！」

ライダーが強制力に抵抗しながら叫んだ。

「ほう？ 令呪に抵抗するとは……。ライダークラスと侮っていたけど、中々やるようね。気が変わったわ……。」

「この……！」

ライダーが後ろ回り蹴りをキャスターに食らわそうとした。

途端、キャスターは、桜の右手からキャスターの左手に移っている令呪を使い、ライダーを屈服させた。

その場に倒れ込むライダーを、キャスターが杖で背中を突いた。

更にキャスターの傍らに倒れている、藤村大河の腕を掴み上げた。

「この二人を助けたければ、大人しくなさい。すぐ終わるわ。」

「貴様……！」

人質を取るキャスターに、セイバーが剣を握りしめて憤慨する。

「従ってはいけない！ くっ……!?!」

「あなたは、いい加減大人しくなさい。」

「ライダー……。」

「桜……申し訳ありません。」

「私のせいだよ！」

「いいえ、……あなたの予感は当たりました。ツツジ……。セイバーを

敵に奪われるよりはマシ…、っ！」

「たいした精神力ね。…そういえば、そちらの殿方。」

「…俺か？」

キヤスターが雁夜を示した。

「面白いモノを宿しているようね。そうね…。じゃあ、こうしましよう。バーサーカーを痛めつけたその力を見込んでお願いするわ。この二人を解放してあげても良いけど、その代わり…、私の配下になっってくれる？」

「なに？」

「雁夜さん！」

キヤスターの言葉に雁夜は眉をつり上げ、桜は悲鳴じみた声を上げた。

「私に服従なさい。そしたら助けてあげるわ。」

「ダメ！ ダメよ、ダメダメ！」

「桜ちゃん…。」

だだをこねるように首を振る桜に、雁夜は困ったように言った。

「私のことは…気にしないでください…。キヤスター…、令呪を奪ったくらいで…私を屈服させたとは思わないことですね…！」

「な…。」

次の瞬間、ライダーは、手にしていた短剣で自らの首を切り、血を噴出させ、血による巨大な魔方陣を描いた。

「ちい！ おまえええ!!」

次の瞬間、ライダーに手をかざしたキヤスター。するとライダーの体がその場から消えた。そして魔方陣も消えた。

「ライダー!? てめえ、ライダーをどこへ!？」

「予定が狂ったわ…。でも人質は…。」

「させないわよ！」

次の瞬間、凜の叫び声が聞こえ、壁が粉碎され、ガンドによる魔力の弾丸がキヤスターの頭に当たった。

「がっ…!？」

壁が粉碎されたことによる粉塵が舞う。

キャスターがその場に崩れ落ちると同時に手放した大河を、アーチャーが奪い返した。

「逃げるわよ！」

「遠坂!? けど、ライダーが！」

「諦めなさい! セイバーを奪われるよりマシよ！」

「遠坂……！」

「に……、逃がすもの……か！」

凜の言葉にカツとなった士郎だが、直後、粉塵を払うほどのキャスターの魔力が発生し、それどころじゃなくなった。

「ストライク・エア！」

放たれたキャスターの魔法と、セイバーが放った風の一撃がぶつかり、部屋がメチャクチャになった。

「この程度で……。っ!?!」

弾け飛んだ畳を貫通する一撃がキャスターの左肩を抉った。

「ぐっ……！」

キャスターが左肩を押さえてその場にへたり込む。穴が空いた畳が落ちた時、キャスターが見たのは、弓を構えたアーチャーだった。

キャスターが動けないでいるその隙に、キャスター以外の全員が逃げた。

キャスターは、素早く霊体化して、家を飛び出し、上空で実体化してローブを翼のように広げて周りを見回した。

「……逃げたか……。まったく、予定が狂ったわ。」

忌々しそうに呟き、上空でフツと消えたのだった。

SS10 奪還1

キャスター襲撃後、衛宮宅から、数キロ離れた場所の路地裏に逃げ込んだ。

「…追っては来ないわね……。」

「遠坂…おまえ…！」

「仕方ないじゃない。セイバーを奪われなかったためには。」

「そこまでして！」

「じゃあ、アイツにセイバーを取られてもよかったわけ？」

「っ!!」

「私がうまく立ち回っていれば…、ライダーを奪われることはなかったはずです。申し訳ありません、シロウ。」

「いや…、俺が藤ねえを人質に取られてたから、セイバーを止めたからいけなかったんだ…。」

「ごめんね、桜ちゃん……。私が最善を尽くしてって、ライダーに頼んだばかりに…。」

「どうしようもないだろ。まさか令呪ごとサーヴァントを取るなんて、そんな反則技が使える奴だなんて、誰が想像するかよ。」

胸の前で祈るように手を置いている俯いた桜に代わり、雁夜が言った。

それぞれが謝る相手に謝罪しているのを見ながら、凜はため息を吐いた。

そして、桜を見て、桜に近づいた。

「桜。」

「…：…なんですか？」

「あなたは、聖杯戦争を降りなさい。」

「凜ちゃん！」

凜の言葉に雁夜が声を上げた。

「そして、遠坂に帰るか、教会で保護を受けるのよ。」

「イヤです。」

凜の言葉を聞いて桜がすぐに拒絶した。

「マスターでなくなったあなたには、聖杯戦争に参加する権限はもうないわ。どこにも属さない魔術師は、教会の保護を受けるか、どこかの魔道の家の加護がないと魔術教会に目を付けられるのがオチよ。桜。あなたは、自分の希少性を分かっていないわ。もし魔術教会が目を付けたら、あなたは……。」

「それでもイヤ。」

「桜！ 私はあなたを思って……！」

「なら……、ライダーを取り戻すわ！」

更に言い重ねる凜に、桜が顔を上げて言った。

「それなら、文句は無いでしょう!？」

「サーヴァントを失ったあなたにできると思ってるの!？」

「私は、一人じゃないわ！」

「ああ、もちろんだ。」

「私、ライダーと約束したもの。こっちも最善は尽くすって。」

一人じゃないと言う桜に、雁夜とツツジが賛同した。

雁夜とツツジがいることを思い出した凜は、くっ……っと言葉を詰まらせた。

「凜。君の負けだ。あの様子じゃ、君の妹は、テコでも動かんぞ。」

「……分かってるわよ。でもね、桜、私がさっき言ったこと、頭の隅でも……。」

「いったん帰ろう、桜ちゃん。」

「そうだな。夜遅くに探索しても見つかるモノも見つからないだろうしな。」

「分かったわ。」

「ちよっとお、聞いてるの!？」

凜の言葉を無視して、三人は間桐邸に帰って行ったのだった。

凜は悔しさのあまり、路地裏の建物の壁を殴った。

「セイバー。」

「ええ。分かっています。彼女に協力するのですね?？」

「ああ。こうなっちまったのは、元を辿れば俺達のせいだからな。」

俺達を守るために、ライダーが犠牲になっていいわけがない。」

「私も、彼女とは、あの時の勝負を付けなければなりません。」

「明日、間桐の家に行こう。」

「はい。」

「あんた達…、やすやすと敵の懐に入ろうつての?」

「間桐は敵じゃない。」

「違うわ。キャスターよ。アイツの狙いはセイバー。セイバーを連れて行ったら、それこそ敵の思い通りよ。」

「じゃあ、遠坂はどうするんだ?」

「私は…。」

凜は、口ごもったが、すぐに腕組みして堂々と答えた。

「私も行くわよ。今後の戦局を左右するから、セイバーを奪われるわけにはいかないの。」

「じゃあ、一緒に間桐の家に行くか?」

「それは、なし。固まっていたら敵に隙を見せることになるわ。」

そうして、それぞれが動き、ある者達はキャスターからライダーを取り戻すため。

ある者は、セイバーを敵に奪われないようにするため。

それぞれ、動くことにした。

そして、翌朝。

朝靄がある早朝に、土郎はセイバーと共に間桐邸に来た。

「おはよう。衛宮くん。セイバーさん。」

「おはようございます。ツツジさん。」

「おはようございます。」

ツツジに出迎えられ、間桐邸にあげてもらった。

茶の間に通され、揃ってから会議となった。

「キャスターの居場所は分からないけど…、ライダーの匂いは辿っていける。」

「そんなことができるんですか？」

「衛宮くんの家でいったん途切れてるけど、風に乗ってくる匂いはある。微妙だけど、たぶん建物の中とかかも。」

「コイツの匂いによる探知能力は、とんでもないからな。信用して良いぜ。なにせ、匂いで盗聴までする奴だからな。」

「あなたは一体…？」

「私は、人間じゃない。けど、雁夜とも少し違う。」

不審そうな顔をしてツツジを見つめるセイバーに、ツツジは微笑んだ。

「まあ、それはそうと、凜ちゃんは？」

「あいつは、別に動くみたいだ。」

「うまくいけば、挟み撃ちとかできるかもね。」

「しかし、令呪ごとサーヴァントを奪うとはな…。」

「キャスタークラスは、そのクラスの名の通り、もつとも魔力を行使する能力に長けた英霊です。選ばれた英霊にもよるでしょうが、それぐらいのことが可能な英霊だったのでしょう。」

「ライダー…、だいじょうぶかな？」

「令呪が奪われたとなると、ライダーは、今頃、服従させられるために拷問を受けているかもしれません。下手をすると、ライダーと戦うことになるかもしれませんので、それを念頭に置いてかからなければなりませんよ？」

「ようは、キャスターから令呪を奪い返せば全部解決だよな？」

「まあ…そうですが…。」

「キャスターの狙いは、本当はセイバーだったんだ。セイバーを囚にするってのはどうだ？」

雁夜がそういうと、セイバーは難色を示した。

「……私は、サーヴァントです。聖杯戦争における、戦いの駒なのですよっ。」

「…悪かった。今の無し。」

「失敗したら、あのルールブレイカーってナイフでセイバーを奪われかねないからな…。」

士郎も、良い考えだとは少し思ったが、最終的には賛成できなかった。

「場合によっては、雁夜に、キャスターを倒して貰えばいいよ。今のところサーヴァントを相手にして、殺せる、一番の戦力なんだし。」

「そういえば…、そうですね。」

セイバーは、第四次聖杯戦争の時の雁夜の力を思い出した。

あのアーチャー…、ギルガメツシユの乖離剣による時空の歪みによってサーヴァントである自分達でも動けぬ中、彼だけが身動きを取ってギルガメツシユの首を切り落としたことを。

「セイバー?。」

「シロウ。もしも…私がキャスターの手に落ちた…、その時は…間桐雁夜を…彼を頼ってください。」

「何言ってるんだよ?。」

「彼ならば、キャスターを討つことができるでしょう。」

「つ…、そこまで。」

士郎が、雁夜を見た。

雁夜はポリポリとぼつが悪そうに頬を指で掻いた。

「決まり? それとも、もつと他に案がある?。」

「いや、今のところない。」

「同じく。」

「ツツジさん。お願いします。」

「分かった。…：…なんかこう…、…：…お寺っぽい匂いがする。」

「どこだよ? 寺つつても色々…。」

「ずいぶんと荒らされてる…。この微かに匂う、この匂いは…バーサーカーかな?。」

ツツジは、目を閉じて集中した。

「なるほど…。キャスターがどうしてセイバーを欲しがってるのか分かった気がする。」

「どういふことだ?。」

「キヤスターは、一度バーサーカーに痛めつけられてる。だからバーサーカーをさっさと倒してしまいたいんだ。そのためには、強力な戦力がある。そのためには……。」

「それでセイバーを？」

「でも、セイバーだけじゃきつと足りないって分かってるはず。だから、凜ちゃんのところのアーチャーも危ないかも。」

「アーチャーもか。」

「確かに、私とアーチャー、そしてライダーが揃えば、あのバーサーカーとも十分すぎるほど戦えるでしょうね。」

「けど…、向こうも少し考えてるね。」

「どういうことだ？」

「魔力の空気がないんだよ。もし、セイバーとアーチャーを捕まえても、それを維持するだけの力が無いんじゃないやダメだから…。だから誰を切り捨てて、その空気をやるか…。」

「あつ…、ライダー!?!」

桜が口を両手で覆った。

戦闘に長けたサーヴァントで選ぶのだとしたら、おそらくキヤスターは、魔力を消費する宝具に依存しているという点で、ライダーを切り捨てるだろうと思いついたのだ。

「絶対服従させられる令呪が向こうにあるということとは……、そういうことだよな。」

「セイバーとアーチャーを手に入れた瞬間に、ライダーを自害させればいいってわけだ…。」

「そんな!」

「あ…。」

「どうした?」

「凜ちゃんが、…先に動いてる。」

「えっ、そこまで…、けど、マズいんじゃない?」

「そうだね。私達も行こう。アーチャーを取られる前に。」

ツツジが立ち上がり、全員が立ち上がった。

そしてツツジが匂いで凜の匂いと、ライダーの匂いを辿り…、柳

洞寺へたどり着くことになる。

しかし、そこで待っていたのは……。

凜を人質にされ、ルールブレイカーで令呪ごとキャスターに存在を奪われたアーチャーがいた。

SS11 敗走

「…アーチャー?」

「すまん、凜…。君だけは生き残れ。」

雁夜達が駆けつけたときに見たのは、キャスターによってルールブレイカーに貫かれるアーチャーの姿だった。

「あら? 遅かったわね。」

キャスターが、フードを深く被っていて半分隠れた顔の口元を歪めて笑った。

キャスターの近くには、天馬に跨がっているライダーがいた。

「ライダー!」

「……。」

ツツジがライダーの名を呼ぶが、ライダーは反応しない。

よく見たら、ライダーがいつも付けている目の封じのベルトのようなもの外されていて、その目はアーチャーに向けられていた。

「ライダー。その呪われた目で、彼らを見なさい。」

「っ……。」

「マズい! 見るな!」

わずかに抵抗するような素振りを見せながら、ライダーがその両目をこちらに向けてきた。

メドゥーサたるライダーの強力無比な魔眼の力が、重圧となり、体を襲う。

「いい子ね。そのまま彼らを封じてなさい。」

キャスターが、口元を釣り上げたまま、ルールブレイカーブレイカーと杖を手にして近寄ろうとする。

「うっ…。」

「ツツジ!」

魔力が無いため、魔術回路を利用して魔眼の魔力を防ぐやり方ができないツツジの手と足が石化し始めていた。

士郎も桜も、魔術回路を使って魔眼の力を防ぐのがやっとだった

た。しかし、長くコレを続けていたらやがては、魔術回路が焼き切れてしまう。

「ライダークラスは使えないって思ってたけど、まさかこんな能力を持った者が正体だったから、セイバーを手に入れるには、ちょうどよかったわ。彼女を寄越してくれて、ありがとう。」

「そんなお礼はいらない！ライダーを返してよ！」

ツツジが石化しつつある手を無視して、キャスターを指さし、ガーッと怒る。

「それはダメよ。もとより聖杯を手に入れるため、最終的には自害させる予定だもの。」

「それって…、セイバーもアーチャーも？」

「ええ、そうよ。聖杯を手にするためだもの。令呪をもって命ずる…、アーチャー。」

「くっ…。」

アーチャーが、弓矢を出現させ、その矢の先を、ツツジに向けた。「他の者は、魔術師でも、彼女は違うわね？一度石化し、壊されたら二度と元には戻らないわよ？」

「させんー！」

セイバーがツツジを庇うように立ち、剣を構えた。

「あら？ライダーの魔眼の重圧を受けても、アーチャーの攻撃を全て防ぎきれるかしら？」

「…っ。」

セイバーは、自身の体を蝕むライダーの魔眼の重圧を感じていた。

「ごめんね…、ライダー…。私のせいだ…。」

「うう…、ツツ、ジ…。」

「ライダー。そのまま彼らを見てなさい。」

「そう上手くいくと…。」

「動かないでくれるかしら？あなたがその力を発揮する前に、アーチャーの矢が、その娘を撃つわよ？」

「それは、どうかな？」

「？アーチャー！」

「っ！」

一瞬訝しんだキャスターだったが、次の瞬間、アーチャーに命じ、アーチャーの矢が放たれた。

セイバーがそれを弾くが、次々に射られる矢の数に、魔眼の重圧を受けた体がついていけなくなっていく。

やがて、一本の矢がツツジに迫った。

それを瞬時に手で防いだ雁夜。

「なっ！」

アーチャーの矢よりも早く動いた雁夜に、キャスターが驚く。

そして握った矢を、雁夜はライダーに向けて投げた。

ライダーと天馬を守る膨大な魔力による壁が弾くが、その時、投げた矢に込められた魔力により、電撃のようなモノが発生した。その瞬間、飛び火でキャスターが弾かれて前に押し出され、ライダーが一瞬目をつむった。

その瞬間、距離を詰めたセイバーがキャスターに向けて剣を振り上げた。

「あっ！」

間一髪のところまでキャスターは、杖を盾にして剣の一撃を防いだ。杖は真つ二つになり、ローブの表面が切れた。

「ら、ライダー！セイバーを見なさい！」

「うっ…ぐっ…、逃げ…。」

バチバチと令呪による強制力を受け、それに抵抗するライダーが片目を必死に手で覆いながら、もう片目でセイバーを見た。

セイバーの体に魔眼の重圧が来るが、片目だけだったのでそこまです強くはなかった。

素早く振られるセイバーの剣を、キャスターは、必死に避ける。

「おのれ…！」

足元に瞬時に魔方陣を出現させて、爆発を起こし、粉塵をまき散らし、辺り一面に煙が舞った。

煙が晴れると、そこには、キャスターは、いなかった。そしてラ

ライダーも、アーチャーも姿を消していた。

ライダーがいなくなっただけで、ツツジの体の石化がなくなっただけだ。

「危なかった…。下半身までいってたよ。」

「ツツジさん！」

「…次は、ツツジは行かない方がいいかもな。」

「そういうわけには…。」

「おまえがライダーを奪われたことに責任を感じてるのは分かるが、さつきみたいに狙われたらどうすんだ？」

「…分かった。」

雁夜の言葉に、ツツジは渋々頷いた。

「遠坂。だいじょうぶか？」

「…ええ。」

倒れていた凜を、士郎が助け起こした。

凜は、枯れ葉が敷き詰められた地面から立ち上がると、パンパンと枯れ葉を払った。

「…：桜…。笑いたければ笑いなさい…。大口叩いて、この様よ…。」

「…笑いません。」

自虐的に言う凜に、桜はそう言った。桜の声には険は無く、どこか哀れむような色がある。

桜のその声色に混ざる哀れみと、周りの視線に気づいた凜は、悔しそうに拳を握りしめ、俯いた。

「アーチャー取られたから…、戦いにくくなったね…。」

「ライダーの魔眼で止められた隙に、アーチャーに射られたら防ぐのは難しいです。」

「変なコンボができちゃった？」

「セイバー。俺達を守る必要はない。お前はお前で全力で戦えばいいだろ？」

「キヤスターさえ押さえられれば、こっちの勝ちだわ。」

「じゃあ、残るライダーとアーチャーの相手は？」

「俺がする。」

雁夜が挙手した。

「ですが、いくらあなたでもサーヴアントを二体も相手には……！」

「いや、問題ない。」

「雁夜さん、無茶はだめ！」

「ムチャじゃないさ。」

「キャスターだけじゃないわ。」

黙っていた凜が喋った。

「葛木がいる。」

「葛木って、遠坂のクラスの担任の……。」

「そう、葛木宗一郎。あいつがキャスターのマスターよ。」

「なんだって！」

士郎は驚いた。

「けど、彼は魔術師ではないはず。けど、ただの人間じゃない。」

「どういうことだ？」

「彼は、自分のことを枯れ果てた殺人鬼だと言った。そして、私の魔術を素手で弾くほどの格闘技の使い手よ。」

「魔術を素手で……！」

「ハッキリ言って、まるで太刀打ちできなかつたわ。それほどの強敵よ。」

「じゃあ、私の影で止めるわ。人を殺すまでは出来ないけど、サーヴアントでもない私の影はそう簡単には破れないはず。」

「なら、俺も戦う。」

「半人前のおんたに何ができるってのよ。」

「これでも毎日セイバーに鍛えて貰ってたんだぜ？　俺が木刀を強化の魔術で固めて、葛木の隙を作る。間桐は、その隙について影で葛木を捕まえるんだ。」

「その方が確実ですね。私の影もそこまで早くないから……。」

使いこなせるようになってきたとはいえ、隙が大きい桜の影の魔術である。しかし、一度捕えれば、バーサーカーほどの強力なサーヴアントでもない限りは解くのは困難だ。

「そうね…。キャスターは、葛木に執着している。葛木を捕えられれば、キャスターを…。」

「凜ちゃんはどうする?。」

「私は、セイバーを援護する。士郎の魔力が不十分だから、いくら最優のサーヴァントであるセイバーでもキャスターに負ける可能性があるわ。それに、セイバーを取られたらお終いだもの。セイバー、ルールブレイカーにだけは最優先で気をつけるのよ。」

「分かっています。」

「…みんな、いったん帰らない? ここにいても、キャスターが逃げちゃったから、今から追いかけることもできないよ。」

ツツジがそう言った。

雁夜と桜は顔を見合わせ、それに同意した。

「お腹すいたし。みんなでご飯にしない?。」

「そうですね。大人数分作れば美味しくなるわ。」

「じゃあ、俺も手伝うよ。」

「ありがとうございます、先輩。」

「…あんたら、緊張感無いわね。」

「緊張感を解いて休息を取るのも、戦略のうちではありませんか?。」

「…セイバー、よだれ…。」

「おっと。」

士郎のご飯にすっかり虜になっているセイバーが、ジュルツと垂れた唾液を慌てて腕で拭いた。

呆れている凜以外のみんなが、少し笑い合い、柳洞寺から間桐邸に帰還したのだった。

白いご飯。パリッと焼いたウインナー。半熟の目玉焼き。ワカメと豆腐の味噌汁。漬物（自家製）。

簡単だけれど、美味しい朝ごはん。

「は〜〜〜。」

味噌汁を一口飲んだ凧が、力が抜けたように息を吐いた。

「凧ちゃん、何も食べてなかったんだろ？」

「朝ごはん食べるなんて悠長なことしてる場合じゃなかったんだもの。アーチャーは、一口でも食べとけっとうるさかったけど。アイツは主夫かっての。」

「シロウ。お代わりを。」

「はいはい。今日もよく食べるな、セイバー。」

「雁夜さん、お代わりは？」

「ああ、貰うよ。」

セイバーに続き、雁夜もお代わり。

怒濤のお代わり合戦は、しばらく続いた。

そして、客室で食後のお茶をまったりと飲んでいたときだった。

「よう。」

そこへ、この場にはいないはずの者の声が聞こえた。

開けていたふすまの外から見える庭の木の上から飛び降りてきたのは、ランサーだった。

「まったりしてるところ悪いが、悪い知らせだぜ。」

「どういうつもり？」

凧が警戒した。

「まあまあ、俺は別にお前らと戦いに来たわけじゃねえんだ。ただマスターからの使いつ走りよ。」

「何の知らせ？」

「言峰教会が、キャスターに襲撃された。監督役の言峰綺礼は行方不明だ。」

「なんですってー！」

「ところで、良い匂いがするなあ。俺も厄介になっていいいか？」

「ご飯と、お味噌汁ぐらいなら残ってますけど。」

「ああ、それでいいぜ。凝ったもん作んなくていいぜ。」

「なにたかってんのよ…。」

凜は、ご飯をたかるランサーに呆れ、そしてごちそうするツツジ達にも呆れた。

そしてランサーは、ウマウマとご飯と味噌汁と漬物を食べたのだった。

「あ、漬物うめーな。手作りか？」

「私が漬けたの。」

「ほく。顔に似合わず家庭的なんだな。」

「男っぽい顔で悪い？」

「いやいや、これだけ良い味出せんだから、いい嫁さんになるんじゃないの？ あ、味噌汁もうめえ。もしかし、そっちの嬢ちゃんが作ったのか？」

「いや…俺だけど？」

「なんだ、坊主か。」

「悪かったな。間桐じゃなくて。」

「いやいや、悪いとは言ってねえだろ？ 坊主もいい嫁さんになるんじゃないの？」

「俺は男だぞ？」

「私なら貰いますけど。」

「セイバー？ 何言ってるんだ？」

セイバーの言葉を冗談だと思った土郎だった。

「って…というか…、あの漬物、あんたが漬けたの!？」

「そうだけど？」

「あのキシヨイ寄生虫ついていたらどうすんのよ!？」

「あんなでつかいの、すぐ分かるわ。」

「桜！ あんた知ってる…。」

「だいじょうぶだよ。物理的に移植しない限りは、移ったりしないから。まあ…、昔のバオーは、ともかく…。」

「なにその言葉！ 不安になるようなこと言わないでよ！」

「昔のバオーは、宿主に卵を植え付けて、かえったら世界中に伝染するって生態だったんだけど、私のマザー・バオーに進化してから、その生態系が失われたんだよね。だから、雁夜に卵を植え付けるなんて

ことはないよ。」

「なにげに、怖っ!! そんな危険なモンだったのかよ、バオーって!! 初耳だぞ!?!」

「バオー作った人が、核弾頭レベルの危険物って言ったぐらい危険だったみたいだよ。」

「現在進行形で、危険じゃないの、あんた達は!」

「遠坂さん、聞いてなかったの? もうバオーは、変わったんだよ?」

「いいえ! 安心できないわ! やっぱり、あんた達は……ろ……、っ!?!」

「あら? 遠坂さん、まだそんな世迷い言を……。」

「間桐……!!」

また桜を怒らせ、影に巻き付かれて窒息死寸前までいってしまっただ凍だった……。

SS12 奪還2

アーチャーが奪われた。

数こそこちらが勝っているものの、サーヴァントの数による質で見たら、キャスターの方が上だろう。

最優のサーヴァントと言われるセイバーがこちらにいるとはいえ、マスターである士郎からの魔力供給が足りないため本来の力を全開で出せないのが現状だ。

「一時的とはいえ、マスターを交換できればいいのにね。」

「それができたら、簡単に令呪を取られちゃうわよ。」

雁夜、または桜にセイバーの令呪があれば、セイバーの魔力不足を一時的に補えると思つたツツジがそう口にする、凜がそう反論した。

「なあ、遠坂…。」

「なに？」

「セイバーの魔力供給をなんとかする方法つてあるか？」

「…:あるにはあるけど…。でもそれをしたら、あんた、魔術師としての才を失うかもよ？」

「なっ…。」

「それはともかく、今はキャスターをなんとかすることを優先すべきよ。」

凜は、そう言つて話を切り上げた。

「セイバーをキャスターにぶつけるって案は、そのままで行くのかい？」

「ええ。セイバーは、保有スキルに強力な対魔力があるわ。事実上、これがあるから魔術ではセイバーを殺せないし、それどころか傷ひとつつけられないのよ。キャスターにとって、これほど分の悪い相手はいないでしょうね。」

「でも、向こうには、令呪ごとサーヴァントを奪えるルールブレイカーなんて武器があるんだよ？」

「それは抜きにしてよ。」

ルールブレイカーは、論外だと凜は首を振った。

「まあ、とにかく…、キャスターが教会にいる内に倒すこと。…だよ
ね?」

「キャスターは、教会にいるのか?」

「うん。全然動いてない。たぶん、そんな身動きが取れないのか
も。」

「マスターの葛木に魔力が無いから、魂食いを繰り返してる奴だも
の。そう簡単に移動はできないでしょうね。」

「なんで?」

「最近、謎の失神事件とかガスが原因なのか分からない集団卒倒事
件があちこちで起こってるのよ。おそらくキャスターが生気を魔力
に変換したせいね。」

「なら、これ以上被害を出さないためにも、決着を付けよう。」

「言われるまでもないわ。」

「じゃあ…、いつてらっしやい。」

魔力が無いツツジは、ライダーの魔眼を防ぐため、留守番となつ
た。

教会の入り口の扉の前には、アーチャーが陣取っていた。

隠れることなく、やってきた雁夜を、アーチャーが見据える。

十メートル以上離れた位置で、雁夜は立ち止まった。

「…一人か?」

「ライダーは?」

「さてな…。」

その時、甲高い馬の鳴き声が後ろの方から聞こえた。

雁夜が、バツと横へ跳ぶ。すると、雁夜がさつきまで立っていた
場所を、光の塊が通り過ぎ、アーチャーの眼前で軌道を変えて、上空

へと飛び上がった。

「速いな…。」

「それを避ける貴様もどうかと思うがな。」

「事前に気づいてたからさ。」

匂いでライダーが上空から、天馬に乗ってこちらを狙っていたことを感知していた雁夜は、ニヤツと笑った。

「貴様に恨みはないが…。」

アーチャーが二本の双剣を生み出し、構えた。

「俺だつて恨みはないさ。」

雁夜は、集中し、バオー・武装現象を発動した。

「それが、貴様の力か。」

アーチャーが目を細めて聞くが、雁夜は答えなかった。

両者が動き、アーチャーの双剣と雁夜の腕の刃がぶつかった。

凄まじい金属音を鳴り響かせながら、両者の打ち合いが続いた。

「くっ！…これほどとは！」

アーチャーが押されていた。

凜から、雁夜が単身でサーヴアントを殺せるほどの力があるとは聞いていたが、これほどとは、と、アーチャーは、雁夜を侮っていたことを悔いた。

ならばと、距離を取ろうとすると、それより速く距離を詰められ、懐に入ってくる。

「なっ！」

そして首を狙われ、顎を逸らして辛うじて首の表面を切られただけに終わった。

顔が上になったため、もう片手がアーチャーの首を掴んで、アーチャーの長身を持ち上げた。

「ぐっ……。」

ギリギリと首を絞められる。このまま、気絶させる気なのか、雁夜は溶解液を使わなかった。

その背後から、最高時速で迫るライダー。

直後、グルンツと反転した雁夜が、アーチャーを使ってライダー

ごと天馬を殴った。

そしてそのまま、アーチャーを手放し、結果アーチャーは、横へ吹っ飛ばされた天馬とライダーの上に叩き付けられた。その際に、カランツとアーチャーの双剣が雁夜の足元に落ちた。

「…ブロークン・ファンタズム！」

アーチャーが唱えた瞬間、双剣が大爆発した。

雁夜が爆発の中に消える。

もうもうと上がる煙と炎。それをアーチャーは、見つめ、アーチャーの後ろの方でライダーが呻いた。

すると、煙と炎が不自然に揺らいだ。

そして、人の影が炎の中から歩いてくる。

服があちこち破れて、煙を纏っているが、雁夜自身は無傷だった。

「…：さすが、化け物か…。」

アーチャーは、ヨロリツと立ち上がりながら呟いた。

一方その頃…。

アーチャーのブロークン・ファンタズムによる爆発で、教会全体が揺れた。

「雁夜さん…。」

「間桐。心配なのは分かる。雁夜さんのためにも、早く終わらせるんだ。」

「…はい！」

教会の中の裏口から侵入し、キャスターと葛木を倒すため行動していた。

「…いたわ。」

葛木がいた。

しかし、キャスターの姿がない。

「いい？ 葛木はあなた達で止めて、捕まえれば万々歳よ。」

「分かってる。」

「先輩。行きましょう。」

「ああ。葛木！」

「……衛宮か。」

広く開けた場所に、葛木は一人立っていた。

「なぜ、キャスターに協力している？」

「…彼女が聖杯を欲していたからだ。」

葛木は感情のないような単調な口調と表情で言った。

その答えに士郎は目を見開いた。

「本気で…言ってるのか？ そのためなら、どれだけの犠牲者が出てもいいってのかよ！」

「私には、関係のない話だ。」

「葛木？」

「私は、『私』を尊重するだけだ。」

ゴウツと葛木が動いた。

直後、強化により強度を高めた二本の木刀で、士郎は葛木からの攻撃を防いだ。

桜は、後方で集中しながら、影の魔術で葛木を捕まえるタイミン
グを計った。

「シロウ…。」

「私達が相手をするのはキャスターよ。」

「分かってます…。」

物陰から様子を見ていたセイバーと凜が、キャスターの出方を待った。

その時、陰からルールブレイカーがセイバーに迫った。

「っ！ セイバー！」

「!!」

凜がいち早く気づき、間一髪のところまでセイバーは、その刃を避けた。その直後、凜が放ったガンダの光が陰に隠れていたキャスターに命中した。

「……よく避けられたわね。」

開けた場所に転がり出たセイバーと凜を見据え、ルールブレイカーと杖を手にしたキヤスターが陰から現れた。

「行くわよ、セイバー!」

「はい!」

セイバーが剣を構え、凜が手に魔力を集中させた。

「やはり………無理をしてもセイバーを奪っておけばよかったわ!」

「過去を悔いたところで無意味よ!」

凜がそう叫ぶ。そしてセイバーが駆け出す。

その直後、天から何かが降ってきた。

「! ライダー!?!」

それは、ライダーだった。ライダーは、天井から降りてきながら、両手握る短剣を振りかぶった。それをセイバーが迎え撃ち、弾かれたライダーがズザザッと床を滑ってキヤスターの傍らに行った。

「これで、少しはマシなはず……。」

キヤスターが令呪を使ってライダーを呼び寄せたのだ。

「ライダー! 彼女達を見なさい!」

「……はい。」

ライダーが目の封じを外し、セイバーと凜を見た。

「ライダー!」

「桜! こつちを気にしないで!」

桜の注意がライダーに向いたことで、凜がそう叫んだ。

目を見ずとも、認識しただけで魔眼の力がかかってしまうため、桜にライダーの魔眼の重圧が来た。

「ホホ……、存外使えるわね。ライダー、そのままその娘を石にしておしまい!」

「……うっ……。」

「あら、今更、抵抗? 元マスターだからかしら。」

「ああ!」

魔眼に抵抗した結果、桜の魔術回路が焼け始めて、桜は悲鳴を上

げた。

「間桐！」

「気にしている場合か？」

「ぐあっ！」

「きゃあああ！」

桜に気を取られた瞬間、葛木に吹っ飛ばされた士郎の体が桜に衝突した。

「桜！ 士郎！」

「シロウ！」

「あなた達の相手は私よ？」

自身の周囲に無数の光の塊を発生させたキャスターが、それを凜とセイバーに飛ばした。

セイバーは、剣でそれを弾いたりし、凜もガンドを放って相殺したりした。

「ライダー。セイバーを見なさい。」

「……っ。」

ハアハアつと呼吸を乱しているライダーが、セイバーを見た。

途端、強烈な重圧がセイバーを蝕む。

「チエックメイトね。」

「シロウ……！」

「せい……ば……。」

葛木に首を片手で締められ持ち上げられている士郎を見せられ、セイバーは、戸惑った。

「マスターを殺されたくなければ、そのまま大人しくなさい。」

キャスターがルールブレイカーを手に、セイバーに迫ろうとした。

その時。

「……つかまえ……た……。」

倒れていた桜が、小さくそう呟いた瞬間だった。葛木の足元から、凄まじい数の影の帯が現れ、葛木を絡め取った。桜の手が、士郎の影を通して、葛木の影に触れていた。

「ーっ!!」

ギリ…、ミシ…つと強く締め付けられる葛木。だが士郎を捕まえている手は離さなかった。

「先輩を…はなさ…ない、と…。」

ヨロヨロと上体を起こした桜は、葛木に触れている影の箇所から、吸収分解を行った。

強くはないが弱くもない、吸収による焼ける痛みにも、葛木はついに士郎から手を離れた。

「宗一郎様!!」

「よくやったわ、桜!!」

「お…、おのれええええ!!」

「さあ、キャスター！ 葛木を助けたかったら、右手を出しなさい！ 令呪を剥がすから!!」

「くっ!」

「私のことは気にするな…。」

「えっ?」

「宗一郎…さ…!」

次の瞬間、葛木が舌をかみ切った。

大量の血が口から流れ出て、葛木の体が重力に従って倒れていた。

「宗一郎さまー!」

「なんてやつ!」

両手で頭を抱え、大きな悲鳴上げ、キャスターは、葛木に駆け寄った。

「いや…いやあ!! 宗一郎様! 宗一郎様あああ!!」

泣き叫ぶキャスター。

その時。

「…ライダーとアーチャーを返してくれたら、助けてあげる。」

「な…?」

通路の影から現れたのは、ツツジだった。

「まだ間に合う。」

「宗一郎を…、たすけて…くれるの?」

「…その代わり…。」

「返すわ! 返すから!! 宗一郎様を!!」

「凜ちゃん。」

「えっ…、あつ。」

ツツジに促され、凜がキャスターに駆け寄った。

そして、すぐに儀式を行い、奪われていた令呪をキャスターから剥がした。

外した令呪が倒れている桜に戻り、支配から解放されたライダーがガクンツと膝をついた。

凜は、自分の腕に令呪が戻ったのを確認すると…。

「セイバー、とどめを。」

「…いいえ。」

「この女は、いずれまた貴女を狙うわよ?」

「ダメだ、遠坂…。もうキャスターは、戦意を喪失している。」

「…甘いわね。」

「ちよつと、どいて。」

「ちよつ…!」

凜をどかしたツツジが、グツと拳を握って、垂れた血を葛木の口の中に流し込んだ。

すると…。

「うう…。」

「宗一郎様!!」

「私は…なぜ、生きている?」

「私が生き返らせたの。」

「…お前は…?」

「私は、ツツジ。初めまして。」

「宗一郎様…。」

起き上がった葛木に、キャスターが涙を零しながら抱きついた。

そして大声を上げて、泣き出した。

葛木は、そんなキャスターを見おろし、少し戸惑いながら、ソツ

とその体を抱きしめた。

SS13 口づけ

ライダーとアーチャーの奪還に成功。

これにより、キャスターは、戦力を失い、ツツジに葛木を救ってもらった恩義に報いて、今後セイバー陣営、及びアーチャー陣営にも手を出さないし、場合によっては聖杯戦争をそのものを降りると約束した。

キャスターは、あくまでも葛木と共にいらればいいと主張し、元々の願いであった故郷に帰るということを捨てて、また、繰り返し行っていた魂食いもやめて、霊脈のある柳洞寺で落ち着くことで、葛木の傍にいたいだけを選んだ。

雁夜との戦いでボロボロになったアーチャーが、キャスターの正体が、神により愛に狂わされ裏切りの魔女という烙印を押された人物であることから難色を示したものの、最終的には折れ、こうしてキャスターとの戦いは終結することとなった。

「ところで、なに、この状況?」

「あら? 分かりませんか?」

戦いが終わり、それぞれ家に帰った矢先に、ツツジは、ライダーによって押し倒されていた。

なお、雁夜は、怪我をしてぐったりした桜を桜の部屋に運んで看病していたため、この場にはいない。

「私がこうしてここへ戻ることになれたのも、貴女のおかげです。それはとても感謝しているの。」

「そう? それは、よかった。桜ちゃん達が頑張ったおかげだよ。」

「ええ。もちろん、桜にも雁夜にも感謝していますわ。ですが、それ以上に...。」

ライダーのしなやかな指がツツジの首をすりと撫でた。

「私のことを大切な仲間だと言ってくれた、貴女には特に感謝しています。」

「事実でしょうか?」

「私のような本来なら反英霊として召喚されるはずだった化け物を、仲間だと受け入れてくれた。それだけでも…私は…。」

「うくん…。そう言ってくれるのは嬉しいし、そういう指向性も理解できるけど、…ごめんね。」

「私がお相手では不十分かしら？」

「いやいや、ライダーは美人だから十分すぎるけど…。私の中の、モノがそれは、ダメだって言ってる気がするの。」

「それは…。」

「私の中の、コレは、強い子が産まれることを望んでる。早くしろって…、言ってる気がするの。それは、私が初経を迎えた時からずっと聞こえてるもの…。」

「ツツジ…。」

そう言つて切なそうに微笑むツツジに、ライダーが顔を近づけ、口づけを落とした。

「……っーら。」

「あうっ。」

口づけを続けていたら、ペシンツとツツジに頭を叩かれた。

頭を押さえるライダーの下からツツジが抜け出した。

「今、変な『流れ』が入って来たよ？ その気にさせたかったんだろうけど、下手にすると私が暴走するから気をつけてよ。」

「貴女も、雁夜のように？」

「うん。この『流れ』を魔力として逆手にすれば、ライダーを殺せちゃうよ。」

「…それもいいかもしれませんわ。」

「こら。そんなことしたら、桜ちゃんに怒られるから。」

「…そういえば、桜の様態は…。」

「うーん。ライダーの魔眼に抵抗して、少し魔術回路が焼けたりしないからね…。」

「すみません…。」

「キャスターに服従を強いられてはとはいえね…。」

その時だった。

廊下の方からドタバタと足音が聞こえ…。

「大変だ!」

雁夜だった。

「どうしたの?」

「桜ちゃんが!」

青い顔をしている雁夜の様子に、ツツジとライダーは顔を見合わせた。

そして、雁夜と共に桜の部屋に急行すると、布団の上で胸を押さえてのたうっている桜がいた。

「桜ちゃん!」

「どうする、ツツジ!? 病院に連れてった方が…。」

「いや…、これは…病院じゃ治せないよ。」

「つまり!」

「たぶん、魔術回路が焼けた影響だよ。」

「そんな…。私のせいだ…。」

「ど、どうしたらいい!」

慌てふためく雁夜と、真っ青になるライダー。

ツツジは、落ち着いて、うーんつと考えこみ…。

「雁夜。血をあげて。」

「はっ?」

「魔術師の治療は、魔術師がすべきだと思うよ。」

「なるほど! 魔力供給もできますしね。」

ライダーが名案だと言った。ライダーだけが感じていたが、桜と繋がっている魔力供給のパスが軽く乱れていた。

「わ、分かった…。」

「ただし、この状態じゃ、桜ちゃん、血を吐いちゃうと思うから…。」

口移しで無理矢理飲ませた方がいいかも。」

「……………はい？」

たっぷり時間をおいて、雁夜がキョトンとして言った。

その間にも桜は苦しそうにうめき声を上げた。

ハツとした雁夜が、桜とツツジを交互に見た。

「ほら、早く！ 桜ちゃんが苦しんでるんだよ？ 恥ずかしくて
場合じゃない。」

「わ、分かっているって……。でも……。」

「なに？」

「…ファーストキス……。」

「…経験無かったの？」

「ああ…、じゃなくて！ 桜ちゃんの！」

「それ気にしてたら人命救助なんてできない！ ほら、早く！」

「は、はいいい。」

ドンツと背中を叩かれた雁夜は、よろつきながら、桜の傍にきて、
のたうっている桜を掴んで押さえた。

「……ああ……ううう……かり、や……さ……ん……。」

「桜ちゃん……。」

雁夜は、自分の指の表面を噛みきり、口の中に鉄の味を広げてか
ら、桜に口づけた。

「ん……。」

桜の口の中に、鉄の味が広がる。

魔術回路の軽い暴走で赤らんでいた顔が、徐々に元の色を取り戻
していった。

それから数分ぐらいだろうか、口移しで血を与え続けていると、
桜の動悸は治まっていき、やがて、暴れていた桜の体からフツと力が
抜けた。

「つ……、桜ちゃん！」

口を離れた雁夜が、ぐったりしている桜を見た。

桜は、目を閉じ、ハーっと、楽になったという感じで息を吐いた。

「ど……？ 桜ちゃん？」

「……楽になった……」

「魔力の暴走も止まったようですね。」

「よくやりました。雁夜。」

「あ、ああ……」

「雁夜さん……、ありがとうございます。」

桜が、微笑んだ。

雁夜は、ホツとして桜の頭を撫でた。

桜は、気持ちよさそうに目を細めてた。

SS14 告白

桜がメチャクチャご機嫌だ。

「どうした、間桐？ メチャクチャご機嫌だな。」

「うふふ…。」

士郎が聞くと、桜はご機嫌なのを隠しきれず笑う。

「実はですね…。雁夜さんの、ファーストキス…。もらっちゃいました！」

「おおっ。すごい…進展だな？」

「もう嬉しくって！」

「それでご機嫌だったのか。」

「あの…。」

「あ…。そうだった。」

話が脱線したので、セイバーがおずおずと言ってきたので、話を戻すことにした。

「それで、話ってなんだ？ ライダーまで連れてきて…。まさか、また戦うのか？」

「いいえ。実はあれから話し合って…。セイバーさんが良ければ、ライダーとセイバーさん。二人が生き残った場合。私達が聖杯戦争を降りるって決めてきたんです。」

「間桐…。それでいいのか？」

「はい。私は別に聖杯にかける願いはありませんし…。」

「ライダーには、願いは？」

「私は、そもそも願ひなどありません。」

桜の隣に座っているライダーが首を振ってから答えた。

「けど…。本当にこのまま聖杯戦争を続けていいのでしょうか？」

「つと、いうと？」

「雁夜さんが言っていました。」

桜が少し間を置いて話し出した。

かつて、雁夜は、自身の目の前で聖杯が破壊され、そして天に空

いた黒い孔から、冬木市を煉獄のような大災害をもたらす災いが降ってきたことを。

「なっ……。」

「……先輩……。」

「アレが……、私が聖杯を破壊したから……!？」

「セイバー?」

セイバーが血相を変えて叫んだ。

「それでは……、私がやってしまったことは……、シロウを……。」

「セイバー……、おまえ……。」

「すみません……シロウ……。私は……!!」

士郎からの視線にハツとしたセイバーが、顔面蒼白で、体をガクガクと振るわれてスカート裾を掴んで俯いた。

「どうしたセイバー……? なんで……謝る?」

「私は……私は!!」

「……そうです、先輩……。」

「間桐?」

「あの時……、十年前のあの災害のきっかけになった聖杯の破壊を行ったのは……、セイバーさんです。」

「……………えっ?」

「そして、セイバーさんの、過去のマスターであった人物は……、先輩の義理のお父さんである、衛宮切嗣でした。」

「……………まさか?」

「そうです、先輩……。セイバーさんに、聖杯を破壊させたのは……、呪の強制力を使った貴方のお父さんです。」

桜が辛そうに語ったその言葉。

士郎は、何を言っているのか理解できなかった。

士郎の隣で、激しい後悔に苦しみ、うめき声を上げるセイバーの声で士郎は、それが事実だと真っ白になった頭で、なぜか理解した。

そして、ついに感情が決壊したのか、セイバーが大声を上げて泣き出した。

「雁夜さんは、聖杯の正体を知りません。私ももちろん知りません

し、ライダーも知らない。おそらくセイバーさんも知らないと思います。ですが、あんな大災害を起こした聖杯が、万能な願望器とは思えないんです。」

「…桜。話の順序を間違えましたね。」

「あ…。」

机を挟んで対面している土郎が、呆然と俯いて、思考の袋小路に入っただけで、その隣にいるセイバーが嗚咽を漏らして泣いているのを見て、桜はマズいことをしてしまったと、口を押さえた。

「ですが…、いずれは対面する事実なのですから…。よくお考えください。」

ライダーが、土郎とセイバーにそう言い、桜を立たせた。

「先輩…。ごめんなさい。」

「話は以上です。では。」

ライダーに手を引かれ、桜は衛宮宅から去って行った。

「桜ちゃんを責めないであげてね。」

「ツツジ!?!」

桜とライダーがいなくなったあと、どこからともなくツツジが部屋に現れた。

ハッと我に返ったセイバーが警戒する。

「いずれは…、話すって決めてたんだけど…。」

「ツツジ…:…さん…:…」

「あの災害を経験した生き残りである、貴方を見つけたのは、その元凶をもたらしてしまった衛宮切嗣だった。貴方は…、彼を恨む?」

「…:…ない…:…」

「ん?」

「恨むわけないだろ! 爺さんは、俺に生き方と魔術を教えてください。た恩人であっても、恨むなんてこと…:…!」

「シロウ…:…」

「私は、知ってた。」

「はっ?」

「あの煉獄のような大火災の中、死にかけていた貴方を見つけ、衛宮切嗣が貴方を見つけてほんの一握りの希望を見いだしたことを。」

「……きぼう……？」

「貴方が生きていたこと、それを見つけられたことが、早計による災いをもたらしてしまった罪に苦しむ彼にとって、最後の心のよりどころだったんだよ。」

「俺なんて……ただ死にぞこなただけだったのに……。」

「それでも、貴方は希望だった。彼にとつては。……セイバー、貴女は、知ってるんだよね？ 衛宮くんの心に残っているあの赤い光景を……。」

「……セイバーが？」

「ライダーが言つてた。サーヴァントとマスターは、パスを通じてそういう過去の記憶を共有することもあるんだって。」

「っ……。」

「セイバーの過去の記憶……、見てるでしょ？」

「……シロウ？」

「……見てる。」

「セイバーの記憶が見えたなら、衛宮くんの記憶を、セイバーが見ても不思議じゃないよ？」

「そうなのか、セイバー……。」

「………はい。」

「だから、余計に辛かった。聖杯を破壊した後のことを見てないから、余計にそう思えたんだよね、セイバー。」

「……はい。」

「セイバー……。」

「……分かってます。どれほど謝っても、どれほどにこの仮初めの身を引き裂いても、私が犯してしまった罪は消せないのだと。」

「そんないい方！」

「切嗣の罪は、私の罪も同然です。重ねがけられた令呪の強制力に抗えなかった……、私も同罪なのです。」

「セイバー……。」

「……………話を変えるけど…。」

ツツジがスツと人差し指を突き出した。

「ひとつ、頼みがあるの。」

「なんですか?」

「衛宮士郎くん。……私に、子種をくれない?」

「……………はい?」

「ちよっ!!」

衝撃の言葉にセイバーが吹き出しかけた。

「なーんで、こんなに君のことが気になるのかって、色々と考えたの……。それで、思い当たったのが……。私の中にあるマザー・バオーが、きつと本能から、衛宮くんの子種があれば、強い子が産まれるから欲しがってるんじゃないかって。」

「なんでさ!?! だだだだだ、だからって!?! 何言ってるんですか! 意味分かってんですか!?!」

「そうですね! 貴女は何を言い出すんです!? あの寄生虫を与えようとしていたのは、まさか…。」

「きつとそうすれば、操れるからだよ。そうすれば、簡単に子種が貰えるじゃん。」

ニマ〜と笑うツツジに、士郎とセイバーは、絶句した。

「で? くれる?」

「丁重に…お断りします!!」

「私が相手じゃ不服だった?」

「いや、そういう意味じゃ…。」

「シロウ! 乗ってはいけません! マザー・バオーというのがどれほどの脅威なのかは私には計りかねますが、雁夜殿の力を考えれば…:とんでもないモノが産まれるということでしょう!」

「そうだね…。単なる母体である私の想像も出来ないようなとんでもない子が産まれるかも…。」

「ダメです! ただでさえ、あなたは凜から、とんでもない脅威だと警戒されているのに、子が産まれたとなつては、それ以上と判断されまますよ!?!」

「ま、それはそれ、コレはコレ。ま、痛くはしないから、一晩だけ…。」
「ダメです!!」

「あいたつ。」

顔真つ赤かになっっている士郎に手を伸ばそうとしたツツジの手を、セイバーが渾身の力で弾いた。普通なら腕が千切れ飛ぶほどの力だが、頑丈なツツジは、手がちよつと痛くなっただけで済んだ。

「シロウは、私の…。」

「セイバー?」

「あ…、なんでもありません…! 今のは忘れてください、シロウ!」

パタパタと違う違うという風に手を振るセイバーに、士郎はキョトンとした。

「あらら…先客がいたか…。残念。」

「違いますから!」

「セイバー、どうした?」

残念だと大げさに振る舞うツツジに、顔真つ赤にしたセイバーが怒鳴る。

「大事にしてあげなよ?」

「何を言っているんですか!?!」

「だから、どうした? セイバー?」

「ごめんね。散々騒がせといて、なんだけど、今日はごめんね。じゃっ。」

そう言っつてツツジは、玄関から出て行った。

嵐が去ったような静けさとなり、セイバーが、プルプル震えていた。

「セイバー? どうした、ほんとうに…?」

「シロウ…。私は決めました。」

「は?」

「絶対に! 私が、シロウを幸せにしますから!!」

「ええー!?!」

「切嗣のように、生き方や魔術の使い方は教えられませんが、私は

…、うっ…!」

「セイバー…!?!」

勢いのままに告白したセイバーが、とうとう魔力不足すぎてぶっ倒れて、凜が緊急招集されたのは、また別の話である。

SS15 気狂い

衛宮宅から出て、しばらく歩いていたツツジは、ふいに立ち止まり、はあ…つと息を吐いた。

「そこにいるんでしょ？ 出てきたら？」

「…気づいてたのかよ。」

「サーヴァントは、独特な匂いがするもの。」

ツツジの後ろに、ランサーが飛び降りてきた。

「例え、霊体化してても、分かるようになった。」

「ほー。いよいよ、人間離れも極まったわけか。」

「言峰さん、元気？」

「…：嬢ちゃん…、どこまで知ってやがる？」

ランサーに対して背中を向けたままのツツジの首の横に、顔を僅かにしかめたランサーが槍を置いた。

「…：全部ってわけじゃないけど、少なくとも、この冬木市内のこのとは、だいたいかな。」

「結構な範囲じゃねえかよ。」

「頼みがあるの。」

「なんだ？ 藪から棒に…。」

「…：食べさせて。」

「はっ？ つ!？」

次の瞬間、ランサーがツツジの首の横に置いていた槍を、ツツジが掴んだ。

そして、ガリツと槍の先端を、ツツジが嚙った。

「おい！ 何してやがる？」

「…：コレじゃだめか…：。直接本体から行かないといけないかな。」

「…：おめえ…。」

ランサーは、握っている槍が、ツツジに掴まれており、抜くことも押すこともできずにいた。

「血の味がする…：。この匂い…：、キヤスターを？」

「…：ああ、そうだよ。」

キャスターは、すでに討たれていた。おそらく葛木も、生きてはいないだろう。

「じゃあ、アサシンも今頃…。」

「ああ、マスターのキャスターがいなくなっちゃったからな。自然消滅するだろうよ。」

「…キャスターでもよかったけど、一応休戦してたし…。ライダーは、桜ちゃんのだし…。」

「何をする気だ？」

「…：魔力が欲しい。あと、出来れば子種も。」

「おい…。どうしたんだ？ 変だぞ、おまえ？」

「どうしたんだろうね？ 私にも分からないの。」

次の瞬間、とんでもないスピードで、ツツジの掌がランサーの顎の下に決まり、ランサーはのけぞった。

その瞬間を狙って、足払いをしたツツジが、そのままの勢いで倒したランサーの上に乗った。さらに、奪い取った赤い槍で、ランサーの右手の掌を貫いて地面に縫い止めた。

「…サーヴァントってさあ、極端な話、単なる魔力の塊なんだって？
ライダーから聞いた。」

「つつ…、この野郎…。気でも狂ったか？ 嬢ちゃん…？」

「…：そうだね。気がおかしくなったんだろうね。だから…。」

地面に仰向けで倒れているランサーの首に、ツツジは顔を近づけた。

「…：…：いただきます。」

「っ!!」

ランサーは、首を噛みきり、肉ごと血を貪るツツジの行為に顔を苦痛に歪めた。

「…っ？」

「雁夜さん、どうしたの？」

「いや…、なんだ、この変な匂い…。ツツジ？」

「ツツジさんが？」

「ごめん。桜ちゃん、ちよつと行ってくる。」

「私も…。」

「いや、俺だけで行くよ。猛烈に嫌な予感してるから…。」

「お気を付けて。」

桜とライダーに見送られ、雁夜は、急いで出て行った。

匂いを辿ってついた場所では……。

「なにやっつてんだ、おまえ…？」

「なにして…、見たままだけど？」

「…おせえよ……。」

仰向けで倒れているランサーの上に、馬乗り乗っているツツジが、口元を真っ赤に染めていた。

ランサーは、ゼエゼエと荒い呼吸をしており、その首の横は、無残にも挟れていた。

「雁夜さん…、悪いんだけど…。今から衛宮くんのところに行こうと思うの。」

ランサーの上から、ユラリツと立ち上がったツツジが言った。

「そんな有様で行ったら、びっくりされるぞ？」

「いいもーん。その方が…、隙が出来る…し。」

「ツツジ…、どうしたんだ？」

「…早いところ…、どうにかしろよ…。お前んところの、嬢ちゃんだろ？」

失血のため、まともに動けないでいるランサーが雁夜を睨みながら言った。

「ふふふ…、子供…欲しいなあ…。衛宮くんの子種なら、強い子が出来るはず…。」

「ツツジ!!」

「なに？」

「おまえ、どうにかなつちまったのか!？」

「私は、私だよ……？」

「嘘吐け……。いや、お前かも知れないが、お前であつて、お前じゃないな。強いて言うなら……。お前の中の……。」

「そう呼ばれてる。」

その直後、ツツジの顔から表情が消えた。

フツと消え、直後、雁夜は、突撃してきたツツジの体を受け止めた。

「あはあ。ほんと、強くなつたね。雁夜。」

「ツツジ……！」

雁夜の体が武装現象を発動しようとして……。

「マザー（母体）に勝てると思つてる？ ただの子（兵）が。」

「ぐっ!!」

次の瞬間、頭が割れるように痛くなつた。この感覚には覚えがある。そう……。ツツジにマザー・バオーの力を向けられたときのアレだ。

「あは……。ハハハハ!!」

ツツジが口元を歪めて、狂つたように笑い出した。笑い声に同調するように、雁夜の中のバオーが暴れているのか、凄まじい連続した痛みが走る。

「ぐ、ああああああ!!」

「おまえに、ヨウは、ナイ……。」

「雁夜さん!!」

スツと手を雁夜にかざそうとしたツツジに、ライダーの鋭い蹴りが入って吹っ飛ばされた。

倒れている雁夜に、桜が駆け寄つた。

「雁夜さん、雁夜さん！」

「だ、だいじょうぶだ……。それより……。」

「アナタまで、ジャマする、気？」

「ツツジさん……？」

「あなた……。ツツジではありませんね。」

「ワタシは、ツツジ…、ツツ…、ジ…。」

「あれで気絶しませんか。仕方ありませんね…。」

「ライダー!」

「気をつけろ! そいつは…。」

ライダーが目の封じを外し、石化の魔眼を向けた。

しかし、バチンツと紫電の閃光が弾けた。

「気をつけろ! ツツジやつ…、ランサーから魔力を食ってやがる

!!

「私の魔眼を…。」

ライダーは、魔眼の力を、ツツジが強引に取り込んだ魔力で弾いたのを見て驚愕した。

「ツヨイ…子が…イル…。魔術師のチカラ…、ソレを得た…子供…。」

「なるほど? …で、衛宮くんをか。」

「あああ…、ううう…、私の…、子…、欲しいだけなのに…。」

「ツツジ?」

「……………ごめんね。」

紫電をまき散らしていたツツジが、唐突に両膝を突いてそのまま倒れた。

シーンつ、と、場が静まりかえった。

「おーい…、ツツジ?」

「……………一歩も動けない…。」

「無理をしてサーヴァントから、大量の魔力を吸引するからですよ。」

弱々しく声を漏らしたツツジの姿に、ライダーがヤレヤレという感じで言った。

「あたま…グルグル…。」

「どうしたの?」

「おそらく…魔力で酔ってるわ。」

「結局、なんだったんだ?」

「……………あくまで、私の推測ですが

……………、発情期という奴だったんじゃないでしょうか？」

「はっ？ 今の今まで、十年もそんなことなかったのに？」

「ツツジ…、貴女…生理中ですよね？」

「うん…。」

「女性の体は、そういう時期は、人によっては大きく、変動しますから、原因はそれかと…。」

「なんじゃそりゃー！！」

「…いい迷惑だぜ…。」

雁夜が絶叫し、倒れているランサーが、はあ…つと息を吐いていた。

ツツジの暴走は、こうして、終わりを告げたのだ…。

ライダーの見方によると、ランサーは、消滅寸前ぐらいまで魔力を奪われているらしかった。

このまま、この場に放置していくわけにはいかないので、雁夜がランサーの肩を貸し、間桐邸まで連れて帰った。

「…水、飲めますか？」

「…：わりいな…。」

「いや、むしろお前は被害者なんだ。謝るなよ。」

ランサーは、ライダーに水を飲ませて貰っていた。雁夜は、その様子を見ながら、そう言った。

ランサーを布団に寝かせて、動けるまで魔力の回復を待つことになった。

なお、この場にはツツジはいない。こっちはこっちで、魔力の大量吸引で酔っていて、自室で治るまで待っていた。桜は、ツツジの看病をしている。

「へん…、サーヴァントともあろうモンが、この様だぜ…。」

「仕方ないぞ。ツツジが相手じゃ、サーヴァントも形無しだからな。」

「あの嬢ちゃん…何者だよ？」

「ちよつと、変な寄生虫を持って生まれた、人間さ。」

「人間ねえ…。」

ランサーが胡散臭そうに言った。

「アレを、人間だつていうなら、他の普通の人間がどうなんだつて話だぜ。サーヴァントを食う人間がいるなんてよ。」

「アイツの暴走に気づけなかったのは、こっちに非がある。…すまなかった。」

「迂闊にアイツに近寄ったのは俺だ。」

ランサーが寝ている布団の隣で頭を下げてくる雁夜に、ランサーは、そう言った。

「たまたま見かけて…、ついつい出来心で近寄ったのよ。」

「おまえ、仮にも英霊だろ？ 抵抗しなかったのか？」

「顎にとんでもない重い一撃食らって、脳しんとう起こしたところに押し倒されちゃった。」

はく、情けねえわつと、ランサーが腕で目を覆った。

「雁夜、なんでしたら、あなたの魔力をランサーに与えては？ その方が早く回復するかと。」

「魂食いする気はないぜ？」

「いつまでも寝とくわけにはいかないだろ？ それともやつぱ男の、それもおっさんの血はイヤか？」

「別にその点については文句はねえよ。」

「じゃあ、さつさと飲め。」

そう言つて、雁夜は右腕をまくり、少しだけ武装現象を発動して、鋭く尖らせた爪で、右腕を傷つけてから、ランサーの顔の前に差し出した。

「じゃあ、いただくぜ。」

ランサーは、そういうと、雁夜の腕に噛みついた。

「だめええええ!!」

「うお！ 桜ちゃん!？」

そこへふすまを開けて桜が飛び込んできた。

「ライダーか、セイバーさんならまだしも、他のサーヴァントに雁夜さんの血をあげるのは、イヤー！」

「桜ちゃん。一応…人命救助みたいなもんだし…。」

「イヤ！ 雁夜さんの、血肉は私の物！」

「おーい！ なんか危ない発言してるよー!!」

「ごっそさん。」

「あ？ もういいのか？」

そうこうしている内に、魔力を供給したランサーが布団から起き上がり立ち上がった。

「動けりゃいい。…それにこれ以上やると、そっちの嬢ちゃんに何されるか分かんねえからな。」

ランサーは、そう言いながら、桜の足元で揺れている帯状の影を見た。

「やれやれ、こええ女揃いだな。苦労してるだろ？」

「えっと…その…。」

「じゃあな。サンキュ。」

そう言っつてランサーは、霊体化して消えた。

「雁夜さん？」

「あ、さ、くら…ちや…。」

「…酷いわ…。」

「えっと、だから…人命救助…、あ、あー！ー！！」

「まあ。桜は強烈ですわね。」

桜にお仕置きされる雁夜を見て、ライダーがお熱いことだという風に呟いたのだった。

それから、十数分後だろうか。

突然電話が鳴り、ライダーが出ると…。

「大変です。衛宮士郎殿が、バーサーカーのマスターにさらわれたもようです！」

セイバーからのSOSだった。

アインツベルの森の入り口で待ち合わせをして、ツツジを家に残して雁夜と桜、そしてライダーが急行した。

「遅いじゃない。」

「ごめん。色々あったんだ。」

腕組みして待っていた凜に、雁夜は謝った。

「救援、感謝します。」

「先輩は？」

「おそらく、この森の先にある、アインツベルンの城にいるかと…。」
「それが、妙なよね。」

「つとというと?」

「アインツベルンが保有するこの土地には、一般人がまず入り込まないように魔術の結界や、人よけの魔術がかけられてるはずなの。それが、微妙に…ないのよ。と、言っても、私くらいの魔術師でないと分からないくらいレベルだけど。」

「…つまり俺達を誘っているって事か。」

「必ず私達がシロウを救出しに来ると考えているのでしようね…。」

「雁夜さん。」

「なんだい?」

「この先に行けば、必ずイリヤとバーサーカーとかち合うわ。そうになったら、バーサーカーの相手をして貰えるかしら? セイバーも万全じゃないの。」

「…分かった。」

「雁夜さん…。」

「だいじょうぶだ、桜ちゃん。」

不安そうにする桜に、雁夜は微笑んで見せた。

「私も援護しますよ。」

「ありがとう、ライダー。」

戦いの援護をすると申し出てきたライダーに、雁夜はお礼を言っ
た。

そして、土郎救出のため、一行はアインツベルンの森へ入って
いっ
た。

SS17 救出

凜の読み通り、アインツベルンの森の人よけの仕掛けは、凜ほどの魔術の感覚の持ち主ならすんなりと中心部であるアインツベルンの城への道を見つける程度に弱められていた。

雁夜は、森の中を進みながら、昔のことを思い出した。

「そういえば、第四次聖杯戦争の時に、この森で、当時のセイバーとランサー（ディルムッド）と共に、キャスターを迎え撃ったなあつと。」

「そういえば…、柳洞寺にいたキャスターと葛木が討たれたわ。」

「えっ？」

森を進んでいく途中で、凜が唐突に言った。

「アサシンは、キャスターの下にいたし、バーサーカーの気配も残ってなかった。おそらくは、ランサーの仕業ね。」

「あいつ…。」

間桐邸に連れ帰ったときのランサーがそんな素振りひとつ取ってなかったことを思い出し、雁夜は苦虫をかみつぶしたような顔をした。（ツツジは知ってる）

「マスターであるキャスターが討たれた以上、アサシンは、自然消滅するでしょうね。つとになると…、残るサーヴァントは、アーチャー、セイバー、ライダー、そして…、ランサーとバーサーカーだけね。」

つまり、ほぼ味方同士のサーヴァントが残る勢力の半数以上を占めたことになる。

もし、バーサーカーを討てれば、残る敵陣営は、ランサーのみとなるだろう。

ランサーのマスターが誰なのかは、まだ分からないので、注意するに越したことはない。（ツツジは知ってる）

「見えたわ。」

「こんなところにヨーロッパ式のお城があるなんて…。」

「アインツベルンの趣味よ。」

桜の眩きに、凜がそう答えた。

「シロウ…。」

「待ってください。」

ライダーが、セイバーを止めた。

全員が物陰に隠れると、城の扉が開いて、そこからイリヤが現れた。

そして、スタスタと後ろにバーサーカーを連れて歩いて行った。

「チャンスね。」

「……………罨じゃないか?」

「どうしてよ?」

「…さつきから、この森に入ってからずっと、視線の匂いを感じる。たぶん、俺達はずっと見られてる。」

「なにそれ、視線の匂いってなによ。」

「例えそうだとしても、懐に飛び込まなければ…、シロウは救えませんが。」

セイバーは、おそらく焦っているようだ。

あとで、凜から聞いたが、士郎がさらわれたタイミングは、凜が士郎とセイバーの魔力供給問題をなんとかするため奔走している最中だったらしい。方法を実行する手前で士郎がいないうちに、魔力不足で寝ていたセイバーが気づいて、凜に助けを求め、そして雁夜達に助けを求めたのだ。

イリヤとバーサーカーが出て行くは、すっかり見たが、先ほどから感じる視線を匂いとして感じている雁夜は、不安は拭えないものの、セイバーの言うとおりの懐に入らなければ士郎を救えないと思い、セイバーに同意することにした。

そして、イリヤ出入りした玄関に入り、セイバーが士郎の令呪を辿って廊下を走り、その後を雁夜達が追いかけた。

そして、とある一室を開けると、途端中から士郎が飛び出してきて、セイバーと接触しかけた。

「シロウ!」

「セイバー!」

「先輩。」

「間桐まで…。」

「とりあえず、無事なようね。」

「ああ…なんとかな。」

「シロウ…、気が乱れています。だいじょうぶですか?」

「イリヤの暗示を解くのに、ちよつとな…。」

「ほら、ふらついてるところ悪いけど、イリヤが帰ってくる前に、急いで逃げるわよ。」

「ああ。」

士郎を見つけたので、さっさとこの場から去るべく、全員で廊下を急いで走った。

「……いる!」

「雁夜さん?」

雁夜と平行して走っていた桜が、雁夜の眩きを訝しんだ。

そして、玄関のある広間に出たときだった。

「なーんだ、もう帰っちゃうの?」

「ああ、帰らせてくれるか?」

「雁夜さん!」

玄関に向けて移動していたとき聞こえた、イリヤの声に、ひとり冷静に雁夜は対応し、凜はハツとして振り返った。

イリヤは、玄関先の広間を見渡せる階段の上にバーサーカーと共に立っていた。

「あの、女といい、あなた達って、変。」

「君に言われたくないな。森に入った時点で、俺達の存在を見ていただろう?」

「そうね。あなただけでは気づいてたわね。そうよ。この森には、私の感覚が張り巡らされてる。だから、例えば、トオサカの才媛でもどうすることもできないわ。」

「初めから、私達を誘い込む気だったの?」

「違うわ。」

凜の問いに、イリヤは否定した。

「士郎を連れて来たのは、私の意思。それ以上でもそれ以下でもない。でも…士郎は、私の物になってくれなかったわ。あなた達をここへ入れたのは、この私を切嗣のように捨てる、士郎への見せしめにするためよ。」

「イリヤ！ 遠坂達は関係ないだろ！」

「いいえ。士郎。言ったでしょ。私を拒絶したことを後悔させるつて。それから、殺してあげるから。」

「くっ…。」

士郎の言葉に、イリヤの聞く耳を持たないようだ。

「そっちには、セイバーに、ライダー、アーチャーがいても無駄よ。私のバーサーカーは絶対に負けないもの！」

すると、イリヤの傍らに佇んでいたバーサーカーが跳び。広間の床に飛び降りてきた。

セイバー、ライダー、アーチャーが武器をそれぞれ構える。

「セイバー、あなたは下がりなさい！」

「しかし！」

「甲冑も身につけられない状態でよく言うわよ。」

「……っ。」

「セイバー…。」

「アーチャー。」

「分かっている。」

「遠坂？」

アーチャーに命じ、そして名を呼ばただけで察したアーチャーが前が出る。

「…ひとりで、アイツの足止めをして。」

「凜！ そんなっ…！」

「遠坂…おまえ…。」

その命令が、アーチャーに死ねと言っていることと同意義だということを、士郎もセイバーもすぐに察した。

「ならば、私も…。」

「ここは建物内よ。あなたの騎乗は使えないわ。」

ライダーも残ろうとすると、凜がそう言って止めた。

「それに、あなたの魔眼は、イリヤには通じない。」

「…っ。」

前にバーサーカーと戦った際に、バーサーカーは、おろか、イリヤにも魔眼が通じなかったことを思い出し、ライダーは俯いた。

「へえ？ リン、あなた、そんなどこの誰とも分からないサーヴァントで、私のヘラクレスを止める気なんだ？」

「アーチャー…、いいわね？」

「ところで、凜。」

「…なに？」

「時間を稼ぐのはいいが…。アレを倒してしまっても構わんだろうな？」

「！ ……ええ。もちろんよ。遠慮はいらないわ。ガツンと痛い目にあわせてやって、アーチャー！」

「そうか。ならば、期待に応えるところでしょう。」

「待て待て。俺を忘れてないか？」

髪の毛をザワリツと揺らした雁夜が話に割って入った。

「雁夜さん！」

「桜ちゃん、行け！ ライダー、頼むぞ。」

「ええ。」

「待って！ ライダー、離して！」

「シロウ！ 行きましょう！」

「アーチャー…、雁夜さん…、必ず戻ってきてください！」

「ああ。もちろんだ。」

そして、雁夜の体の変化を遂げ、バオー・武装現象を発動した。

「自分から死にに来るなんて、愚かね。バーサーカー！ 殺しちやえ！」

『アーチャー、聞こえるか？』

「っ！ ああ、聞こえる。なんだ？」

武装現象状態では、実は口がきけないため、念話に近い形でアーチャーに話しかける雁夜。

『あの時の、アレ…、使えよ。』

「言われるまでもない。」

そして、アーチャーが、双剣を構え、詠唱を始めた。

同時に、雁夜が前に飛び出し、バーサーカーの一撃と突進を止めた。

「I am the bone of my sword」

ギリギリとバーサーカーの斧剣を腕の刃で止め、つん張り合いになる。

「Steel is my body, and fire is my blood」

バーサーカーがうなり声をあげ、その巨体からは想像も出来ない速度で、斧剣を振り回す。そのたびに、ガン、ギンつと、雁夜が腕の刃でその攻撃を受け止め弾いた。

「I have created over a thousand blades」

バーサーカーの巨体が、徐々に後ろへ押されていった。

「Unknown to Death」

イリヤは、驚愕する。

雁夜は、身長はそこそこだが、体格に恵まれてはいない。

それが、300キロ超もあるような筋肉の塊のような大英霊ヘラクレスを圧倒しているのだ。

「Nor known to Life」

雁夜の腕の刃が、バーサーカーの首を狙う。

バーサーカーは、咄嗟に首をのけぞらせて、首の表面だけを切られただけですませる。

「Have withstood pain to create many weapons」

たちまち傷は癒えるが、素早く突き出された雁夜の掌を、バーサーカーは、その巨体からはあり得ないような速度で横にそれて避けた。

途端、バーサーカーが背にしていた階段の手すりに雁夜の掌が当

たり、手すりがドロドロに溶けた。

「Yet, those hands will never hold anything」

イリヤは、直感する。

あの溶解液に触れたら、例えサーヴァントといえど、無事では済まないし、自身のバーサーカーの秘密があれど、意味はないと。

そして……。

「So as I pray, unlimited blade works」

アーチャーの詠唱が完成し、途端、中世の城を思わせる玄関の広間にまったく異なる景色が広がった。

赤土色の空と、背景を彩るのは、巨大な歯車。そして、焼け野原にとてつもない数の剣や武器が突き刺さっている圧倒的かつ、異様な光景だった。

「これは！ 固有結界!? あなた…何者!?!」

「そんなことを言ってる場合か?」

「っ、バーサーカー!!」

アーチャーが剣を矢として弓を構える。

直後、放たれたのは、無数の剣。

雁夜が、後ろへしやがみながら跳び、直後、バーサーカーの巨体をアーチャーが放った矢に見立てた剣が貫いて抉った。

「無駄よ。その程度じゃ…。」

「ブロークン・ファンタズム!」

「っ、バーサーカー!!」

バーサーカーの周りに突き刺さった、無数の複製の武器が大爆発した。

バーサーカーが爆炎を越えて、全身のあちこちを大きく抉られた状態で飛び出した。

その瞬間、雁夜が横を通り過ぎる。

そして、バーサーカーの首がゆつくりと、切れて、落ちた。

「バーサーカー…!!」

『この程度じゃ死なないか!』

切り落とされた首を手で受け止め、元に位置に戻すバーサーカーを見て、雁夜がそう呟きつつ、方向転換する。

「ならば……。」

『ああ……。死ぬまで……。』

「殺し続けるまで!!」

前から、後ろから、アーチャーと、雁夜がバーサーカーに攻撃した。

森の中を走っていた士郎達だったが……。

セイバーが自身を保つ魔力の限界を迎え、消滅寸前になってしまった。

「セイバー……。」

「すみません……シロウ……。」

「謝るな。俺が未熟なせいだ……。」

「どうするのです、凜?」

ライダーが凜に聞いた。

今、士郎達は森の中で、事前に見つけておいた、廃墟の建物の中にいた。

そして、凜が意を決して語り出す。

今のセイバーは、魔力供給の不全で、消滅寸前であり、それをなんとかしなければ、いずれ追って来るであろうバーサーカーには勝てないと言った。

凜は、直感していた。アーチャーと雁夜では、あのバーサーカーには勝てないと。

それを察した桜が、ギュツとスカートを握りしめ俯いた。

「桜……。だいじょうぶです。彼は必ず……。」

「…雁夜さんに何かあったら…私…。」

ブルブルと震えている桜をなだめようとライダーが背中を摩擦した。

「で…、ここから大事な話よ。士郎。よく聞いて。」

「なんだ？」

「これから、あなたの魔術回路を、セイバーに移植するわ。」

「えっ？」

「な…!？」

ライダーが桜をなだめている間にも、話は進められており、凜が士郎にそう言い、士郎はキョトンとし、セイバーは驚いた。

凜の話を総合すると、今のセイバーは、体内になる魔術回路という小さな歯車が動いておらず、そのため自身を維持するための魔力が練れていないらしい。

「サーヴァントとマスターの契約は聖杯の力を借りて行われる強固なものよ。当然新しく繋ぐ経路（パス）にも、それに見合うだけの強さが求められる。だから、霊的に重要な機関である魔術回路を移植するくらいのことをしなければ、意味がないのよ。知っての通り、魔術回路をなくして、私達は魔力を錬成することができないわ。万が一移植によって全ての回路を失うことになれば、二度と魔術は使えない。つまり…、あなたは、もう魔術師ではいられなくなるかもしれないわ。」

「ま…待ってください。凜！ 魔術は、シロウの礎であり、シロウという存在の根幹を成すもの…。それを奪うなど、あまりにも酷い!!」

「…：…：…：だいじょうぶだ、セイバー。」

「例えば、魔術を失っても、すべてを失うわけじゃない。その経験が俺の中で生きるだろ？ この道が途切れたなら、また新たな道に行く。それだけだ。だけど、それは、命あつての話だ。…：…：遠坂。」

「…：覚悟はいいわね？」

「ああ。」

「シロウ…。」

「誤解しないでね。魔術回路の移植といつても、それが必ずすべての魔術回路を失うわけじゃないわ。残される回路の数が数が多いほど、そのリスクは狭まる。そのためには……。士郎。脱ぎなさい。」

「……………はっ?」

「セイバーも。」

「えっ?」

「ほら、さっさとする! 時間が無いのよ!」

そして、士郎とセイバーは、上半身を裸にされた。

凜曰く……。二人の精神の同調が高まるほど移植の成功率は上がるらしい…………。

「万が一って事もあるから、ライダーには、見張りと、バーサーカーの足止めを、お願いするわ。」

「分かりました。」

「分かったわ。」

ライダーと桜は、建物から出て、警戒に当たった。

「うまくいくといいな……。」

「桜……。」

「ライダー……。私……。怖い……。死ぬ以上に……。雁夜さんが、私のところに二度と帰ってこないかもしれないってことが……。」

「だいじょうぶ。だいじょうぶですよ。桜。」

震えながら、目に涙を溜める桜を、ライダーが優しく抱きしめた。

「ぐああああああ!!」

その時、建物の中から士郎の絶叫が聞こえた。

「っ、先輩!」

「行っってはいけません!」

「でも……。」

「今は大切な儀式の最中。それをジャマしては全て水の泡です。」

「……そんな!」

次から次に発生する問題に直面し、桜は愕然とする。

その時、遠くから……。いや、アインツベルンの城の方角から、凄

まじい破壊音が聞こえた。

ガラガラつと、アインツベルンの城の玄関が崩れる。

次の瞬間、ドカーンと瓦礫の一部が吹っ飛ばされ、中からイリヤを抱えた、ボロボロのバーサーカーが立ち上がった。

「……はあ…、まさかここまでやられるなんて思わなかったわ…でも…。」

イリヤは、大きな瓦礫に挟まって飛び出している、雁夜の右腕を見て呟く。

その雁夜の右手はピクリとも動いていない。

「いくら、どんなな化け物でも、ここまで殺されれば…、さすがに死ぬはず。あの分からないアーチャーも消えたことだし…。さあ、行くわよ、バーサーカー…。」

イリヤを降ろしたバーサーカーが、一瞬よろついた。

「ちよつと、まさか『この程度』で、へばる気？ まだ、二回は残ってるでしょ？ でもそうね…。少しだけ回復させといてもいいか…。」

そう言つてイリヤは、バーサーカーの大きな手を握り、集中した。

一瞬、イリヤの体が輝き、やがて治まる。

その頃には、バーサーカーの体の傷は癒えていた。

「とりあえず、これで残り六つよ。今は、逃げた残りを殺すことを優先するわ。文句はないでしょう？」

しかしバーサーカーは、答えない。

しかしイリヤは、それを肯定ととり、歩き出した。するとバーサーカーはイリヤの後ろについて行った。

二人が去った後の二分後…、瓦礫に挟まっている雁夜の手が、ピクツと動いた。

廃墟の建物の前で、桜はへたり込んでいた。

空は白み、朝日が上がる。

「雁夜さん…。雁夜さんが…！」

「落ち着いてください、桜！ まだ死んだとは決まっています！」

「でも…。でもお…。」

「桜。」

すると廃墟の戸が開いて、凜が出てきた。

「とりあえず…。成功したわ。」

「そうですね。」

「雁夜さん、雁夜…さん…。」

「桜…。気の毒だけど…。」

「！」

ハッと顔を上げる桜に、凜は、自分の右腕を見せた。そこには、令呪が無くなっていた。

桜の顔からますます血の気が引き…。ハクハクと口を開閉させ、涙をボロボロと流し出した。

「桜、気をしっかり！」

「あああ、ううう…！」

「…間桐！」

そこへ、意識を取り戻した士郎が駆けつけた。

桜は、錯乱していた。凜は、唇を噛み、桜の首に当て身をして、気絶させた。

「遠坂！」

「中に運んで。こんな状態じゃ、戦えないわ。」

「おまえ…！」

「いい？ 今は生き残ることを最優先にするのよ。」
「っ…。」

凜にそう言われ、士郎は黙らざる終えなかった。

ライダーは、気絶した桜を抱きかかえ、建物の中へ運んだ。

そして、セイバーと入れ替わりになり、セイバーの状態の確認と、どうやってバーサーカーに勝つかという作戦を練ることになった。まず、セイバーの魔力であるが、宝具を一度使う程度ならなんとかなっていること。

ただし、エクスカリバーのようなとんでもない必殺の一撃は、消滅を引き換えにしないと放てそうにないこと。

セイバーは、アーチャーを失った凜に対し、戦線を離脱すべきだと進言した。

「そうね。」

「遠坂!？」

「私も、そう思ってたところ。」

「遠坂!」

「いい? 聞いて。士郎。」

そして、凜は作戦を語り出す。

逃げるといっても…、あくまでもフリだと…。

そう言つて凜は、魔力をため込んだたくさんの宝石を見せた。

間桐邸で寝ていたツツジだったが、ふと目を覚ました。

「雁夜……。」

ツツジは、匂いで迎える。

そして、雁夜が、アインツベルンの森の中を、桜を探して、死にかけの体でさまよっている光景を匂いで感じた。

頭は無残にも半分潰れているが、完全ではない。おそらく雁夜の深層心理に辛うじて生き残っている脳内の血管の中に住むバオーが死にかけの体を動かしているのだろう。もはやその様は、ゾンビだ。

「……行かなきゃ……。」

ツツジは、まだ、大量の魔力摂取でグルグルしている頭を押さえ

ながら起き上がり、間桐邸から出発した。

セイバーは、甲冑を身につけ、士郎と共に森の中を歩いていた。

「緊張しているのですか？」

「ああ…。さすがにな。」

「シロウには、私の援護を頼むことになりましたが…。」

「分かっている。ここからは、自分達だけの力で切り抜けないといけない。しつかりしないと。」

「だいじょうぶ。」

セイバーが、士郎の手を握った。

「私達は…、きつと勝てます。」

「ああ…！」

力強く返事をする士郎。

その時だった。

「追いついたわよ。士郎。」

無理の木々の先から、イリヤとバーサーカーが歩いてきた。

「死ぬ準備はできた？ ふうん…、セイバーは治ったんだ？」

イリヤは、そう言った。

セイバーが前に出て剣を構える。

「リンの姿が無いわね？ もしかして逃げた？ そっかあ…、恐れをなして逃げたのね？ アハハハ！ それは、そうよね！ 頼みのアーチャーは、私のバーサーカーがズタボロにして殺してやったもの！ あと…、雁夜って男もね。」

「っ!!」

「たいしたものよ…。ほんとびっくりした。あの男…、頭を潰してやってやっつと死んだのよ？ まさか下半身を潰したぐらいじゃ死なないなんて。」

「イリヤ……!」

「それで? 勝ち目がないと分かってて、たった二人でやるつもりなの? 惨めに命乞いするなら命だけは助けてあげなくもないけど?」

「……俺は、俺達の答えは変わらない。お前が敵である限り! 俺はセイバーのマスターとして戦う!」

「……………そう。」

イリヤの顔が凍てついたように無表情になった。

「じゃあ…、本気で殺してあげる。」

次の瞬間、ブワツとイリヤの服の上からでも分かる、令呪の光がイリヤの全身から輝いた。

「なっ!」

「なんて大ききの、令呪!」

「さあ…。狂いなさい! バーサーカー!!」

イリヤの令呪による命を受け、バーサーカーが狂化された。

士郎とセイバーは驚愕する。

今の今まで、バーサーカーは、そのクラス特有の狂化をされずに戦っていたのだという事実には。

つまり、今、ステータスを大幅に強化する、狂化を使うということとは……。

「ふふ。何を驚いてるの?」

イリヤが笑う。

「今さら命乞いしても無駄よ? 聞かないからね。さあ! バーサーカー! みんな、殺しちゃえ!!」

狂化されたバーサーカーが咆吼をあげながら迫ってくる。

すると、上空から、凄まじいスピードでバーサーカーの背後に迫る、光の塊があった。

バーサーカーは、瞬時に反応し、武器を手にしていない片手でそれを掴んで止めた。

「くっ!!」

騎乗している天馬の首を掴まれ、ライダーは、手綱を握りしめ、天

馬を暴れさせた。

バーサーカーが、斧剣を振り、ライダーを天馬ごと切ろうとした時、セイバーがバーサーカーの背中を切った。

深く切られたが、傷は一瞬で閉じ、バーサーカーは、振り向きざまにライダーを天馬もろともセイバーに投げつけた。

セイバーは、咄嗟に横へ飛んで避けると、ライダーと天馬は、木々を倒しながら吹っ飛んでいった。

「これほどとは……。」

「対軍宝具程度じゃ、バーサーカーは傷つけられないわ。」

「く……！」

バーサーカーの一撃を剣で防ぐが、セイバーの小さな体が数メートル飛ばされた。

あまりにも大きく強い一撃。

そして、繰り広げられる攻防は、一撃一撃が、まさに人外の境地。まさに……神話の再現だった。

士郎は、即席の弓矢を手にし、イリヤを狙う。

しかし、放たれた矢は、瞬時に対応したバーサーカーによって防がれた。

その際に振られた武器の風圧で、士郎の体が吹っ飛び、背後の木に激突した。

「ダメだよ。士郎。私を狙うなんて、見え見え。ちよつと……お仕置が必要かしら？」

そう言つて笑つたイリヤ。その意思に反応したバーサーカーが、士郎に迫った。

しかし……、イリヤとバーサーカーの本当の狙いは違った。

士郎のピンチに冷静さを一瞬欠いたセイバーが背後に迫ると、すぐにバーサーカーが振り向き迎え撃つ。

大きく弾かれた剣と、それを握る手が上へ大きく上がり、セイバーの腹の部分が大きく開いた。

そこを狙つてバーサーカーが武器を振るおうとした。

「真つ二つになつて死んじやえ!!」

「いいえ。」

「えっ？」

イリヤが一瞬キョトンとする。

その直後、セイバーの胴体をバーサーカーの一撃が襲う。

「セイバー……！」

士郎が絶叫した。

しかしセイバーは倒れなかったし、胴体が二つになることもなかった。むしろ着地、構えて、大振りの攻撃をして隙が出来たバーサーカーの腕を狙った。

その攻撃をバーサーカーが斧剣で防ぐ。だがセイバーの渾身の一撃によって、バーサーカーの巨体が浮いて、吹っ飛んだ。

だがダメージとはならず、すぐに着地される。

その直後。

「引いて！ セイバー！」

木の上から、凜が飛び出し、無数の宝石を手にし、バーサーカーに向けて投げた。

そう、これは賭け。

バーサーカーを確実に倒せるかどうかは分からないが、油断を誘うための賭けだった。

凜は、遠坂家の本気をみせるのだと、あの時言ったのだ。

大量の魔力を含む無数の宝石の強大な一撃が、バーサーカーの頭に直撃する。

「バーサーカー！」

イリヤが悲鳴じみた声を上げる。

しかし、頭を攻撃されたバーサーカーは、降ってくる凜の腹を片手で掴み、ギリギリと握りつぶそうとする。

煙をまとった頭は、焼け、続いて凜は、凄まじい数の氷の攻撃を隙間無くというぐらいの数、撃ち込む。それによって、凍らせ、打ち砕くつもりだったが…。

「無駄よ。」

イリヤが言った瞬間、バーサーカーは、咆吼をあげ、氷をすべて

弾き飛ばした。

「そんな…、む、無傷！　ぐあ…！」

「アハハハハ！　そのまま握りつぶして内臓をぶちまけちゃえ！」

「ふふ…。」

「？　何がおかしいの？」

ギリギリと握りしめられながら、凜が笑ったのでイリヤが訝しむ。

その直後、凜は、もう片手に手にしていた無数の宝石を指で挟んでいた。

「こうなることは、分かってたわよ…。こっちが…本命よ!!」

「ば、バーサーカー!!」

至近距離から放たれた宝石による熱線が、バーサーカーの頭を焼き……抉り……、ついに消滅させた。

頭を失ったバーサーカー。イリヤはそれを見て愕然とした顔をする。

「や、やった！」

「やりましたね、凜！」

二人が喜び、立ったまま事切れているバーサーカーから、凜を救うべく駆け寄ろうとした。

その時だった…。

「…えっ？」

今度は、凜が、そしてセイバーと士郎が愕然とする番だった。

「うそ……。そんな…？」

肉が焼けるような音を立てて、バーサーカーの失われた頭部が再生していく。

途端、イリヤが大声を上げて笑い出した。

「見直したわ、リン！　まさか一回だけでも、バーサーカーを倒すなんて…。でも、残念。」

イリヤは、堪えきれない笑みを浮かべたまま衝撃の言葉を放つ。

「バーサーカーはね…。十二回殺さないで、死ねない身体なの。」
「!？」

「そ、そんな！」

「じゆう、にかい…!?!」

「そうよ。ギリシャの英雄ヘラクレス。十二もの試練を制し、その褒美に不死の権利を与えられた。つまり、バーサーカーは、かつて乗り越えた死の数だけの命を、ストックとして持つ。『十二の試練（ゴッドハンド）』。それが英霊の標（しるし）たる、バーサーカーの宝具よ！」

「そんな…、肉体そのものが宝具だなんて！」

「フッフ！ バーサーカーには、あと五つの命が残ってる。あなたのアーチャーと、雁夜って男が削ってくれたおかげで、あの時は残り二個しか無かったけど…、私が魔力を供給して六つまで回復させたの。あー、危なかった。惜しかったわね、リン。私が二個でも十分つて油断したり、さっきの宝石の五倍の量を使っていれば、バーサーカーを倒せたのに。」

「が、は…!?!」

完全復活したバーサーカーに腹を握りしめられ、凜が息を詰まらせた。

「遠坂!! 離しやがれええ!!」

「シロウ！」

士郎が、駆け寄ろうとすると、バーサーカーが斧剣を振るい、士郎を吹っ飛ばし、その際に士郎の腹を傷つけた。

セイバーがその体を受け止めたが、士郎は、露出した肉も気にせず、痛みを忘れたように立ち上がる。

「ダメです！ シロウ!!」

その時、倒れている木々を吹っ飛ばしながら、天馬と共に光の塊となったライダーが最高時速でバーサーカーに突撃した。

バーサーカーが、斧剣で防ごうと斧剣を振るうと、凄まじい分厚さを誇る魔力の壁が武器の刃を阻み、上へと弾かれ、バーサーカーの胴体にライダーがぶつかった。

それでもバーサーカーは、踏ん張り、ズルズルつと後方へとどんどん押されるが、凜を離さない。

「ライダー程度じゃ、殺せないわ。」

バーサーカーは、押されながら、何度も何度もライダーの上から斧剣を振り下ろした。その都度、ガンガンっと大きな音を立てて、紫電が舞う。

「チツ…、魔力の障壁が無駄に厄介ね。片手じゃ壊せそうにない。なら…。」

「…う、あ…。」

バーサーカーが、凜を離れた。凜は、地面に落とされた。

そして両手が自由になったバーサーカーは、両手で斧剣を握り、凄まじい力と振りのスピードでライダーをたたき続けた。

先ほどより舞い散る紫電の量が増し、あちこちを破壊する。

それでも、ライダーは、歯を食いしばり、耐えながら突撃を続ける。

限界が近かった。桜からの魔力供給も限界だった。

バシンツと音を当てて、ライダーと天馬を覆っていた魔力の障壁が消える。そこにバーサーカーが斧剣を振り下ろそうとした。

「ライダー…!!」

セイバーと士郎が叫ぶ。

ライダーは振り下ろされる斧剣を見つめ、覚悟を決めた。

その時だった。

「捕まえた。」

少年のような少女の声と共に、バーサーカーの太い胴体に、後ろから血まみれの青白い両腕が回された。

「!?!」

バーサーカーが、途端に止まる。

「バーサーカー?」

イリヤが訝しんだ。そして、バーサーカーの後ろにいる存在を確認しようとして、見る。

血まみれではあるし、腕から生えた、折れた刃の痕跡がある。その腕には見覚えがあった。

「……………うそ。」

「…か…、雁夜さん？」

バーサーカーの胴体を掴んでいるのは、バーサーカーに殺されたはずの、雁夜だった。

SS19 進化

「何をしてるの、バーサーカー！ そんな死にかけの奴さっさと、振り払いなさい！」

イリヤの言葉でハッと我に返ったのか、バーサーカーが胴体を振った。

「うっ！」

「か、雁夜殿…。」

すると士郎達の方に雁夜の体の状態が見え、その有様に二人とも絶句した。

雁夜の頭は、無残にも半分近く潰れており、血と、青白い髪の毛で隠れているが、おそらく脳が露出しているだろう…。

目に光は無く、バーサーカーに振られてもその腕を放さない様は、まるでゾンビを思わせる。

「…思い出しなさい。間桐。」

その時、再び声が聞こえた。

そちらを見ると、木の陰から、ツツジが現れた。

ツツジは、雁夜を睨むように見ていた。

ツツジは、雁夜を、雁夜ではなく、間桐と呼んでいた。

「思い出しなさい。間桐。あなたの、力を。否…、歴史を。」

「あなたが、操ってるの？ ハハ…、死体も同然のくせに…！」

「まさか、ツツジ殿?!」

イリヤの言葉にセイバーが声を上げた。

今の雁夜を動かしているのがツツジだと理解したからだ。

「聞きなさい。間桐。あなたの細胞に、血に問いかけているの。マキリというかつての名を間桐という名に変え、歴史の潰えた今となっても、その細胞が、血が覚えている。否、それはあなたの、本能そのモノであるはず。」

「バーサーカーは、何をしてるの？ さっさと…。っ…、な、なに？」

イリヤは、令呪を通じて異変に気づいた。

やがて、バーサーカーに触れている雁夜の腕の部位から、電気的

ような光がバチバチと鳴りだした。

「これは…、まさか…!」

「間桐。思い出した? その調子だよ。」

「な…あ…、そんな…。」

イリヤの体の令呪が浮かび上がり、バチバチと電気のようなモノが弾け始めた。

バーサーカーは、体を振るのを止め、斧剣を杖のように突いて、膝を折りかけた。

「バーサーカーを…、食らってる…!? 私の魔力ごと…。そんなこと…できるはずが…!」

「我が子(バオー)よ。ソレは、お前が手に入れた特権だ。進化するための布石だ。死にたくなければ、使え! 喰らえ!! お前の魔術(吸収)で、喰らいつくし、命としろ!!」

ツツジがそう叫ぶと同時に、雁夜が咆吼した。

バーサーカーが、苦悶の絶叫をあげ、全身から放電のような魔力をほとばしらせてのけぞった。

あまりの魔力のほとばしり、士郎もセイバーも腕で光を防ぐ。ライダーも吹っ飛ばされ、地面を転がった。

「いやああああ!! ばあさあああかああ…!!」

イリヤが膝をつき、うつ伏せで倒れ込みながら、バーサーカーに手を伸ばそうとする。

「…、これは…?」

目を覚ました凜が、この異変を見て目を丸くする。

「…:…:食べてるの。」

「えっ?」

ツツジの言葉に凜がキョトンとした。

「魔術書を解読して知ったんだけど…、間桐の魔術は、吸収。つまり、喰らうこと…、それをして己の力や命に代えることにかけては、他を圧倒する。」

「まさか…。」

「ヒントは…、凜ちゃんが衛宮くんを生き返らせた時の魔術を見て

思い付いたの。雁夜は、すでに死んでも同然に近かったけど、死の淵から蘇るには、相応の膨大な魔力さえあれば……、ましてや命をいくつも持つ相手から直接命を食べちゃえば……。生死の摂理ぐらい、変えるぐらい、わけもないじゃない？」

そうこうしているうちに、雁夜潰れていた半分の頭が元の形を取り戻していった。

やがて、完全に治った時、バーサーカーから手を離す。するとバーサーカーが、両膝をつけて手を地面に突いた。

「うう……、……そんな三つ以上も……吸うなんて……。」
『……………つ、ツジ？』

「生き返った気分はどう？」

「つつ……、ば、……バーサーカー!!」

「危ない!!」

ツツジの方に振り向いた雁夜に、起き上がったバーサーカーが斧剣を振るった。

イリヤは、鼻血を垂らしながら、無理矢理に体に残っている残りの魔力を絞り出し、バーサーカーに命じた。

「こ、殺しなさい……! グチャグチャの、ズタズタに……!!」

「待って! それ以上したら、あんたの体が!!」

「う……うるさい!!」

凜が止めるよう言ったが、イリヤは聞かなかった。

「イリヤ、やめろ!」

「死ね……死ね、死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね!!」

イリヤが叫び続ける。

もはや近場にいるモノだけを破壊する権化となったバーサーカーが咆吼をあげ、近場にいた凜を狙った。

「遠坂……!!」

次の瞬間、士郎の手に、一振りの剣が握られた。

そして、凜に振り下ろされる斧剣を、防いだ。

「その剣は!」

「士郎…、あんた…。」

「くっ、ダメだ。こんな模造品じゃ…。」

フーツと士郎は息を吸って吐いた。

そして再び魔術を行使する。

それは、ただ…そのためだけに特化した、彼の…魔術。

投影魔術

それは、本来なら非効率的すぎて、誰も手を出そうとはしない分野。

魔力を使い、無から有を創り出すこと。

それは、彼が生まれ持った、一点特化型の魔術回路。

「シロー…ウ!!」

セイバーが駆け出す。

そして、限界を超えた投影魔術により、崩れ落ちそうになる士郎を支え、その手にする剣を握り、セイバーが、その一撃を放った。

勝利すべき黄金の剣（カリバーン）

それは、アーサー王たるアルトリア・ペンドラゴンが、一度は失った剣であった。

模造品とはいえ、本来の使い手を得た剣が、光り輝き、その力を放った。

それは、バーサーカーの巨体を切り裂き、森全体を揺るがすほどの強大な一撃となった。

やがて、光が治まり、消えていく。そして静寂がおとずれた。

「…それが、貴様の剣か、セイバー…。」

狂化により言語を失っていたバーサーカーが喋った。

「これは、カリバーン（勝利すべき黄金の剣）。私が、王となったときに鉄床（かなどこ）より抜き放った、選定の剣。………しかし…。」

「それは、現実ではない。その男が作り出した幻想に過ぎん。」

やがて、士郎が創り出したその剣は粉々に砕け散った。

「所詮はまがい物。二度と存在せぬ剣だ。だが…。」

バーサーカーの姿が薄らぎ始めた。

「その幻想も侮れぬ。よもや…、ただの一撃で、七度滅ぼすとは。」

模造品とはいえ、その力は絶大であり。バーサーカーの命を七回も奪うほどのモノだったようだ。

「バーサーカー……。」

イリヤが、フラリツと立ち上がり、今にも倒れそうな足取りで、バーサーカーに近寄った。

「やられ……ちやつたの？」

震える手を、バーサーカーに伸ばす。しかしバーサーカーに触れることは出来なかった。もはやバーサーカーは、実体を保てなくなっていたのだ。それは、すなわち、サーヴァントとしての死だ。

「イヤだよ……。私、また一人になっちゃうよ……。」

「……………少年よ。」

バーサーカーが、士郎を見た。

「この子を……………、頼む……。」

そして、バーサーカーは、光の粒となって消えた。

「バーサーカー……。」

バーサーカーが消えると同時に、イリヤの体から力が抜け、倒れた。

「いやだよお……。一人にしない、で……。」

「イリヤ……。」

そんなイリヤに、士郎が駆け寄り抱き起こした。

「分かったよ。バーサーカー……。イリヤは必ず俺が……。」

「うううう……。シロウ……。」

「だいじょうぶだ。俺がいるよ。イリヤ。」

涙を零すイリヤを、士郎がギュツと抱きしめた。

「……そういえば、桜ちゃんは？」

元の姿に戻った雁夜が聞いた。

「桜は……。」

ヨロリツと立ち上がったライダーが言った。

そして、一行は、廃墟の建物に戻り、ベツトの上でぼう然と宙を見上げていた桜を迎えに行った。

「桜ちゃん！」

「か、り、や…さん…?」

「桜ちゃん、だいじょうぶか?」

雁夜が駆け寄り、桜を抱きしめた。

泣きはらした桜は、雁夜の存在をしつかりと認識すると、その体に抱きつき、声を上げて泣き出した。

バーサーカーとの戦いは、こうして終わったのだった。

SS20 恋路

バーサーカーとの激しい戦いが終わった。
聖杯戦争に敗北したイリヤは、士郎の家にやつかいになることになった。

その件から以降、セイバーの様子がおかしいと、士郎がなぜか雁夜に相談しに来たのだった。

「なんで、俺？」

「すみません…。」

「まあ、いいけど…。」

「どどのつまり、嫉妬じゃない？」

お茶をお盆で運んできたツツジがそう言った。

「しつと？ セイバーが？ 誰に？」

「衛宮くんって意外と鈍いね。」

「俺、鈍いですか？」

「セイバーから幸せにするって言われてるんでしよう？ ……意味分かる？」

「えっ？」

「気にするな。こいつの地獄耳は今に始まったことじゃない。」

「い、いいえ、そうじゃなくて…、俺、確かにセイバーにそう言われましたけど…。それって…、えつと…。」

「仮にもアーサー王なんだよ？ 性別偽ってたとはいえ。ようするに、伴侶として幸せにしますって言ったようなものなんじゃない？」

「!？」

その瞬間、士郎の顔がボンツと赤くなった。

「セイバーって、可愛いかつ綺麗だもんね。大事にしないとイケないよ？」

「なななな…そ、そそそそそんな！ 俺みたいなチンチクリンなんて、セイバーにふさわしくなんて…。」

「ふさわしいとかふさわしくないとかっていうのは、別に関係ない

と思うよ。」

「でも、でも、でもおお!!」

「あ、でも待てよ……。」

「はっ?」

「セイバー的には、衛宮くんをお嫁にとって感じじゃないかな?」

「俺が嫁!」

「セイバーの男女感覚が、女性よりなのか男性よりなのか…、まあそれは別に問題はないとして、衛宮くんってずいぶんと家庭的だから、お嫁さんにしたいって思ってたりにして。」

「なんか、あり得そうだな…。あつ。」

ツツジの言葉が妙に真実味をおびているように感じて、雁夜がそう納得していると、ハツとして雁夜が士郎の方を見た。すると士郎は、混乱しているのか、俯き耳まで真っ赤にしていた。

雁夜とツツジは、顔を見合わせた。

これ…、満更でもないのではないかと。

「でも…、俺男だし…。セイバーは、女の子だし…。」

「今は、主夫って言葉があるように、昔の男尊女卑が当てはまらないよ。堅く考えないで、焦らず、じっくり考えてみたら?」

「……はい。」

「あれ? 俺が相談に乗られたんじゃないっけ?」

「どうせロクに答えられないでしょ?」

「うぐっ!」

ズバリ言われ、雁夜は呻いた。

恋患い歴、約11年の男……。間桐雁夜。他人の恋路の相談なんて助言できるわけがない。

それからというもの、士郎は、ツツジにセイバーとの関係について

の相談をするようになった。

そういう類いの経験の無いはずのツツジは、相談に乗り、士郎を導いた。

「おまえ…、どうしたよ?」

「なにが?」

「色恋沙汰なんて越えて、子供が欲しいって言ってただけのお前が…、どういう風の吹き回しだっと思ってな。」

「別に。なんて言うか…、子供の相談に乗る母親の気分ってやつ?」

「おまえが? ハハ…想像出来ねえ。」

「それって、私が母親になれないってこと?」

「そうじゃないって。ただ、俺もだけど…、お前も見た目が変わってないじゃないか。もっと大人になった淑女になったお前だったら、また話は別だっただろうなって。」

「…そうだね。」

「これも…バオーの影響か?」

「分からない。でも、ただ老いたら、子孫を次には残せないもの。だから時間を遅らせていても不思議じゃない。」

「かりに…、俺に子供が出来たらどうなる?」

「あ、ついに大決断…。」

「そうじゃなくて! もしもの話だ! そうなったら、俺の中のバオーはどうなる?」

「……雁夜は、男だから子供に移行はしないとと思うよ。」

「……お前は?」

「……たぶん、死ぬ。」

意外にもあつさりとツツジは言った。

「蟻にしても、蜂にしても、女王は次世代を産んだら、死ぬんだよ。」

「それだと、生まれた子供はどうすんだよ?」

「さあね…。誰かが育ててくれるよう、私のように孤児院に連れて行くしかないね。もしくは、生まれた時点で一人で生きられるほど強いかもしれないし。分からないや。」

「生まれる子供の能力が未知数か…。」

「私のマザー・バオーだって、マザーだなんて言われたけど、実際のところ進化の途中過程だし…ね。」

「そうなのか?」

「うん。」

「もしも…、お前の子が産まれて、その子にマザー・バオーが、次の世代の卵を植え付けたら…。」

「…その子が望めば世界は変わるだろうね。」

ツツジがそう言うと、場がシントツとなった。

「だいじょうぶ。まだ、そこまで切羽詰まってないから…。」

「じゃあ、切羽詰まったら、ヤバいって事だろ?」

「私の中のコレ（マザー・バオー）がそこまで望んでないのが幸いだった。」

「じゃあ、こないだのアレなんだよ?」

「うーん…、生理でホルモンバランスが崩れて、影響されたのかなあ?」

「ツツジさん、雁夜さーん!」

そこへ、桜が駆け込んできた。

「どうした、桜ちゃん?」

「先輩が…。」

「衛宮くんが?」

「セイバーさんとデートするらしいんですよ!」

「わああ。思い切ったね。衛宮くん。」

「はー…。若いなあ。」

「あの、雁夜さん…。」

「えっ?」

「ほら、雁夜。良い機会だから、行けば?」

ツツジを見ると、ツツジは、ニヤニヤと笑っていた。

「デート…:してください!」

「えー!?!」

こうして、桜と雁夜によるデートが決まった（強制）。

SS21 旧敵

桜と雁夜のデートの日は、奇しくも、士郎とセイバーのデートの日と重なった。

別に狙ったわけじゃない。完全なる偶然だ。

しかし、場所は、同じ冬木市市内。

「美味しいー。」

「美味しいですね。シロウも一口どうぞ。」

「せ、セイバー、自分で食べれるって。」

「さすが、雑誌に載ってただけあるね。ラテも美味しい。ね、雁夜さん。」

「あ、ああ…。」

押せ押せな女子達に、タジタジの男達だった…。

「…こんなはずじゃ…。」

「気持ちは分かる…。」

「雁夜さん、はい、あーん。」

「さ、桜ちゃん…。」

「あーん。」

「…あーん。」

桜の笑顔に根負けして口を開けた雁夜。口の中一口大サイズに切り分けられて、ホイップクリームを付けたシフォンケーキが入られる。

「美味しい?」

「う、うん…。」

「あ、口の端ついてる。」

「えっ? どっち?」

「取ってあげる。えい。」

「!？」

桜が身を乗り出して、雁夜のホホのクリームを舐め取った。

「さ、さささささささささささ桜ちゃんん!? 今のはあかんって!!」

「えー？」

「雁夜殿、静かに。」

セイバーに制止され、雁夜は周りからの視線に気づいて、慌てて大人しくした。

「み、店…出ます？」

「そうだな…。」

視線が集まりすぎてるので居づらいので、喫茶店を後にした。

その後、服を見たり、ぬいぐるみなどの可愛い雑貨屋さんに行ったり、なんだかんだで楽しい時間を過ごした。

ブラブラと歩いていて、やがて冬木の河川の橋で、夕日を眺めた。

「あの沈没船って、まだそのままなのね。」

「ああ。冬木市が費用が出せないって話だな。」

「あれって…、俺が昔、聖杯戦争でサーヴァントにやらせた攻撃のせいなんだよな…。」

「ええっ!?! そんなんですか？」

「ええ。雁夜殿は、かつてバーサーカークラスのサーヴァントのマスターでした、あの時は巨大な海魔を召喚したキャスターを討伐するために…。」

当事者であるセイバーを交えて、その時の話をする。

「へ〜。まるで、特撮映画みたいだ…。」

「ああ、今思い出しても、現実味がなくなっただけ。よく勝てたと思う。」

「雁夜さん、強かったんですよ。」

桜は、雁夜の腕にしなだれかかりながら、嬉しそうに言う。

「俺も、もっと精進しないと…。」

「シロウ…。」

「セイバー…、俺…。」

士郎とセイバーが見つめ合った。

しかし、ふと士郎が我に返り、バツと桜と雁夜の方を見てしまった。

「あ…、ごめん。そんなつもりは…。」

「お二人とも、私達のことには気にせず、そのままでもいいですよ？」

ダブルデートでなければ、恐らくこのままキスぐらいはいつていただろう。それぐらいには熱い視線であった。

その時、セイバーがハツとした。

「シロウ！」

「うわっ!？」

士郎の後ろからセイバーが飛びつき、うつ伏せに二人が倒れた。

その瞬間、士郎がさつきまで立っていた場所の、ちょうど胸辺りの場所を一本の剣が通り過ぎた。

「なっ!？」

「あれは…。」

剣はすぐに消えた。

雁夜と桜は、剣を飛ばしてきた犯人をすぐに見つけた。

そこにいたのは、黒いライダースーツまとったギルガメツシユだった。

「我のモノに、なにをしようとした？ 雑種が。」

「貴様は!？ なぜ、おまえが…。」

セイバーが起き上がり、ギルガメツシユの姿を見て驚愕した。

「久しいなセイバー。」

「金ぴか成金サーヴァント!」

「まったく…、不愉快な呼び名で呼んでくれるな、小娘が!」

「ツツジさん、呼びますよ?」

「っ…。」

「?」

ツツジの名を出されると、途端に顔を嫌そうに歪めるギルガメツシユに、セイバーが怪訝な顔をした。

「アイツ…、ツツジが天敵なんだよな…。」

「そうなんですか？」

「ええい！ 我の前でその名を口に出すな!!」

「なに焦ってるんだよ？ 英雄王さん。いつもの余裕はどうした？」

「ゲテモノ風情が…。」

雁夜の挑発に、ギルガメツシュが不愉快さを隠さず美しい顔を歪める。

「今…ライダーに、ツツジさんを連れてきてもらってます。」

「ほう？ その前に、貴様らを引き裂き、この橋に飾ることなど造作でも無いぞ?。」

「お持たせー。」

「早っ!？」

ライダーの天馬に乗せてもらって来たツツジが桜たちの傍に降り立った。

「ライダーたる私の機動性を嘗めないことですね。」

「真に…忌々しいわ!」

「ヤッホー。金ぴか成金サーヴァント。遊ぶ?。」

「興が冷めたわ!」

「あ…。」

そう言い残し、ギルガメツシュが消えた。

「ところで、なんでダブルデート？ 金ぴか成金サーヴァントがなんでこんなところに?。」

「さあ…?。」

ギルガメツシュの登場でデートはぶち壊しになったのだった。

SS22 愛

ギルガメツシユの生存。

それは、セイバーにとっては、衝撃的な事実だった。

「あなた方は、知っていたのですね？」

「ああ…。」

「なぜ黙っていたのです？」

場所は、間桐邸。

そこで、セイバーと士郎は、雁夜達がギルガメツシユのことを知っていて黙っていたことを問い詰めていた。

「別に悪さはしないって思ってたからだよ。」

ツツジが言った。

「雁夜殿、あなたは前の聖杯戦争の生き残りです。ならば、前の聖杯戦争のサーヴァントがいまだに残っているのは問題だと…。」

「俺も、ツツジと同じで別に問題だとは思ってなかったんだ。」

雁夜は、ばつが悪そうにそう言った。

「ギルガメツシユはね…。確かにあの時死んだんだよ。でも生き返った。」

「なぜ？」

「それは…、あの冬木の大災害を起こしたあの黒い泥のせいだと思う。あの中から飛び出してきたんだよ。」

「なっ…。」

「今まで何回かギルガメツシユとは会ってたけど、こっちに喧嘩売ったり買ったたりして、喧嘩はしてたけど、悪さはしてなかったんだよ?。」

「そんな頻繁に?。」

「なんでか買物物の時によく会って…。向こうは、待ち伏せしてたのか!?って怒ってたけど、そんなつもり、ひとかけらだってないのに…。」

はあ…っと、ツツジがため息を吐いた。

「ギルガメツシュを報っておいたことは、私達の責任。そして、彼のマスターである言峰綺礼もね。」

「言峰って…、あの神父のことか!？」

「そう。彼が、前の聖杯戦争での、ギルガメツシュの新しいマスターだった。遠坂時臣さんを裏切って、二人で手を組んだんだよ。」

「そんなことが…。」

「待ってくれ…。遠坂時臣って…まさか…。」

「そう、凜ちゃんのお父さんだよ。あの人は、かつてギルガメツシュのマスターだった。」

「なのに、裏切った…?？」

「ギルガメツシュにとつて、時臣さんは、つまらないだけの人だったらしいよ。だから、弟子だった言峰綺礼を誘った。そして裏切った。」

「それなのに…、放って置いたっていうのかよ!？」

「シロウ。落ち着いてください!？」

「これが落ち着いてなんて…。」

「放っておいてなんかない。雁夜さんは、セイバーと、バーサーカー、そして切嗣さんと一緒に、あの二人を倒しに行った。そして、ギルガメツシュを倒して、言峰綺礼も倒した。でも…。」

「…そう…、私は、切嗣と共に聖杯を破壊してしまい…。」

「お前だけの責任じゃねえよ。俺だってあの時、あの場にいたのに、令呪の強制力に操られたお前を止められなかったんだ。」

「雁夜殿…。」

「じゃあ、どうして言峰綺礼がまだ聖杯戦争の監督をやってたんだ？

あいつ…、爺さんが倒したんだろ?？」

「それなんだけど…、ギルガメツシュと繋がってたせいかな、あの時死んでた言峰綺礼も泥から復活しちゃったんだよ。」

「そんな!？」

「確かに死んだ命を生き返らせることが可能な願望器…。聖杯の力は、本物だ。だが…、あの冬木を襲ったあの災害を考えれば、正しいモノじゃないってことは火を見るより明らかだ。どうする、セイバー? このまま聖杯戦争を続けて、聖杯を手に入れるのか? 士郎

くんもだ。あの冬木の大災害を起こした元凶を何の願いに使う？」

「それは……。」

「そんなもの……いらぬ!!」

「シロウ……。」

「そんな歪んだモノは、破壊すべきだ!」

「なら……、あの子、死ぬしかないかもね。」

「なっ……?」

「イリヤって子……、あの子が、この聖杯戦争の今回の聖杯だよ。」

「ツツジ、おまえ……。」

「匂いで分かる……。あの子の中に、あの時の泥と同じ匂いが満ち始めている。あのアイリスフィールって人と同じ匂いがする。」

「あ……。」

セイバーは、第四次聖杯戦争のことを思い出した。

切嗣の妻であったアイリスフィールは、同時に聖杯戦争におけるアイントゥベルンが寄越した人型の聖杯だったことを。

「ああ……、あああ……!」

「セイバー? どうした?」

「私は……アイリスフィールまでもを……!」

「セイバー? セイバー!」

あの時破壊した黄金の杯が、アイリスフィールのなれの果てだったのだという事実を知ってしまったセイバーは、頭を抱えた。

「それは……、切嗣も覚悟の上だったはずだよ。」

「爺さんが?」

「そうなることは……分かってたはずだよ。二人は……。それでも聖杯を欲して……、結局こんなことになってしまった。過去を悔いても何も変えられないよ?」

「ですが!」

「今気にすることは……、ギルガメッシュのことを私達が放っておいていたこと。そして、言峰綺礼の目的……。それを知ること。……っ。」

「どうした?」

「衛宮くん……、家に帰った方が良い。」

「どうして?」

「イリヤちゃんが…危ない。」

「えっ?」

「先輩! ツツジさんがこう言うときはいつも悪いことが起こる前触れなんです! 急いで!」

「あ、ああ! セイバー、立てるか!」

「…はい。」

「俺達も行った方がいいか?」

「そうだね。」

そして、一行は急いで衛宮宅へ急いだ。

衛宮宅に入ると、まず血の匂いがした。

「遠坂!」

「………士郎?」

目を覚まさないでいたイリヤの看病をしていた凜が、部屋の壁に血を流して座り込んでいた。

「遠坂? 遠坂!」

「うるさいわね…。失血はしたわよ…。」

「血…。飲むか?」

「それは、願い下げ…。」

雁夜からの申し出を凜は断った。

「ごめんね…。イリヤ…さらわれちゃった…。」

「言峰か?」

「ええ…。」

「なんで、イリヤを…、まさかアイツは、聖杯を?」

「…知ってるの? イリヤが聖杯の器だったこと…。」

「前の聖杯戦争での器だった人と同じ匂いがしたから。」

ツツジが答えた。

「そうね…。この地で何度も行われてきた聖杯戦争のための聖杯の器を提供してきたアインツベルンから来たんだもの…。イリヤが聖杯で間違いないわ。正確には、あの子の心臓がよ。でも…。まだ時は満ちてない…。」

「それは…。まだサーヴァントが残ってるからだよね？」

「そう…。セイバー、ランサー、ライダー…。聖杯が降臨するには、少なくとも六つの英霊の魂を捧げる必要があるわ。聖杯を満たしているのは、まだ四人。あと二人分捧げられてないの。だから、今すぐイリヤをどうにかするってことはないはずよ…。」

「そうか…。」

「けど、言峰教会にはいないはずよ。いるとしたら…。あの寺…かもね。」

「寺って…。」

「柳洞寺よ。あそこは、霊脈が通ってて、冬木市中の魔力があそこにとどまるの。たぶん、あそこのはず。」

「分かった。遠坂、必ずイリヤを…。遠坂？ 遠坂？ 遠坂！」

「だいじょうぶ。寝てるだけだよ。」

ツツジがそう言った。

ツツジの言うとおり、凜は眠っていた。

とりあえず傷の手当てをして、布団に寝かせた。

「あ…。」

「敵の先兵ですね。」

「私が行く。みんなは、ここにいていいよ。」

「おい、どういうことだ？」

「向こうの狙いは、私だよ。」

「それって…。」

「私のせいで酷い目に遭ったんだもの…。」

ツツジは、そう言って微笑み、玄関から外へ出た。

玄関から出ると、十数メートル離れた位置に、ランサーが立っていた。

「よお。」

「そんなに殺気を出さなくても、匂いで貴方が来ることは分かった。」

「そうかよ。なら、言うまでもないな。」

「うん。分かってる。」

「こないだは、酷い目によくも遭わせてくれたな。痛かったぜ？」

「ごめん。それは、素直に謝る。」

「そうかそうか。でもな、口先だけの謝罪じゃ腸が落ち着かないのよ。」

ランサーが槍を構えた。

「おまえの中の俺の魔力はまだ満ちてるだろ？」

「…そうだね。あれだけ貰ったから、まだたつぷりあるよ。おかげで……。貴方と、十分すぎるほど戦える。」

「本気で来いよ。」

「それは、ダメ。」

「それじゃあ、俺の気が治まらねえ。俺のことを本当に思うのなら、本気をだしな。」

「…正直ね。貴方が、サーヴァントじゃなかったら、よかったのについて、思ってる。そしたら、強い子が授かれたのについて。」

「……はは。お前との子か…。想像できねえ。けど…、悪かないな。」

「…ありがとう。」

次の瞬間、ツツジの髪の毛が黒から薄い紅色へと変わった。
そして……。

「っ！」

「雁夜さん！」

「ツツジの奴……。」

雁夜が立ち上がり、玄関から飛び出した。

そこで見たのは……。

地面に刺さった赤い槍。それを握りしめている手は、途中から無くなっており、鮮血を流して地面を染め上げていた。

そして、その槍から少し離れた位置に、仰向けに倒れているランサーがいて、その上にツツジが馬乗りに乗っていた。

「ゴホ……。は、ハハハ……。こういうのも……。悪かねえな……。」

ランサーは、吐血しながら笑った。

「ほんとう?。」

「ああ……。そろそろ……トドメ……たのむは……。」

ランサーの腹も胸も切り裂かれ、内臓がぶちまけられていた。それでも生きているのは、英霊であるがゆえだろう。

「……さよなら。」

ツツジは、ランサーの血で真つ赤に染まったランサーの口に口づけをしてから、首を掴み、そのままランサーの首をねじ切った。

鮮血が吹き上がり、やがてランサーの体が光となって消え、そして離れた位置に刺さっていた槍も消えた。

「……………あれ、いたんだ?。」

ツツジは、今気づいたという風に雁夜達を見た。

「ツツジ……。おまえ……。」

「ん……。勝ったよ。これで、残るは、二人。ううん、ギルガメツシユを含めて三人か……。」

柳洞寺。

そこは、かつて、キャスターと共にあつた葛木が居候していた場所でもあつた。

行き場のない流れ者である葛木を受け入れ、葛木は、その居場所
で教員という資格を使い、つかの間の平穏を生きていたのだ。

しかし、今や、その柳洞寺も見る影も無く、無残な境内と、人つ子一人いない不気味な山の形だけを残していた。

「桜…。貴女は、無理にこの戦いに参加しなくてもよいのですよ。」「ううん。私も見届けたい。この戦いを…。それに、貴女のマスターなんだからね、ライダー。」「…はい。」

桜の言葉に、ライダーは、微笑んだ。

「うわ…。この匂いは…。」

雁夜が顔を歪めた。

まるで、山全体が生き物のように感じれた。

おそらく、五つの英霊の魂を受け止めた聖杯が胎動しているのだろう。

「セイバー。もう一度確認しておきます。」

「分かっています。」

「念のためです。…もしギルガメッシュと言峰綺礼を討つたならば、私が自害しましょう。そして、降臨した聖杯を、貴女が…。」

それは、事前の打ち合わせ。

ギルガメッシュと綺礼。二人を倒し終えたら、聖杯を破壊するために、ライダーが自分で死ぬのだ。

「貴女の宝具ならば、確実です。そのことをお忘れなく。」

「分かっています。…すみません。ライダー。あなたにそのような酷なことをさせてしまうなんて…。」

「いいのですよ。私はもとより、英霊に倒されるべき魂なのです。」

英霊として喚ばれたのが不思議なくらいですから。」

謝るセイバーに、ライダーはそう言つて手を振つた。

「でも、そうですね…。心残りがあるとしたら……、ツツジと一晚熱い夜を…。」

「ぶれないわね、ライダー。」

「ツツジ殿は、そのことを？」

「ええ。知つてますよ。ですが、断られてしまつて…。」

「それは、残念ですね…。」

「ところで、そちらは、士郎とは？」

「それは…。」

聞かれてセイバーは、ポツと頬を染めた。

士郎はそつぷを向いて、ゲホンゴホンつと咳払いしていた。その耳は真つ赤だった。

「おーい。そろそろ、空気がマジでヤバいから、早く行こう。」

こんな状況だというのに暢気なメンツに若干呆れながらも、雁夜はそう言つた。

そして一行は、長い石階段を登つていった。

境内の敷地の真ん中に、ギルガメツシュが立っていた。

境内の空間が、奇妙に歪んで見える。

「見ろ。セイバー。」

ギルガメツシュが空を見上げた。

「聖杯も重い腰を上げ、孔を開いたところだ。分かるか？ 孔からあふれ出る黒い闇が…。」

「っ…。」

雁夜はイヤでも匂いで感じ取つた。この匂いは間違いなく、あの時冬木の大災害を招いた黒い泥だと。

「この呪いこそが、聖杯の中身。」

ギルガメツシユがセイバーを見る。

「救いと引き換えに、呪い、最悪の形で願いを成就させる聖杯の本質よ。」

「…ギルガメツシユ。その聖杯の呪いを使って、貴様は何を望む？」

セイバーが聞いた。

「望み？ そうさな…。我が望むことなど何もない。だが…、今の私の関心はお前だけだ。」

ギルガメツシユの背後から無数の武器が現れた。

「ああ…、ようやくこのときが来た。今までずっと考えていたぞ、セイバー。嫌がるお前をどう組み伏せ、アレを飲ませるか。泣き噎（むせ）ぶ顔を踏みつけ、その腹が身籠もるほどの泥を飲ませ、狂い死ぬに耐えきれず、私の足下にすがりつく、その穢れきった姿をな！」

「…悪趣味な奴だな。」

「どうとでも言え、ゲテモノ。貴様には用はない。行くならばささと失せろ。言峰は、この先の祭壇にいる。」

「…いいのか？」

「貴様もだ、小娘。雑魚のライダー共々行け。」

「いいえ。行かないわ。」

「はい。桜。」

「ふん！ セイバーに貴様ごときが加勢したところで結果は同じよ。」

桜が後ろに控え、ライダーは二つの短剣を構えた。

セイバーも剣を構える。

「桜ちゃん！」

「行ってください、雁夜さん！」

「セイバー、行ってくる。」

「はい、シロウ。」

雁夜と士郎が、言峰の元へ走った。

二人がいなくなった後、少しの静寂……。

「先にそこなライダーと小娘を潰せば、我と二人きりだな。」

「そうはさせません。」

「簡単に殺せると思わないでください。」

ライダーは、魔眼の封じを外した。

「ふん、魔眼か。三流の手だな。」

「ですが、効果が無いわけではないでしょう？　揺らいでいますよ、

貴方の背後の武器が。」

「…ふん。」

実際、ギルガメツシユの背後に浮いていた武器のが僅かに揺れていた。まるで支えを失いかけているように。

ギルガメツシユは、余裕の笑みを崩していないが、まったく効果が無いわけではないようだ。

次の瞬間、シユンツと闇から帯状の影が現れ、ギルガメツシユの背後にあつた武器を絡め取りひと束にした。

「むっ…。」

「私の存在も忘れないように。」

桜が両手を構えていた。

奪い取った武器が桜の傍にガランガランと落ちた。

「小娘…、その汚い影で我の宝を…。」

次の瞬間、一本の武器が凄まじいスピードで射出され、桜に向かって飛んでいった。

それをライダーが短剣で弾いた。

「気が変わった。小娘、貴様の腸を切り裂き、ぶちまけ、その門にでも飾ってやろう。そうすれば、さぞやあのゲテモノも怒り狂うだろうて。まあ…、生きていれば話だな。」

「雁夜さんは、負けない!」

「それはどうかな?」

「?」

「いかに最強などと謳う生物といえど、しよせんは生物。この世全ての悪（アンリマユ）に、耐えられるか?」

「えっ?」

「桜!」

次々に投擲されてくる武器を、ライダーが次々に防ぐ。

「桜、気をしつかり！」

「あ、ああ……。雁夜さん……。雁夜さん……。！」

桜の直感が警報を発していた。

ライダーは、ギルガメッシュと、桜を交互に見て……。

「桜……。行ってください。」

「えっ……。？」

「心配なんでしょう？ 雁夜を助けられるのは、きっと、あなただけです。行ってください。」

「で、でも……。」

「私はだいじょうぶです。さあ、早く！」

「行かせると思っているのか？」

「させん！」

「チッ！」

セイバーの攻め込みに、ギルガメッシュは、背後に出現させた剣を掴んで迎え撃った。

その隙に桜が走って行った。

「……………ここ、は…。うぐっ！」

目を覚ました雁夜は、左半身を蝕む激痛に呻き、そのまま倒れた。

「あ…。」

「目を覚ましたか？」

「ぞ…。」

声が出た方を見ると、そこにいたのは、臆現だった。

二度と見ることも聞くことも無かった忌まわしい存在が、目の前にいる。

そのことに雁夜は驚愕した。

「ほれ、さつきと聖杯を取ってこんか。でなければ、桜を解放しはせんぞ？」

しわくちやの顔を歪めて笑う。その顔と声が、本物であることを雁夜は認識した。

なぜ？

っと思いつつ、左足を引きずりながら、立ち上がり、外へ出る…。

「なっ！」

そして鏡を見て驚いた。

その顔は、左半分がただれ、左目は白く濁り、髪の毛は真っ白になっっていた。

その姿は、蟲蔵に身を落としたあとの有様だった。

「どうして…？」

自分はたしか、そうだ…、バースーカーは？

バースーカーの姿を確認しようとすると。

「ゲホッ！」

腸からせり上がる激痛と喉から吐き出された血に、雁夜は、膝をついた。

「い…、行かなきゃ…。桜ちゃんを…。桜ちゃん？」

確か自分は桜を救ったはずだ。

なのになぜ……、桜が死んだような目でこちらを見ているのだ。しかも、幼い頃の桜が。

すると場面が急に変わった。

まるでジェットコースターにでも乗ったような浮遊感と共に落下する感覚を感じて、顔を上げた。

「君が家督を拒んだことで、間桐の魔術は桜の手に渡った。」

「ときお……。」

「……それでも、私は君という男が許せない。血の責任から逃げた軟弱さ、そのことに何の負い目を懐かぬ卑劣さ。間桐雁夜は、魔道の恥だ。」

「なっ……。」

次の瞬間、自分を見下す時臣が放った炎が全身を包んだ。

どうして? どうして? どうして!?

自分は桜を救ったはずだ。臓現を殺したはずだ。時臣にも報復しただはずだ。

なのになぜ、こんなことになっている?

そして、場面がまた変わった。

炎に焼かれる痛みが消えた。

「貴方なんて、誰かを好きになったことなんてないくせに!」

「あ……。」

気がつくやうに雁夜は、葵の首を絞めていた。

「あ、ああ……、ああああああああああ!!」

どうして俺は、後悔している?!

葵にはもう未練は無いはずだ。

なのに、この胸を抉る、虚無感と痛みはなんだ?

『これは、お前が辿るはずだった道だ。』

どこからか、声が聞こえた。

「馬鹿な人……。」

桜ちゃん?

「お爺さまに逆らうから……。」

待ってくれ…、行っちゃいけない！

「分かりました。お爺さま…。」

行っちゃダメだああああ!!

なのに雁夜の手は桜には届かず、蟲の海に飲み込まれた。

『これは、おまえが辿るはずだった末路。』

『これは、お前が、あの寄生虫の女王たる娘に出会わなかった本来の道筋だ。』

『お前は何も救えなかった。何も得られなかった。奪っただけだ。』

嘘だ…嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ!!

俺は、確かにツツジと出会って、救ったんだ！

それが偽りだったっていうのか!?

じゃあ、俺は…俺は…

「雁夜さん！」

ううう…。ああ、甘い夢を見せるな…。

こんなことなら、最後まで悪夢で終わらせろよ。

「雁夜さん…。」

俺は何も救えなかった。

ツツジと出会ったからこそだったんだ…。

バオーさえなくてもなんて、少しでも考えたことはあった…。

でもすべて間違いだった…。

俺一人じゃなにも…。

「雁夜さん…。見て。」

聞きたくない…。成長した桜ちゃんの声なんて聞きたくない。

「私を見て。現実を見て！」

……………桜ちゃん？

「そっだよ。私だよ。桜だよ。」

桜ちゃん？ 本当に桜ちゃんなのか？

ああ、きつとまた甘い夢だ…。

「雁夜さん……。確かに貴方は、何も出来なかつたかもしれない。でも、それは、別のお話。目の前の現実を見て。私は、ここにいるよ？」

貴方が助けてくれた、私（桜）は、ここにいる!!」

ああ……。……。……。温かい……。

「私を……。……。……。見て!!」

ああ、桜ちゃん!!

「投影魔術……。貴様……。いったい……。?」

雁夜は、その声でハッと目を覚ました。

そしてすべてを思いだす。

自分と士郎は、言峰のもとへたどり着いた。

そこでは、イリヤが空いた孔に磔にされており、解放しようとしたら、綺礼が現れた。

背後に、聖なる池を邪悪な泥に染めたモノがあり、そこから、おびただしい数の触手のような泥が蠢き、自分達を捕えんと動き出した。

自分はすぐにバオー・武装現象を発動させ、回避していった。

だが……。

『おっと、言い忘れていた。コレは、とりわけ生き物に敏感でね。』
つと綺礼が言った時、地面に染みこんだ泥に足をとらわれ、捕まった。

そして、泥を……。いや、聖杯そのモノを汚染する、元凶たる、『この世全ての悪（アンリマユ）』により、あり得たかもしれない世界に引きずり込まれたのだ。

自分を抱きしめてくれているぬくもりは桜だった。

そして、周囲の泥を消し去る聖なる輝きの元は……。士郎が手にしているエクスカリバーの鞘。それは、〃全て遠き理想郷（アヴァロン）

“。この世界における最強の守りだった。

それは、あらゆる事柄を遮断する。例えば…、それが、空間を切り裂くような一撃であろうとも、全ての悪意そのものであるろうとも。

『バオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

自分達を包囲していた闇が飛散したと同時に、雁夜が咆吼し、腕の刃をふるって、その瞬間、腕の刃を切り離して投げた。

綺礼は、それを腕でガードしようとして腕ごと切られ、そのまま胸に刃が刺さった。

「……………ふっ。」

しかし、綺礼は倒れず、それどころか、口元を歪めて笑った。

「残念だったな。この身体は…、もはや、この程度では死んでくれんのだ!」

「ああああああああああ!!」

「!!」

駆け込んできた士郎が拳を振りかぶる。

綺礼が、残る腕でそれを迎え撃とうとした直後、その腕に無数の針が刺さり、着火した。

「ぐう!」

バオーの髪の毛針の自然発火により腕が燃える。

その瞬間、士郎が振りかぶった拳にありつただけの魔力を込めて、綺礼の胸に刺さっている雁夜の腕から切り離された刃の折れた断面に拳を叩き込んだ。

バチンツと魔力のほとばしりが、綺礼の身体に走った。

「……私も、衰えたものだな…。」

そう言い残し、どこか満足げな顔で、綺礼は、ゆっくりと仰向けに倒れていった。

そして、綺礼が倒れたと同時に、孔に磔にされていたイリヤがゆっくりと降りてきたので、士郎がその身体を受け止めた。

上を見ると、小さくもないが大きくもない黒い泥が渦巻く孔が残っていた。

これこそが聖杯。この世全ての悪に侵された汚染された聖杯。

すると、そこへ。

「シロウ！」

セイバーが駆けつけてきた。

ライダーは…いなかった。

「セイバー…。ライダーは？」

「先輩。」

すると桜が、右手の甲を見せた。そこには令呪が無かった。

それが示すことはただ一つだ。

「そうか…。」

「シロウ。最後の令呪を。」

「セイバー…。」

「アレ（聖杯）は、マスターの命がなければ破壊できません。令呪を使つてください。」

「……………分かった。」

セイバーが剣を構える。

その間に、桜と雁夜は、二人の後ろに移動した。

そして…。

「セイバー…。聖杯を破壊してくれ。」

「…はい！」

令呪が輝き、セイバーが剣を振るった。

孔が両断され、一瞬、悲鳴のような声が聞こえたような気がしたが、孔は切り裂かれたことで形を保てなくなり、やがて…飛散し、消えた。

不気味に赤く染まっていた空が、元の夜の闇と取り戻し、そして…朝が明けた。

「っ…。」

土郎は、自分の手の令呪が完全に消えたのを確認した。

「これで…。」

「ああ、すべて終わったんだ…。」

「では、私達の契約はここで終わりです。」

セイバーが土郎の方に振り向いた。

「貴方の剣となり、敵を討ち、御身を守る……。その約束が果たせてよかつた……」

「セイバー……、本当に、よくやってくれたよ。」

「……最後にひとつだけ、伝えさせてください。」

「俺からもだ。」

「シロウ……、私は貴方を……」

「俺は、セイバーを……」

愛している

二人の声が重なり、そして、セイバーは、笑顔と共に、夜明けの光に溶けるように消えた。

「先輩……」

「だいじょうぶだ。桜ちゃん。」

元の姿に戻った雁夜が桜の頭を撫でながら言った。

「でも……」

「衛宮くんは、そんな弱くはないさ。」

そう言って、雁夜は微笑んだ。

こうして、第五次聖杯戦争は、終結した。

最終話 新学期

第五次聖杯戦争の終結。

この聖杯戦争を機に、聖杯戦争そのものの無期延期が決まった。それは、冬木の管理者たる遠坂凜が、聖杯の汚染を訴え、そして教会側がそれを確認し、大聖杯の解体が決定されることになったのだ。

言峰綺礼がいなくなったことで、新たな監督者が派遣され、第五次聖杯戦争による被害を立て直し、情報操作を重ねた。

霊脈である柳洞寺なども、立て直され、そこに新たな僧侶達が派遣された。

そして、キャスターなどに魂食いなどをされた人々も、社会に復帰していき、あれだけの被害を出したにもかかわらず意外にも死傷者は少なかったらしかった。

……だが、戻らない者もいる。

例えば葛木だ。彼は、元々流れ者であつたうえに、キャスターと結ばれていた。それゆえにその死は隠蔽され、行方不明とされた。元々ふらりと現れた人物だったため、関わりのある人々はそれについて納得した。

セイバーもライダーもいなくなり、ギルガメッシュも消えて、日常からサーヴァントが消えた。

よく遭遇していたギルガメッシュがいなくなり、そのことにツツジは、少し寂しそうにしていたが、いずれは別れは来るのだからと納得していた。

セイバーと愛を誓い合った士郎であるが、桜曰く、学校でもそのことに対する悲しみはないようで、意外にも普段通りらしい。

あの時の別れで、すべてを清算したのだろうかと考えられる。

そして……。

「ほら、桜ちゃん。早く学校行かないと。」

「分かってますよお。」

「ほら、口。卵の黄身がついてるぞ。」

「あ、雁夜さんありがとう。いってきまーす！」

「いってらっしやい。」

学校に行く桜を、雁夜とツツジが見送った。

「はあ…。早いな…。」

「ほらほら、まだ老け込むには早いよ。」

「うるせえよ。」

「凜ちゃんも、もうこっちには極力関わらないって言ってたんだし。そろそろ…。」

「だー！ それは別だ！」

凜が、雁夜とツツジを殺す気でいたことは、本人の口から聞いた。そのことで、桜が凜に憤慨したが、凜は、桜に勝手にしろとそつぶを向いたのだった。

影を使役する魔術を使う桜の噂を聞いた魔術教会が何度か訪ねてきたが、ある日を境に来なくなった。

どうやら遠坂が裏で手を打ったらしいことを、ツツジが匂いで感じた。

凜は、もう桜が雁夜から絶対に離れないということを確認したというより：諦めたようだ。

遠坂に戻したところで、今度は別の魔道の家に行かなければならない。見守るためとはいえ、それが桜の幸せに繋がるとは思えなくなったのだろうと、ツツジは考えた。

けれど、桜がいないところで、雁夜とツツジに、凜は…、もしもバオーを悪用するなら自分が許さないと釘は刺してきた。

その代わり…、極力関わらないと約束もした。桜のことを幸せにしないと許さないとも言われた。

「あー言われたんだから、しっかりしないとね。」

「ああ…。」

「気にしてるの？」

「えっ？」

「……この世全ての悪（アンリマユ）が見せた、本来の道筋を。」

「……気にしてないって言ったら嘘になっちゃうな。」

「何かがひとつ違えば、あり得たかもしれない道筋か……。じゃあ、私が雁夜と出会ったあの時が、その道を違える一番のきっかけだったってことかな？」

「かもな……。」

「……後悔してる？」

「ごうかい？ 馬鹿野郎……。後悔するかよ。俺は、俺が手に入れた、今（現在）を生きるだけだ。」

「そうだね……。」

「もちろん……。桜ちゃんと一緒にな。」

「そうだね。」

「ところで、今日の昼飯は、何にするんだ？」

「朝ごはん食べたばかりなのに、もう昼ご飯？ この食いしん坊さん。」

「悪かったな。」

そんな会話をしながら、家の中に入った雁夜とツツジだった。

この世全ての悪が見せた、あの本来の道筋の方が正しかったのかも知れない。

けれど、今得た現実と未来が間違っているかと言ったらそんなこととはないはずだ。

そう信じて、雁夜は、今日も生きていこうと決意する。

「雁夜さん。」

「桜ちゃん。」

……愛する少女と共に。